PRO WRESTLING ALBUM 52 ガッツ・シリーズNo.18

リングに咲いた恋人たち'85

おもいっきり女子プロレス

The World of Gals Wrestling

輝きたくって燃えちゃうの！

ガッツシリーズ

ジャンボシール付き

定価500円
恒文社発行

信用販売21年 皆様の2120ツー・ワン・ツー、ニチブ！夢をかなえる電話番号。

わずか1分➡ お急ぎの方は、どうぞ

年中無休 東京03(720) 大阪06(575) 2120（にちぶ） 横浜045(432)3733

キミも日武永久会員になってトクしちゃおう

● 住所・氏名・TELを明記の上切手100円送れば永久会員登録をし、現金券並び特典つき商品カタログ一式を年2回、永久に無料配達します。左記の商品購入者は即登録中!!

モテる男になる2大企画

1 米国宇宙飛行士協会 ロバート・M・パワーズ が書面指導 初心者～上級者総合 完全通信講座誕生

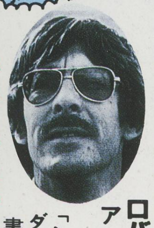
フルセット わずか11,600円 独占公開

安 耐久500kgの特殊全ナイロンロープ使用。

あなたに合ったあなただけの完全通信指導

簡単 ただ押すだけで重量調節 最大パワー275kg。

格安 フルセットで11,600円 初級者から上級者までの完全指導書付



私が責任もって書面指導!!

ロバート・M・パワーズ
アメリカ宇宙飛行士協会会員
「シャトルから宇宙へ」ダイナミックセラーズ刊 書店でお求め下さい。

宇宙飛行士の逞しい肉体は科学運動によって生まれる。この事は私のNASAにおける経験でもいえる事です。書面指導により責任をもって指導致します。

世界に誇る宇宙飛行士のトレーニング方法で有名なあのスペース・アポロで

思いのままに肉体改造!!

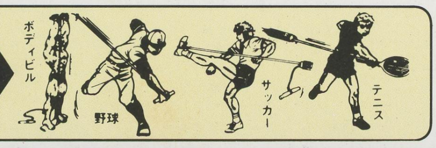
全長 180%
重量 560 g
パワー0～275kg

NASA（米国航空宇宙局）の宇宙飛行士トレーニング方法で、あまりにも有名なあのスペース・アポロ。総合(初級者用～上級者用）完全フルセットでしかも通信指導を受けられるので、思いどおりに肉体改造できる。本器は狭い宇宙船で無重力状態の過酷な条件下でも運動できる程コンパクトで重量わずか560g。しかしくり出すパワーは最大で275kgとスゴイ。100種以上の運動の中からレベル（初級～上級）に合わせ段階ごと指導（個別）を受けながらできるので、初心者でも安心。今スグ女の子にモテル肉体に改造しパワフルなボディを造り上げよう!!

フルセット装備

<フルセット内容>●スペース・アポロ本体●フットプレート1●ハーネス1●収納バッグ1●金具4●初級者～上級者用マニュアル1冊●収納ケース等。

スペース・アポロ トレーニング（ほんの一例）



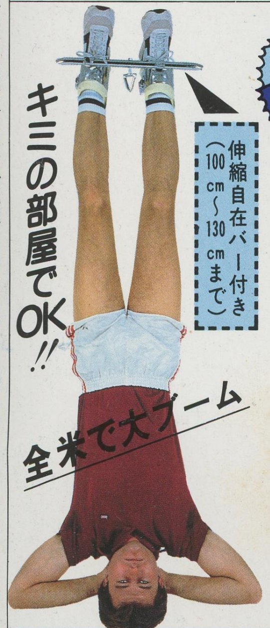
一年間完全指導

提供・協賛 NASA（米国航空宇宙局）

A-163 スペース・アポロ	
通信指導費用	11,600円
分割払い価格	12,200円
分割払金	1,220円×10回
（支払期間10ヵ月）	送料600円

2 1日1回たった1分で全身筋肉がつく!! 指導付!!

独占販売 ジュピターブーツ・セット 特典付



キミの部屋でOK!!

全米で大ブーム

伸縮自在バー付き（100cm～130cmまで）

● 安全
● 簡単
● 確実
● 効果

全米でなんと25万人愛用の反重力ブーツ日本上陸!!使い方はカンタン。ブーツを足に装着、ロープを用いて吊り下るだけで空中トレーニングができ、全身筋肉を短時間、短期間にパワーアップしてくれる。吊り下るので伸脚効果もある。
★ジュピターブーツは、コンピューターカットしてお届けします。注文時には足サイズを必らず明記して下さい。

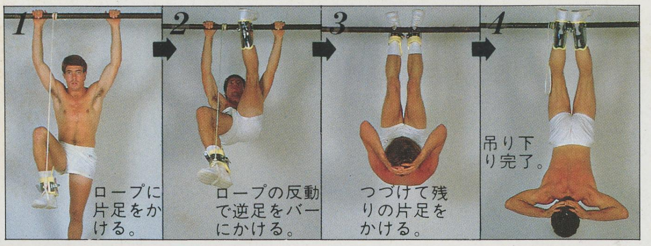
あなただけのコンピューターカットをしてお届け!!

驚異のジュピターブーツ3大特徴

1. あなただけのコンピューターカット仕上げ
2. 耐久力 300kgの安全設計
3. 装着個所は足首を痛めないウレタン加工

話題騒然

ジュピターロープを用いての吊り下り方法（バー、ロープセット付）



ジュピターブーツセット・フル装備

●ジュピターブーツ本体1 ●ジュピターバー1●ジュピターロープ1本●説明書

大特典 今なら自宅にカンタンにセットできる伸縮自在ジュピターバー（定価 4,500円）がセットされています。

A164 ジュピターブーツ・セット	
現金(一括)価格	16,000円
分割払い価格	16,800円
分割払金(月)	1,680円×10回
送料無料	（支払期間10ヵ月）

バイオアカデミー特別5大ビッグプレゼント

①豪華カタログセット ②必勝ハチマキセット ③現金券セット ④血液型各種トレーニング表 ⑤バイオリズムコンディション表

只今特典品贈呈中

横浜日武6周年記念セール中！

東急東横線 国鉄横浜線「菊名駅」そば!!
☎横浜045(432)3733
（朝10時～夜7時）

西口下車 きくな駅 至横浜 至渋谷 つなしま街道 至五反田 横浜日武

デンワ1本、ハガキ1枚の小さな勇気がキミの現在、将来を明るくさせる！

注文方法

①ハガキによる注文

40円 〒145 東京都大田区東雪谷5-12-6 日武会（にちぶかい） 65係

○商品番号・商品名
○金額（送料）・個数
○一括払い、又は分割払い〔回数〕
○郵便番号・住所
○氏名（年令） ㊞
○TEL番号
○保護者名 ㊞

◀ハンコとデンワを忘れずに！未成年者の方は保護者名と認印も押して下さい。

X大特典 上記商品の購入者には5大ビッグプレゼントの他に市価2,500円の品物がもらえる特典付。（未知商品満載資料一式）

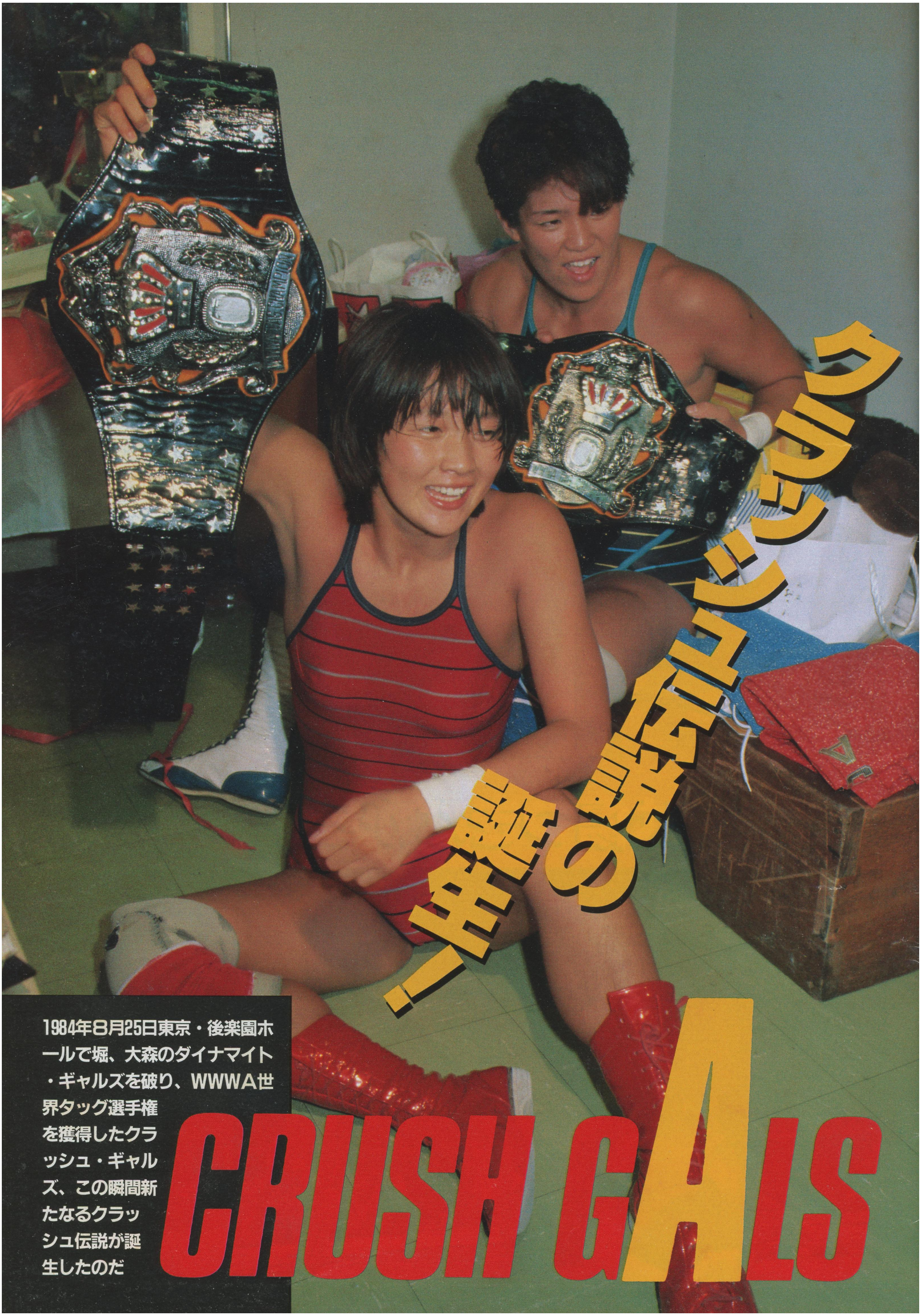
②前払いによる注文　左記のように必要事項を紙に記入の上、現金書留、コガワセ、切手（額面）のいずれかでお送り下さい。（切手の割増不要）★受注後3日以内に現品発送。
★この広告の有効期間は、本紙発売後6ヶ月間です。

商品先渡し・代金アト払い・返品7日以内OK（返送料本人負担）

注文先 日武会（にちぶかい） 65係 〒145 東京都大田区東雪谷5-12-6

JADMA 社団法人日本通信販売協会会員

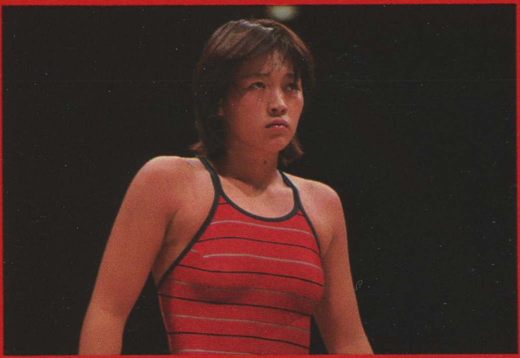
無料 トクする情報室開設!!今、右記へデンワすれば、日武ウグイス嬢による商品説明の情報サービス実施中!!もちろん、そのままデンワ注文もできます。今すぐどうぞ➡東京03(761)2139



クラッシュ伝説の誕生!

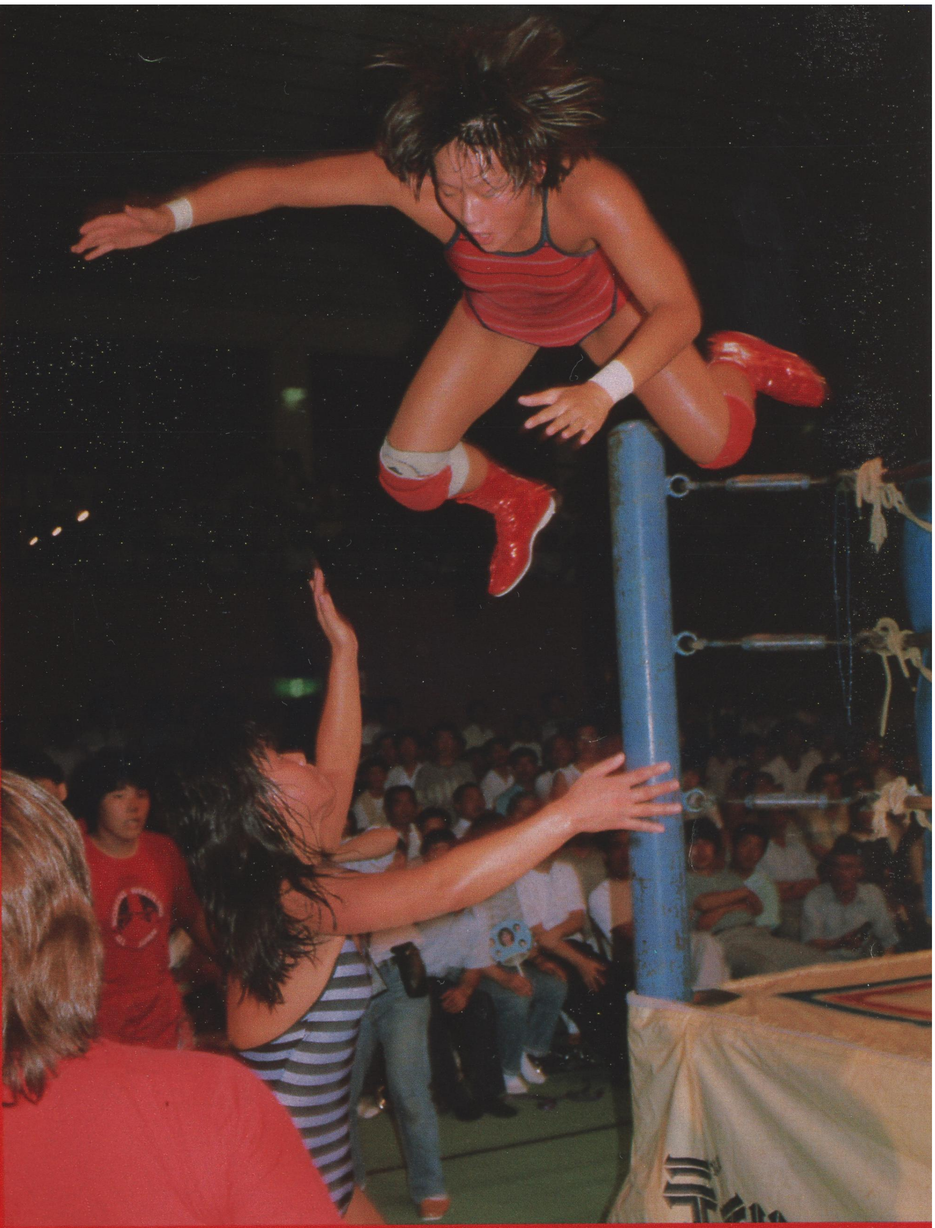
1984年8月25日東京・後楽園ホールで堀、大森のダイナマイト・ギャルズを破り、WWWA世界タッグ選手権を獲得したクラッシュ・ギャルズ、この瞬間新たなるクラッシュ伝説が誕生したのだ

CRUSH GALS



▲闘志をムキ出しにする千種のこの表情が、たまらなく好き！というファンが多い

▲そのパワー、潜在能力の大きさでは千種を上回るといわれる飛鳥

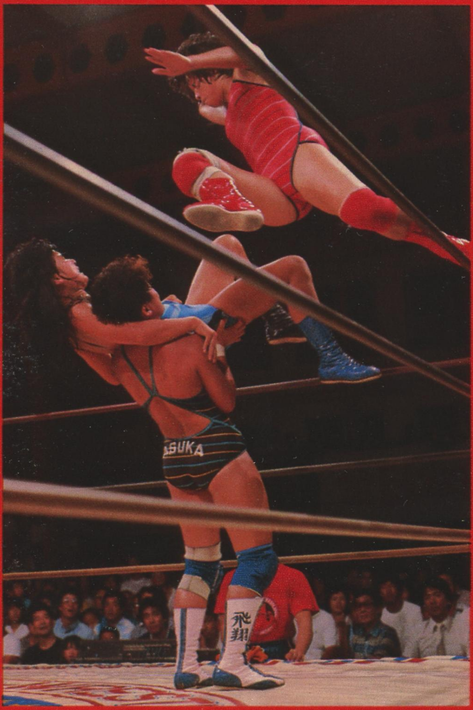


▲コーナーポストから場外の山崎五紀めがけてプランチャを見せる長与、とにかく彼女のファイトはモーレツに積極的なのだ

ギャルズは傷つきながら飛翔した！

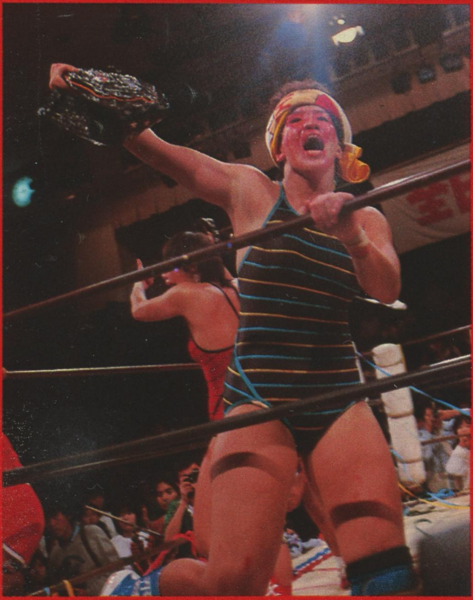
◀これがWWWAタッグ奪取の瞬間となった長与のジャーマン・スープレックス

'84年の女子プロレス界、長与千種、ライオネス飛鳥の2人が巻き起こしたクラッシュ・ギャルズ旋風はホントーに凄かった。8月25日に念願のWWWA世界タッグ王座を獲得したあとも、彼女たちはまだまだ上昇し続けている。クラッシュ伝説は果たしてどこまでその闘いの神話をひろめていくのか？



▲クラッシュ・ギャルズの得意技のひとつである立体攻撃

▲極悪同盟の超ラフファイトに怒りを爆発させるライオネス飛鳥



◀「やったーっ!!」ＷＷＷＡ王座を防衛した飛鳥は歓喜の声

クラッシュ・

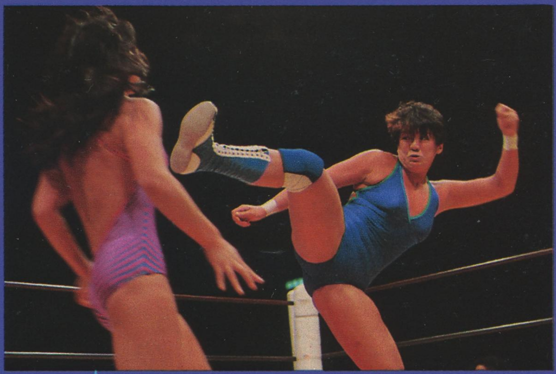
▲試合の前にビタミン剤の注射。若い２人だけど、闘いはホントにハードなんですネ

▲流血にもめげず、デビル雅美にサソリ固めを決める

空手技はCGコンビの過激ファイトの証明だ！

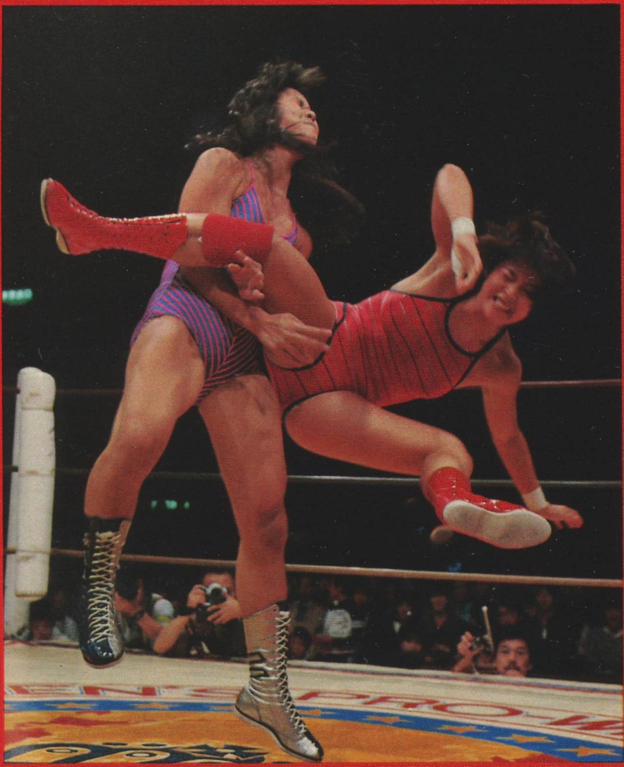
▲去年の中頃、合同練習の合間に２人は本格的な空手トレーニングを始めた

クラッシュ・ギャルズのナウいイメージに大きな効果を上げたのが、２人の空手殺法。もともと空手２段の長与は一時柔道着スタイルでリングに上がっていたほどの空手ギャルだがタッグ結成以来、飛鳥の方も練習を重ね、いまでは有段者並みのダイナミックな蹴り技を随所に出せるようになった。並みの男ならこのキック一発で気絶しちゃうよ！

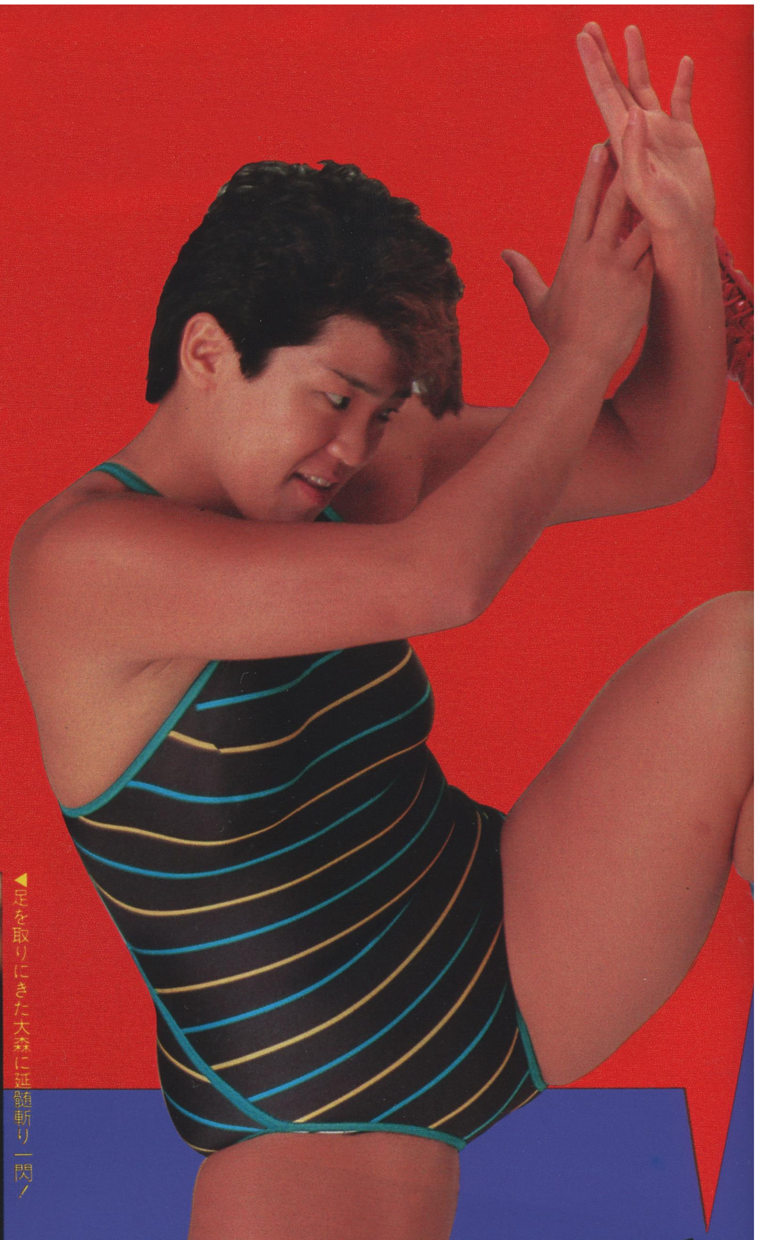

▶まだまだ荒っぽいが、パワーあふれる飛鳥の横蹴り

▶本格的に空手を取り入れ始めた頃の長与千種。立野記代のボディー目がけて正拳打ち！

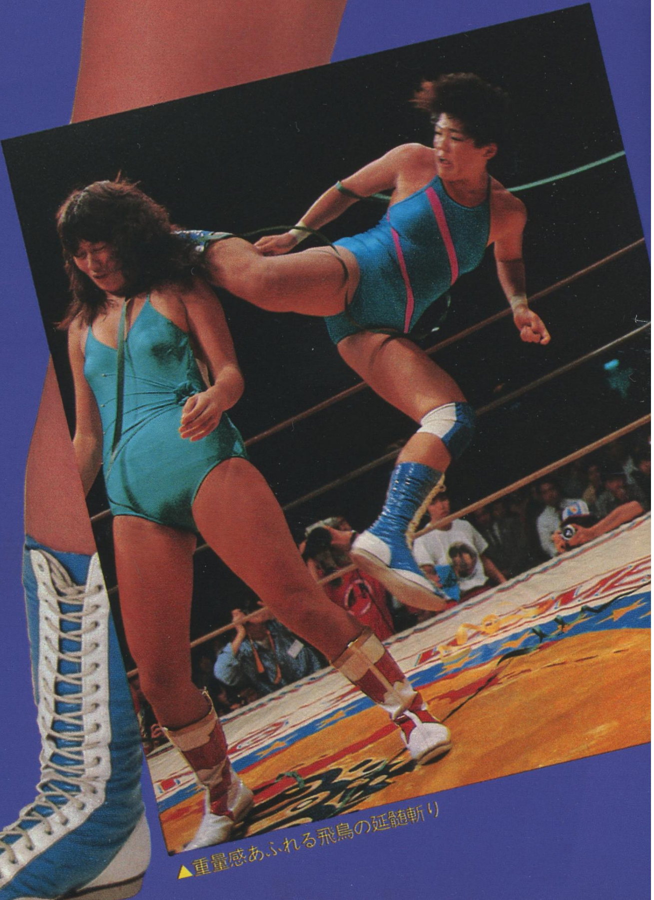
▲中学時代すでに空手２段だった長与の伸びのあるハイキック

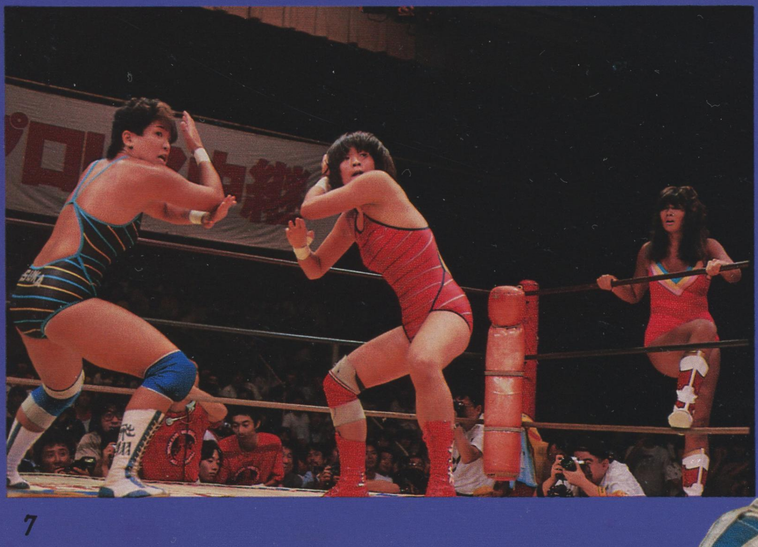


前田日明並みのレッグラリアートが相手のボディーにメリ込む



◀足を取りにきた大森に延髄斬り一閃!





◀コンビネーションプレーも抜群のダブルチョップ!

◀重量感あふれる飛鳥の延髄斬り

長与と飛鳥のオフ・ザ・リング

最近はリング内だけじゃなくってリング外でも超ハードスケジュールをこなしているクラッシュの2人。やれテレビだ、サイン会だ、歌の吹き込みだと休む間もない分きざみの行動。人気者になるってホントーに大変なことなんだなー、と思っちゃうのです。

▲忙中閑あり、とゆーわけでお日さまの当たる野原の真ん中でボケーッとしている時間も必要なのだ。それにしてもCGの2人、ちょっと食べ過ぎじゃないの？

▲恒例の正月番組85年『レコード10社対抗オールスター大運動会』に初出場したクラッシュは得意の分野だけに大活躍、見事『ビクター』を優勝に導いたのでした

▲『クイズ、ドレミファドン！』に出演したクラッシュ、残念ながら優勝はできませんでした

▲「わーん、三枝のバカ！」なんてゆーとる場合じゃない、これは『三枝の爆笑美女対談』にクラッシュが出演した時のひとコマなのだ

▲長与の一番弟子ともいえる小倉由美をキャッチャー役にしてソフトボールに興じる千種

▲CGコンビ、ついにバンドを結成！ なんてことはないのだ

▲クラッシュの初レコーディング『炎の聖書（バイブル）』も大ヒット！

◀11月9日、日立大会で左足首を負傷した千種だが、表情は意外に明るい「先が長いからアセっても仕方ないの。でも早く出たいなァ」と本音もチラリ

明日の壁を蹴り飛ばせ!! 千種!

父親の繁さんと母親のスエ子さんに囲まれて上機嫌の長与、「うーんとお金をかせいで、2人に家を買ってあげる」のが彼女の夢なのだ

CONTENTS

今の女子プロレス界 私たちが主役だよ!

★カラー・グラフ
吹き荒れるクラッシュ・ギャルズ旋風――3

クラッシュ革命の原点にタイムスリップ――12

フォトストーリー
女子プロの伝統否定で誕生した千種と飛鳥――14

メジャー雑誌を総ナメにしたクラッシュ――18

いま、きらめくライオネス飛鳥の世界――22

ホットホットインタビュー 長与千種
"強い人間"になりたかった!――24

女子プロ大百科――27

女子プロファン・フリートーク――28

女子プロレスラー図鑑――36

ジャガー横田のひとり言
"引退するまで、私は負けない!"――43

堀&大森よ、くやしさの中から立ち上がれ――46

関西地方でクラッシュ人気が爆発するのは、'85年だ!――48

リアルタイム・オブ・イッキ
山崎五紀ストーリー――50

極悪ギャルズはこう叫んだ
"叩きつぶしてやる!"――52

女子プロ中継を10倍オモシロく見る法――54

若手の小倉由美にあの佐山サトルを見た――56

千種にそっくりな、ある少女レスラー――58

★カラー・グラフ
女子プロレスラー大集合――59

クラッシュ革命の原点に、いまタイムスリップだ!

この試合のあとデラプロ誌の企画で初の対談。「型破り宣言!!」を打ち明ける2人だった

昭和58年1月4日、東京・後楽園ホール

▼全日本選手権

ライオネス飛鳥VS長与千種

殺気立つ千種は、試合前に飛鳥を挑発。この試合に賭ける執念は凄まじかった

クラッシュ・ギャルズ誕生、その原点はこの試合なくしては語れない…それは、昭和58年1月4日、東京・後楽園ホール。時の全日本チャンプ、ライオネス飛鳥に長与千種が挑戦したお正月決戦であった。

今でこそ、飛鳥と千種の対決は、女子プロ界にとって最大のドリームマッチである。だが、当時の飛鳥と千種は、前座の中をいったりきたり中途半端な立場に置かれていた。

おそらく、この試合がなかったらいまだに若手と中堅の板バサミにあって、くさっていたかもしれない。クラッシュ・ギャルズとは、遠い夢の話で終わっていたかもしれない……。

誰もが期待していなかった試合で2人は〝完全燃焼〟した。

そこには「アスカ・コール」も「チグサ・コール」もなかった。五色の紙テープが乱れることなく、2人を本当に応援するファンのみが集まっただけだった。

当然、観客の視点はリング上の闘いだけをみつめる。大観衆ではなかったが、多くのプロレス好きが女子プロレスに新しい波を感じずにはいられなかった。

試合前からつかみ合い、ゴングと同時に張り手打ちの応しゅう。女子プロレスでは、顔面攻撃は禁区地帯だ。

しかし、自己表現が一気に爆発した飛鳥と千種は、暗黙の扉をこじ開け激しくぶつかり合ったのだ。

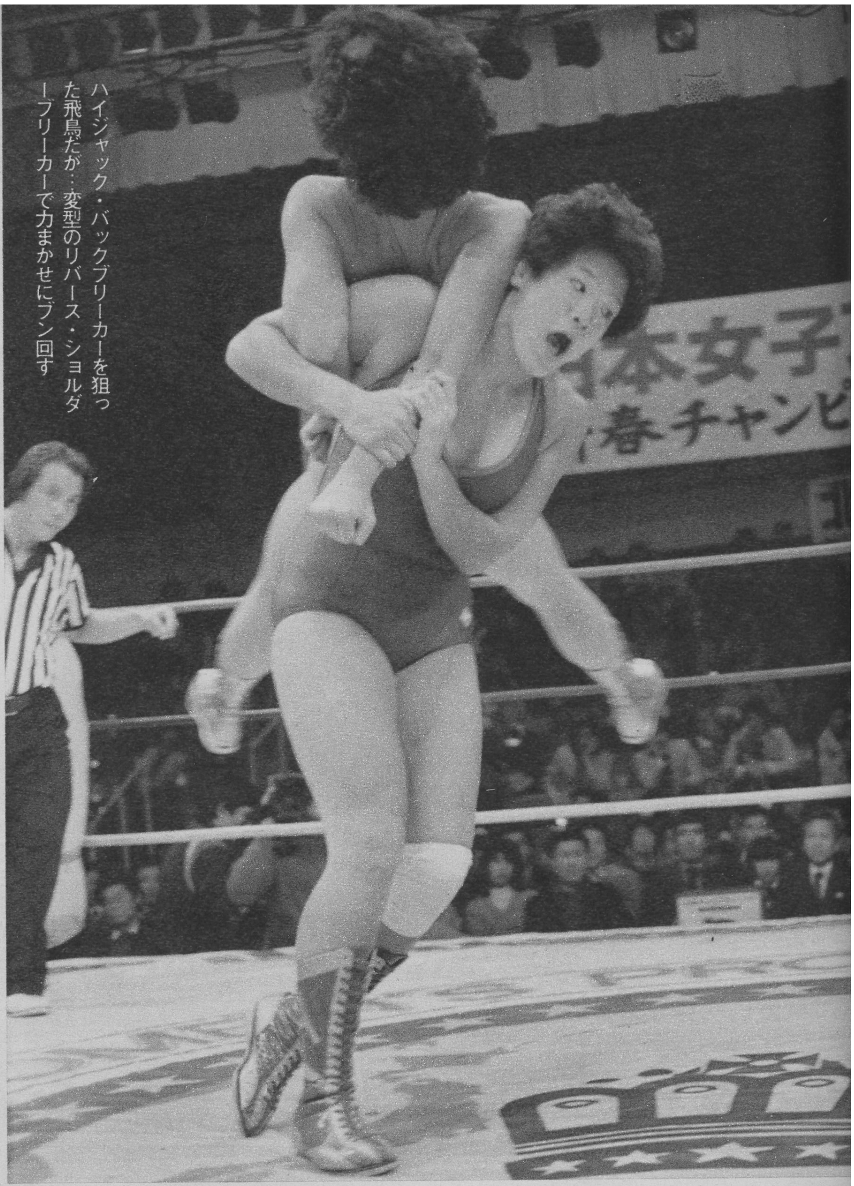
ビデオラックから、この試合のビデオを引っ張り出して見るがいい。たった2年、いやこの2年が大きく2人を成長させているのだ。力の差は歴然としていた。飛鳥のパワーが千種の気迫を完全に制したのである。千種の善戦マッチだった。

試合の中で、千種がリバース・デスロックから鎌固めを見せるシーンがある。意欲的な千種らしい場面だ。また、飛鳥に見舞ったまわし蹴りはアゴに直撃！　女子格闘技者への布石でもあったのだ。

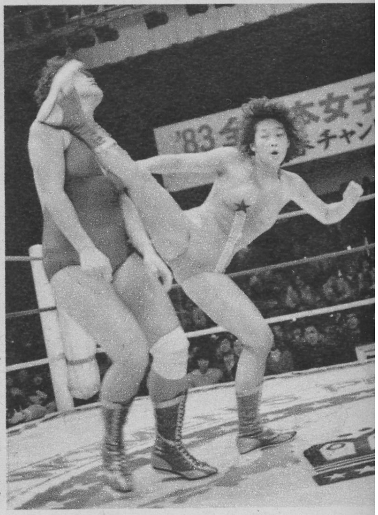
この試合で2人は、お互いのプロレス観を肌で確かめ合ったのである。

闘いがアートする——「こんなにスカッとした試合は初めて。ガンガンぶつかり合う試合をしたい！」と飛鳥と千種は、目に見えぬ糸で結ばれたのだった。だから、この昭和58年1月4日をクラッシュ革命記念日と我々は命名したい。

そして今一度、クラッシュ・パワーのスタートをプレイバックしてみよう！

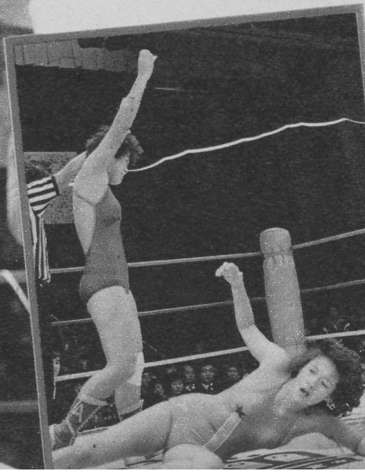


ハイジャック・バックブリーカーを狙った飛鳥だが…変型のリバース・ショルダーブリーカーで力まかせにブン回す



▶若手時代、千種が唯一得意にしていたのが、このまわし蹴りだ。飛鳥のアゴを打ち砕く理想のプロレス第一歩だった

◀場外で飛鳥を蹴りまくる千種。飛鳥は左ヒザ脱臼のピンチに見舞われた。凄絶シーンの再現はいつの日か…!?



▶場外で千種にコブラを仕掛ける飛鳥は積極的な試合運び

◀熱闘18分23秒…飛鳥は千種に完勝。クラッシュ・ギャルズ誕生の序曲が始まった

を否定することで誕生した
ラッシュ・ギャルズ

昭和58年12月にタッグトーナメントで見事優勝に輝いたクラッシュ。この瞬間が彼女たちの第2のステップになった

▶58年7月…飛鳥と千種は力強く、クラッシュ・ギャルズ結成宣言

自分を表現できなかった千種と飛鳥の前座時代のファイト！

「女子プロレスの流れを破壊する！」という革命宣言は、従来の女子プロレスを否定することからスタートした。

ベビーフェースとヒールに分断された、年功序列のプロレス。その時代、その時代にスタイルが多様に変化しようとも、乗り越えることのできない鉄の壁だ。

これまでの女子プロレスは、この壁＝掟がどっしり根をはやしておりレスラーたちは、安住のバランスを保っていたのだった。

57年から58年にかけては、特にこの傾向が強く、ジャガー軍団（ジャガー横田、ミミ萩原、ジャンボ堀など）VSデビル軍団（デビル雅美、タランチェラ、マスクド・ユウら）の完全な対抗戦が、明けても暮れても展開されていたのである。

ライオネス飛鳥と長与千種は、当然のごとくジャガー軍団の雇用兵として、鉄砲玉のような位置でしかなかった。また、力もなかったのだ。

〝機械的な試合〟と酷評されていた飛鳥は、思うような自己表現ができずスランプの真っ最中。全日本チャンピオンの肩書きさえあったものの、外人レスラーの引き立て役に甘んじていたのが実情であった。

一方の千種は、もっと悲惨だった。慢性化した左ヒザの負傷が重なり、得意のキックも満足に出来ない状態。ひとり道場に現れては、悔し涙を流し、唇を噛みしめながらサンドバッグに八ツ当たりしていたものだ。

そして、来る日も来る日も、松本香（現ダンプ松本）とのシングルマッチ。千種にとって松本は最も、嫌な相手だった。

何しろ技を受けないで、攻めるだけ。松本は気が小さいところがあり受け身をとるのが大の苦手だった。

ジャガー軍団にあって、2人の占める立場は上から数えて5、6番目。つまり、上から順番にチャンスが回る制度では、彼女たちはいつまでたっても冷や飯を食うだけだ。

長いスランプで、すっかり〝闘う自閉症〟にかかってしまった飛鳥はじっと耐えるだけ。この時点では、明確な答えが飛鳥には得られなかったのである。

クサりきっていた千種には一つの光明が差しかかっていた。58年4月英国から1人の若者が帰国した。新日本プロレスの前田日明である。

前田は、12種類のスープレックスをひっさげ、帰国第1戦でポール・オーンドーフと対戦。初公開のスロイダーから、リバース・アームソルト（風車固め）で完勝していた。

後日、この試合のビデオを見た千種は強い衝撃を受けた。「頭から真っ逆さまに落ちる、凄いスープレックスだ。私もこんな試合がしたい」他人に影響を受けやすい千種は、前田日明という若者に興味を抱くのだった。

前田は前座時代〝クラッシャー〟の異名を持つ過激な新人だった。空手出身を生かしての、ラウンディング・ニールキックは強烈で仲間を次次にぶっ壊していたものだ。

何かの雑誌で、前田がクラッシャーと呼ばれていたことを知った千種は、ひとりで「私は、クラッシュ・

フォト・ストーリー・オブ・クラッシュ

女子プロレス ク

クラッシュ・ギャルズ—直訳すると"破壊する娘たち"とでも言えばいいだろうか。今や全国区の人気者になろうとする彼女らにとって、これほどピッタリのネーミングもあるまい。

今年で誕生30周年を迎える日本の女子プロレス。その歴史と伝統、いやすべてを否定して誕生したのが、このクラッシュ・ギャルズだった。

昭和58年8月27日、東京・後楽園ホール。地下の控室から場内へと向かう階段を一歩一歩、踏みしめるようにして上るクラッシュ・ギャルズ。扉を開けると、そこには"新時代"が待っていた

ギャルだ。クラッシュ・ギャルと呼んでほしい」と口癖のように言っていたのだ。

だが、いくら千種が「クラッシュギャルだ!」と叫んでみても、誰も見向きもしてくれない。

クラッシュ・ギャルズという名前に会社は抵抗を示した

千種はこのころ、積極的にいろいろな技にトライした。長州オリジナルのサソリ固めや、見よう見まねで覚えたハーフ・ハッチを試合に組み入れ自己の流れを作り上げようとしたのだった。

研究心旺盛な千種は、ひと旅が終わるたびに広報担当の小川氏がストックする男子プロレスのビデオを見ることが楽しみだった。それは、女子プロレスの中にいて自己の理想を貫けない辛さの反動なのかもしれない。

そんな千種の気持ちを、一早く察したのが同志の飛鳥だった。正月の後楽園決戦で闘った2人は、肌と肌でお互いのプロレスを感じとった。

「もう、2人で立ち上がるしかない!」決起した飛鳥と千種は、ペアを組むことで勝負を賭けた。

自らに火をつけ、燃えることのできる千種との出会いは、飛鳥にとって幸せだった。千種が燃えることで飛鳥は自己暗示をかけ、より以上に燃えようと努めたのである。

昭和58年8月27日、後楽園大会でWWWAタッグ選手権が行われることが発表された。当時の王者は、ジャンボ堀と大森ゆかりの"ダイナマイト・パワーコンビ"だ。

この挑戦者はすんなり、飛鳥と千種に決まったのだ。デビル雅美&タランチェラと、劇的な4番勝負の末勝ち取った王者チームに、格好の日本人挑戦チームが見つからないこともあったのだ。会社はもちろん期待していないし1回きりのチームとしか考えていなかった。

しかし飛鳥と千種は本気だった。ジャガー軍団VSデビル軍団の対抗戦に嫌気がさしており、もはやこの型から抜け出る時期が来ていた。

時代のけん引車にはそれにふさわしい名前が必要だ。クラッシャー・ギャルズ、クラッシャー・クインビーズなどの候補があったが、いつの間にか"クラッシュ・ギャルズ"に落ち着いたのである。

このクラッシュ・ギャルズというチーム名は、飛鳥と千種の自己主張の表れだ。今でこそ、胸を張ってクラッシュ・ギャルズと名乗っているが、結成時は外野席から批判の声が多く上がったものだった……「クラッシュ・ギャルズという意味が、ファンには理解できない」とか「言いにくい名前」と、会社の上層部は何度も改名を思案したのである。

「クラッシュ・ギャルズは、私たちの財産。たとえ名前一つであろうと私たちの夢を乗せているんだ。もし、この名前を使えないんなら、解散してもかまわない」飛鳥と千種にとって、初めて会社に挑戦状を送った、いわば魂の証明なのだ。

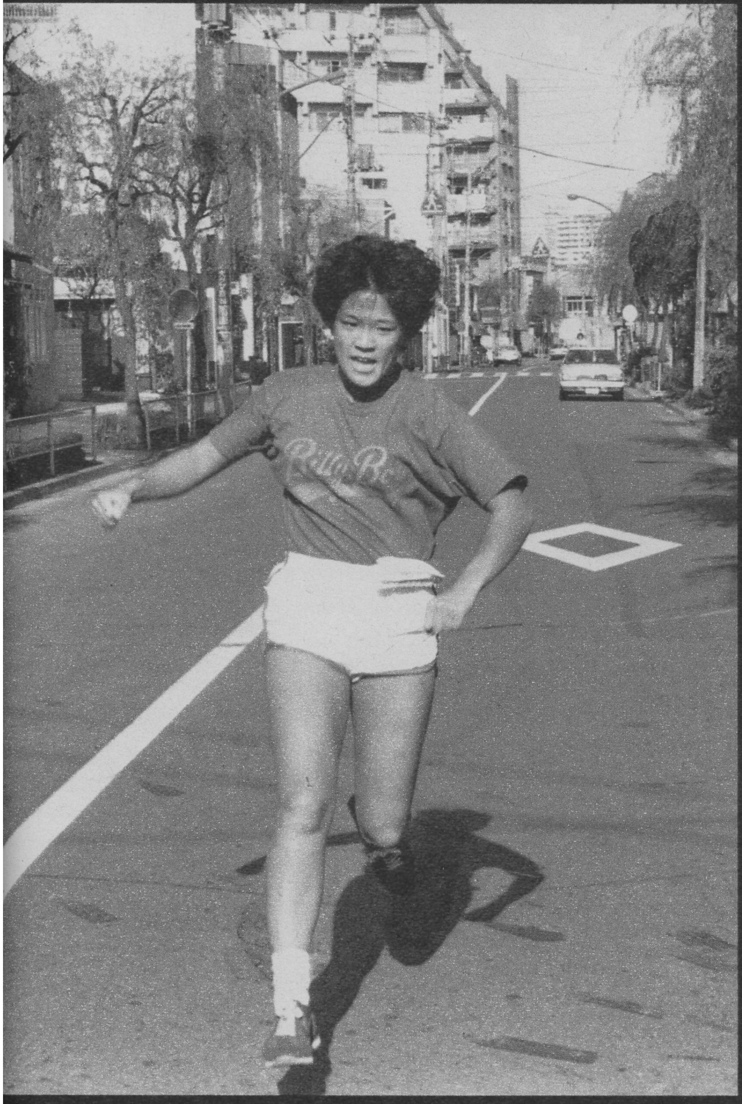
千種と飛鳥を決定的に結びつけた合同合宿の空手特訓!

クラッシュ・ギャルズとして、飛

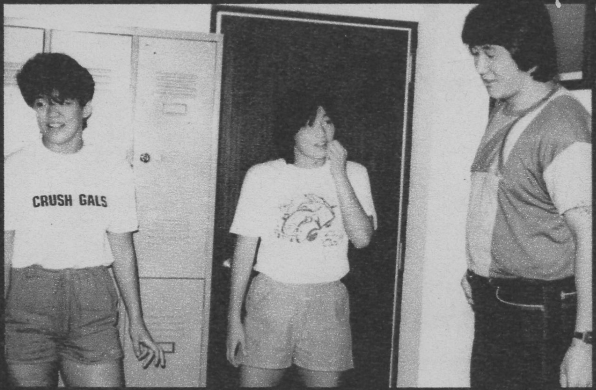
フォト・ストーリー・オブ・クラッシュ

▲前座時代はみんな仲間だった。左から松本、飛鳥、ユウ…こんな光景は今では絶対見られない

▲TV番組で水谷豊と共演するため、勢揃いしたジャガー軍団。飛鳥と千種は、この輪から抜け出したくて仕方なかった



▲飛鳥は常に工リート街道を突き進んだ。毎年、恒例のマラソン大会でも花形だった



▲前田日明のレスリングを見た時から千種の頭にクラッシュ・ギャルという言葉がひらめいた、という

鳥と千種を決定的に結びつけたのは8月の合同合宿だった。西伊豆の稲取で特訓を開始した女子プロ一行だったが、この輪から完全に抜け共闘を組むのであった。

その2人に、最高の助っ人が出現した。デイリースポーツの格闘技レポーターとして、女子プロレスに接していた山崎照朝氏が特別コーチとして招かれたのだ。

山崎氏といえば、いわずと知れた極真の竜の異名を持った本物中の本物である。第1回全日本選手権にも優勝し、キックボクサーとしても大活躍した、極真空手の天才だった。

小学校時代から、沖縄小林流空手を習っていた千種はともかく、飛鳥にとって空手はまったくの未体験ゾーンだ。

昼間は、他の選手と合同練習した2人だったが、夜になると山崎氏の部屋に集合し基礎から、空手を覚えた。山崎氏の部屋は、マスコミ各社の記者、カメラマンと同室であり、皆が温かく空手の練習を見守った。

日ごろ、プロレス流の練習に慣れたマスコミ陣にとって、この時の空手は、ひときわ新鮮なものに映ったに違いない。

飛鳥も千種も必死だった。練習の鬼である山崎氏にとって、朝も夜もなかった。でも、なぜか2人は空手を教わることが楽しくて仕方なかった。

なぜなら、自分が強くなるのが、手に取るようにわかるからである。たった一つの、突きや蹴りにしろ他の選手が休んでいるうちにマスターした大切な技だ。

人間、本物に出会うと妙に素直になるものである。

早朝、台風が訪れる稲取の海岸で3人は海岸を走り、雨に打たれながら気持ちを確かめ合ったのだ。山崎氏にとって、2人のかわいい愛弟子の誕生である。

合宿が終わってからも、2人は山崎氏の主宰する大宮の道場に積極的に通った。その年の暮れ、タッグトーナメントで優勝したクラッシュ・ギャルズをひと一倍喜んだのは誰あろう、山崎氏である。

山崎氏は優勝のプレゼントとしてポケットマネーを奮発。銀座のスエヒロで、400ポンドもあるステーキを2人に御馳走したのだった。

このステーキの味は、2人にとって格別なものだったに違いない。

「先生、タッグのチャンピオンになったら、何をプレゼントしてくれますか?」と無邪気に質問する2人に、山崎氏は「う〜ん、何にしようかな」と頭をヒネる。師弟関係ならではのいい光景だった。

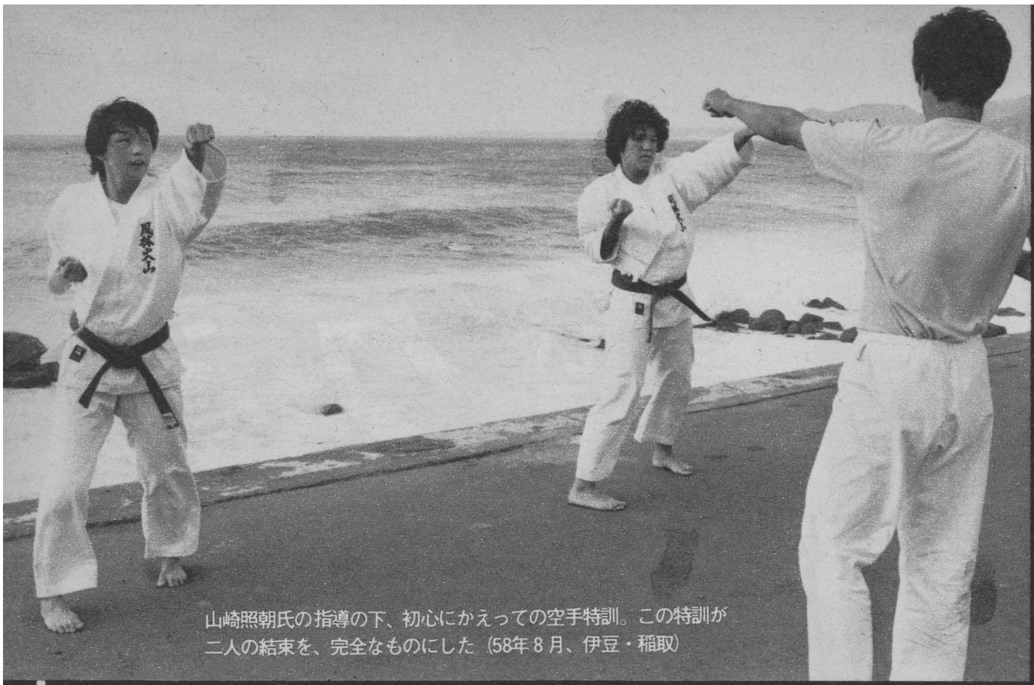
クラッシュ・ギャルズを語るとき山崎氏の存在は、いつも背中合わせなのである。

同じプロレスをめざす2人が、分身のように同じ技を使いこなす。そのために、同じヘアスタイルにした。

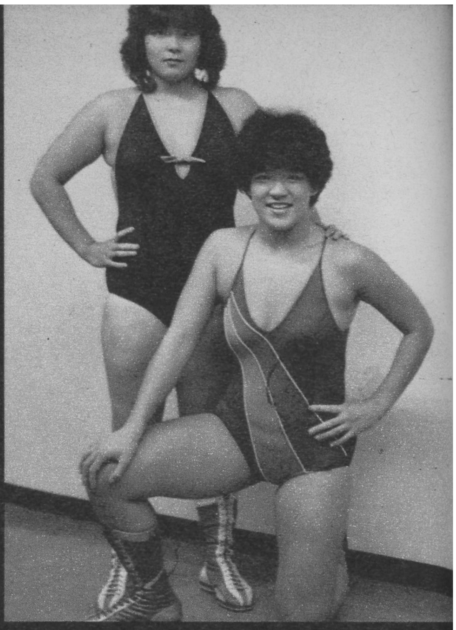
その仕草は、フレッシュだった。千種のストレートに伸ばした、ザンバラ髪を飛鳥が同じようにまねた。真新しいチャイニーズ・ガウンが、いっそう新しいものにチャレンジする2人を光らせたものだ。

時代の申し子、クラッシュを単なる消耗品に終わらせるな！

2人がかりのコンビネーション攻撃。維新軍やマンハッタン・コンビに見られるニュー・プロレスが、女



山崎照朝氏の指導の下、初心にかえっての空手特訓。この特訓が二人の結束を、完全なものにした（58年8月、伊豆・稲取）



▲新人時代からライバル関係にあった飛鳥と大森。一時はペアで売り出すプランもあったほど

▶松本にいたぶられる千種。新人・千種にとって、松本の存在は圧力そのもの（56年5月）

◀マスクド・ユウとの2連戦に勝ち、全日本チャンピオンになる飛鳥だったが…スランプのドン底で笑顔はみられない（57年7月）

▲千種の初タイトルといえば、全日本ジュニアのベルトだ。空手着にベルトが初々しい（57年5月）

子プロレスに導入された。プロレス・ファンは、すんなり歓迎した。

そこに、ダブルの回し蹴りや、ダブルの突き…クラッシュ・ギャルズは時代の申し子になったのだ。

だが、すべてが順風満帆にいったのではない。飛鳥と千種の心の中に様々な葛藤があったのも事実だ。

まず飛鳥は、千種と同じヘアスタイルを拒否した。飛鳥としては、同じヘアスタイルでいる限り個性が発揮できない―と考えた。

ペアとしての頂点が、終着駅でないだけに、対個人となった場合、飛鳥は苦悩したのだった。

結成当時は、お互いに何でも話し合った。夢を語る時、それが正夢になる思いだったからだ。

だが、忙しくなると顔をつき合わすわりには、じっくり話ができなくなる。意見が、うまく伝わらなくて精神状態が悪化したこともあった。

でも、どんな親しい友でも心身ともパーフェクトに合体することなんてありえない。ごく当たり前の論争が芽ばえて不思議はないのだ。

「何か問題があったら、その場で解決する」それが、クラッシュ・ギャルズの精神だ。

運命共同体。この言葉はクラッシュ・ギャルズを的確に表している。

本意か不本意か、クラッシュ・ギャルズは歌手としてもデビューし、女学生のアイドルになった。

そのため、いくつかの問題が生じているのだ。まず第一に、練習する時間がないこと。よく一般誌の質問で「一日、何時間練習しますか?」と聞かれる。

その問いに、ウソの答えができない2人は、どんなに忙しくても取材の間をぬって練習をしたものだ。

本人たちが一番、気にしていることは「第2のビューティ・ペア」と周囲が見ることだ。

ビューティ・ペアは、女子プロレスに大きな光を与えた偉大なる巨星だった。彼女らも、ビューティ・ペアに憧れて、女子プロレスに入門した。

レスラーとタレントを両立させていたビューティ・ペアは、クラッシュ・ギャルズの道先案内人かもしれない。

だが2人は言う。「私たちは、いつどこでも女子プロレスラーでいたい。タレント業は二の次」。この姿勢がある限り、クラッシュ・ギャルズは不滅だ。踏まれ続けてきた飛鳥と千種は今クラッシュ・ギャルズの名のもとに、立ち上がった。

女子プロレス界に古くからつちかった概念を吹き飛ばし、ストロング・スタイルの女子格闘技めざして始動する。

「山崎先生のもとでじっくり空手を練習したい。でも、その時間がないからなあ〜」売れっ子の悩みは尽きない。忙しくなればなるほど、クラッシュ・ギャルズの顔色は悪くなる。せわしなく過ぎる月日。「アッというまに1年が過ぎてしまった…」と飛鳥がフトこぼした。

レコード、ドラマ…彼女たちにとって、それがベストではない。そして、クラッシュ・ギャルズを消耗品にしてはならない。彼女たちは、自由きままに泳がせなくてはツブれてしまう危険性があるからだ。

顔が知れ渡ると、今まで振り向きもしなかった人達がチヤホヤする。

だが、けっして自己に、そして他人に驕らず、ウイニング・ロードを突き進むべし。

メジャー雑誌を総ナメにしたクラッシュ・ブーム!!

いまや、クラッシュ・ギャルズが登場したことのない雑誌はない、といっていいくらいの超人気なのだ！

ラシ・ヤズ

「人を殴ったり殴られたりするのが好きなんです」。女子プロレス第3期黄金時代をになう、傷だらけの過激な火の玉ファイター

女子プロレスが7月9日から、毎週月曜の7時から30分のレギュラー番組になった。その反応次第で、秋からは1時間ワクに広げる予定もあるという。

ビューティ・ペア引退以来、再び戻ってきた女子プロレスの黄金時代である。その原動力となったのが、クラッシュ・ギャルズ、ライオネス飛鳥、長与千種の20歳と19歳のコンビである。ふたりともビューティ・ペアに憧れて16歳の時に女子プロレスに入門した。

ビューティ・ペアは、強くて、きれいで、はなやかで、夢を与えてくれる女の人がいるって教えてくれたんです

ふたりは平凡な生活をして平凡なOLになりたくなかった

好きなことをやって食べていけて、夢や希望を自分の手でつかまえることができるんです

それが女子プロレスだという。

だから、年間約[illegible]試合、日本各地をツアーしながら、景色を楽しむこともなく、ホテルと体育館しか記憶に残らないハード・スケジュールも苦にならない。酒、煙草、男厳禁の3禁生活にも耐えられるという。

女子プロレスは男の子とつきあったらダメになると、ふたりは信じている。

旅に出てる間に、ほかの女にとられちゃうんじゃないか心配で集中できなくなるし、顔や体にキズがつくんじゃないかと思うと、ちょっとしたワザでも怖くなってしまいます

ふたりともヒザの脱臼癖を抱え、飛鳥は額に9針縫う怪我を持ち、長与はアゴがずれてしまっている。

それでも、強くなりたいから頑張る。

芸能界と女子プロレスは違う。女子プロレスは男子プロレスと同じ格闘技であることをわかってもらうために戦い続ける。

若くてけなげで、かわいい女の子が、強さを求めて、今輝いている。

●ライオネス飛鳥　本名北村智子　1963年埼玉県生まれ　得意技ジャイアント・スウィング等
●長与千種　1964年長崎県生まれ　空手2段　得意技　ローリング・ソバット、サソリ固め等

100

↑「PLAYBOY日本版」第111号（集英社）
白黒グラビア1ページで「FRONT RUNNERS」の1人として

↑「週刊TVガイド」8月24日号（東京ニュース通信社）
白黒グラビア2ページで「"輝きたい"から闘い！歌う！」

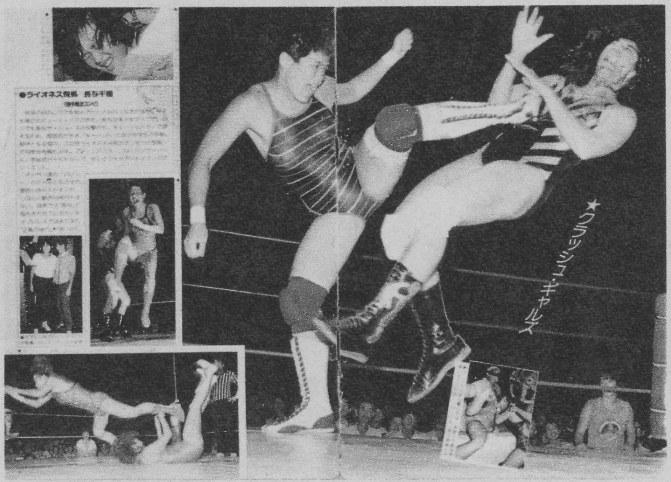
→「ザ・テレビジョン」7月13日号（角川書店）
本文4ページで「女子プロレス見参！クラッシュ・ギャルズ誕生秘話」。巻頭特集だ！

←「GORO」9月27日号（小学館）
白黒グラビア4ページで「SHINING ザ・女子プロレス」

なんてったってクラッシュ・ギャルズなのであります。とにかく、その雑誌でのモテモテぶりといったら、正直いって猪木、馬場両先生も、とーても立ちうちできない凄さなのであります。

メッタヤタラと雑誌に出まくって、もはや残っているのは「文芸春秋」と「ニューズウイーク」ぐらいじゃないかと思われるほどのもんなのじゃ。もう、これでクラッシュの雑誌ジャック王座は決まりなのだ!

↑「週刊プレイボーイ」第34・35合併号(集英社)
カラー4ページで。著名なカメラマン、マイク岡田氏が石垣島で特写

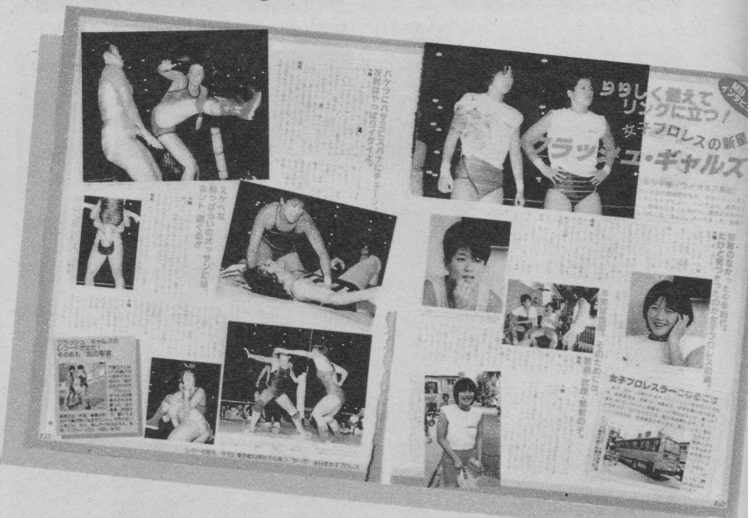


↑「週刊現代」8月25日号(講談社)
カラー9ページで「いま女子プロレスは超過激なドラマだ」

↑「週刊アサヒ芸能」9月6日号(徳間書店)
白黒グラビア3ページで「歌って踊ってザ・ファイト」

↑「週刊大衆」9月17日号(双葉社)
本文4ページで短期シリーズ①「勝負に生きるプロフェッショナル・ギャル」

↑「プチセブン」9月21日号(小学館)
白黒グラビア2ページで「命短し、過激せよ乙女!!」



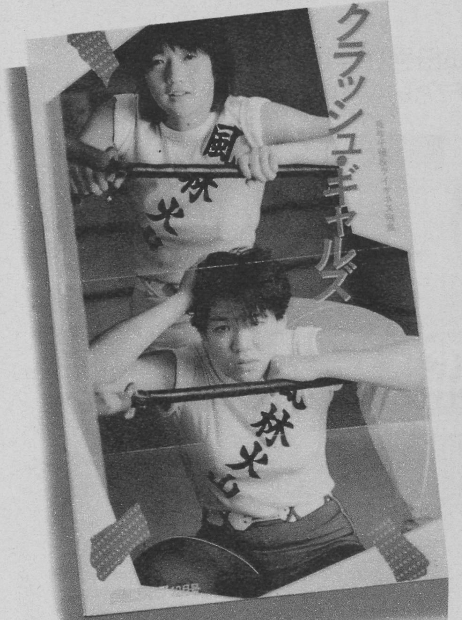
↑「マイ・バースデイ」創刊80号(実業之日本社)
カラー2ページでMBインタビュー「りりしく燃えてリングに立つ!」

クラッシュブームをメジャー雑誌に見たのだ

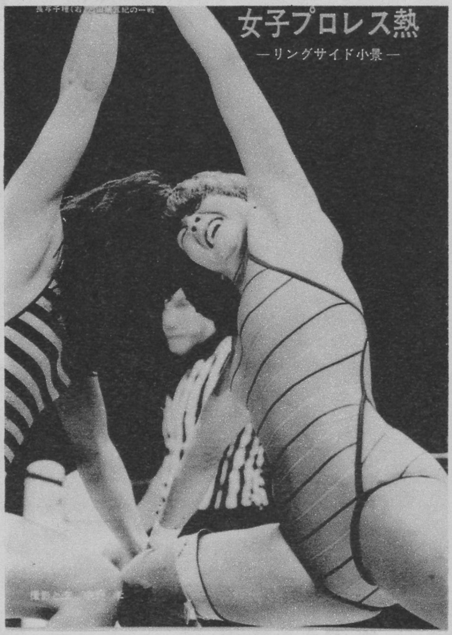
↑「non・no」10月5日号（集英社）
白黒グラビア6ページでNON・NOなんでも調査隊シリーズ「女子プロレスラー栄光獲得の秘密」

↑「GALS CITY」12月7日号（主婦の友社）
本文3ページでクラッシュギャルズ物語「ケンカした、泣いた、恋もした」

↑「毎日グラフ」11月18日号（毎日新聞社）
白黒グラビア6ページで「魅力の周辺クラッシュギャルズ」



↑「ポップティーン」12月号（富士見書房）
カラー・ピンナップに登場！



↑「婦人公論」12月号
白黒グラビア4ページで「女子プロレス熱―リングサイド小景―」

↑「BOMB！」12月号（学習研究社）
本文7ページで「クラッシュ・ギャルズ㊙おもしろ大百科!!」

↑「写楽」11月号（小学館）
カラー6ページで「スポーツドキュメント・女子プロレス　闘う女の裏表」

↑「週刊朝日」10月26日号（朝日新聞社）
本文6ページで連載⑫ルポルタージュ芸能人時代「女子プロレス一家　クラッシュギャルズたちの愛社精神」

Ⓣ「月刊平凡」11月号
カラー２ページで「オール女子プロレス選手名鑑」

Ⓣ「月刊明星」11月号（集英社）
カラー２ページで「クラッシュ・ギャルズ炎の生活聖書」

Ⓣ「週刊女性」10月23日号（主婦と生活社）
白黒グラビア２ページで「女子プロレス界アイドルスター誕生」

Ⓣ「週刊明星」11月１日号（集英社）
白黒グラビア５ページで「乙女心は…プロレス命！

Ⓣ「ティーンアイドル」12月号（講談社）
白黒グラビア４ページで「女子プロレス異常人気の震源地クラッシュ・ギャルズ」

Ⓣ「マイ・アイドル」12月号（小学館）
カラー２ページで「過激な戦士か？夢見る少女か？」

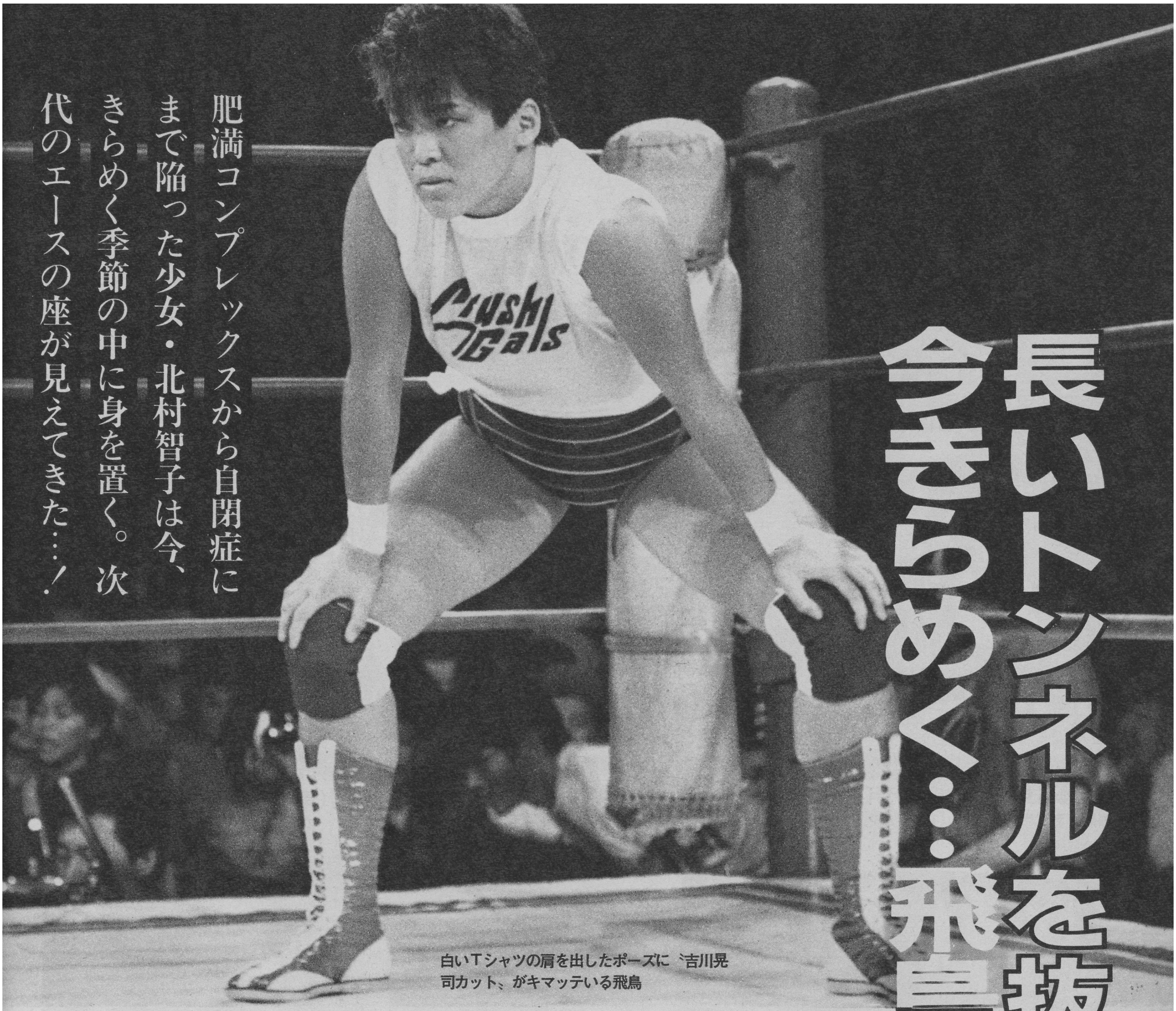
Ⓣ「DOMAN」創刊号（スポーツアイ）
カラー４ページで「戦うことだけが青春の聖書だ！女子プロ新世紀」

Ⓣ「セブンティーン」11月27日号（集英社）
カラー３ページでクラッシュの24時間まるかじりごいっしょルポ「飛んで、跳んで、翔んで…」

長いトンネルを抜け出し、今きらめく…飛鳥の季節が到来!!

自己主張した唯一の部分があの〝吉川晃司カット〟だ

肥満コンプレックスから自閉症にまで陥った少女・北村智子は今、きらめく季節の中に身を置く。次代のエースの座が見えてきた…！



白いTシャツの肩を出したポーズに〝吉川晃司カット〟がキマッテいる飛鳥

WWWAとUWAの世界二冠王に君臨するジャガー横田も、いつしかその王座を明け渡すときがくる。ならば〝史上最強の女子レスラー〟とうたわれるジャガーを倒すのは、いったい誰なのだろうか？　あるとき全日本女子プロレスの松永高司社長に、それとなく尋ねてみた。

「その答えは、ひとつだよ。デビル雅美が何度も挑戦しているけど、結果は同じだろうと思う。体力的には、ジャンボ堀や大森ゆかりの方がはるかに上だが、これも精神的に弱さがある。ましてや、長与千種では勝てない。残るは……飛鳥、ライオネス飛鳥だよ。ジャガーに勝つ可能性を秘めているのは飛鳥しかいない、と私は見ているんだけどね。飛鳥だったら、3回やれば1回はピンフォールをとれるよ」

他の関係者に聞いてみても、同じ答えが返ってきた。たしかに、スパーリングでの強さは定評のあるところ。それを証明するのはクラッシュ・ギャルズのパートナー、長与だ。

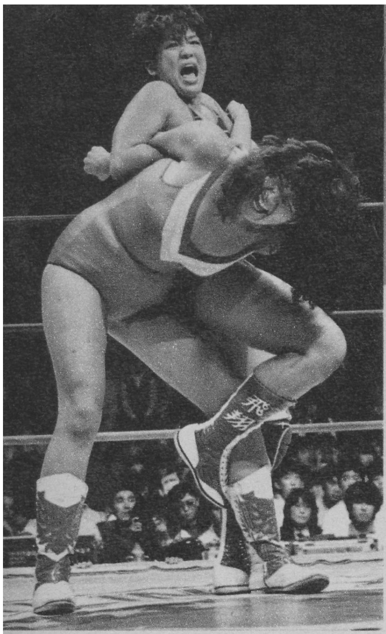
「トモは、おっとりした性格だけど、ああいうタイプが本気になったら、一番こわいんです。私なんか、震え上がっちゃいますよ。スパーリングの強さでは群を抜いているし、よく自分で太りすぎとかいっているけどプロレスラーとしては最も理想的な体の持ち主だと思いますね」

クラッシュ・ギャルズは〝人気の長与、実力の飛鳥〟といわれる。だが2人が街を歩くと、人目をひくのは飛鳥の方らしい。長与はカワイが、まぁ、どこにでもいる顔だ。肩幅の広さに特徴があるとはいえ、服を着ていたら、ちょっと見た目には女子プロレスラーとは思われない。

飛鳥は身長170センチ、体重70キロと男顔負けのがっしりした体格で、なんといっても、あのヘアー・スタイルがセールスポイントになっている。

いまでこそ「カッコイイ！」と年下の女の子からの圧倒的な支持を受ける飛鳥だが、最初、あのヘア・スタイル——彼女がファンである歌手の吉川晃司に似せたものらしい——は評判が悪かった。

もともとはジャッキー佐藤二世の異名通り、ジャッキーに似せてパーマをかけていたが、クラッシュ・ギャルズを結成した当時、長与に合わ



◀30分ドローなのにTV中継では少ししか放送されなかったのが惜しまれる対ジャンボ堀戦

せてストレートにした。ところが、すでに現在のヘア・スタイルに変えてしまったところ、非難ゴウゴウ。「似合わない」「タッグチームの色合いを出すためにも、長与と同じ方がいい」

と、髪型をストレートに戻すことを飛鳥にすすめる声は多かった。しかし、それだけ周囲がアドバイスしても、飛鳥は断固として変えることはしなかった。おそらく、飛鳥の心の中には「千種に合わせたら、自分の個性が出せない。千種の強い個性に消されてしまうから。せめて外見くらい違うように…」との気持ちが働いたのではないか。

それは今にして思えば、功を奏したという感が強い。クラッシュ・ギャルズの血液型は飛鳥がA型、長与が0型で、自己主張の強い長与に対し1つ年上の飛鳥が感情をおさえていることで、関係が成り立っているようだ。名タッグチームには、この関係が多く、長州力（0型）とアニマル浜口（A型）がそうである。

思うに、あのヘア・スタイルは飛鳥が〝自己主張〟した唯一の部分である、そう思えてならないのだがいかがなものだろうか。

関係者の中には「女性らしさを強調するために、髪を長くしろ」と強要するムキもあるらしいが、そんな風潮の中で、飛鳥のヘア・スタイルは逆に光って見えるから不思議なもの。その人間全体が輝けば、あらゆる部分が認められてくるというわけで、そのうち〝飛鳥カット〟が流行するかもしれない。

クラッシュが、さらに飛躍するための3つのテーマ！

さて、クラッシュ・ギャルズが1985年に一段と飛躍するためのテーマとして①飛鳥と長与の対決②WWA世界タッグ選手権をめぐるライバル・チームの出現③リーダー格の飛鳥のジャガーへの挑戦——の3つがあげられると筆者は考える。

①は、お互いの力、持ち味を最大限に発揮するためには2人が闘うのが手っ取り早く、それによって遺恨を残すことは、まずないだろう。

②は、常勝ムードでは面白味に欠けるのだからして、敗れることもまた、いい経験になるのではないか。ただ、その場合、チームワークでクラッシュを凌ぐほどの相手に敗れた方が、クラッシュにとって同じ負けでもプラスに作用するはずだ。その相手はズバリいって、デビル雅美と山崎五紀の〝女・師弟コンビ〟だ。

③は、飛鳥にとって正念場となる。飛鳥がジャガーと好勝負をやってのけることによって、クラッシュそのものがひと回りもふた回りも大きくなっていく。戦力面はもちろんのこと、人気に拍車をかけるだろう。

筆者が特に期待するのは、この③だ。場合によっては、飛鳥と長与が対決し、その勝者がジャガーに挑戦という形をとれば、なおいっそう興味が高まる。

飛鳥21歳、ジャガー23歳。飛鳥がジャガーのガ城を文字通り〝クラッシュ〟するのは、1985年がチャンスだ。ジャガーは全盛期に比べるとウエートアップのため、持ち前の技の切れが悪く、スタミナ面に不安が残る。ことスタミナという点では、マラソン大会で常に1、2位の座を譲らない飛鳥が上。せめて勝てないまでも、時間切れ引き分けに持ち込んでほしい、というのが筆者の願いであるが…。

時間切れといえば、今年、飛鳥は30分フルタイム・ドロー試合を2度やってのけた。相手はジャンボ堀と山崎五紀で、2人は口を揃えて「自分自身で納得できた試合。でもTVでは（放送時間の都合で）ほとんどカットされたのが残念」と、くやしがる。試合をリードしたのは、飛鳥であった。

他にも、クラッシュ・ファンが「'84年のベストバウト」と絶賛する、メキシコUWAチーム（ラ・ギャラクティカ、ローラ・ゴンザレス組）の挑戦を受けたWWA世界タッグ初防衛戦においても、主役は大流血になりながら地力を発揮した飛鳥だ。

このように、飛鳥の真価が認められつつあるのだが、いずれも受け手に回ってのもの。ジャガーへの挑戦では、立場が逆転する。攻めて攻めて攻めまくり、何よりも気迫負けしないことが重要なポイント

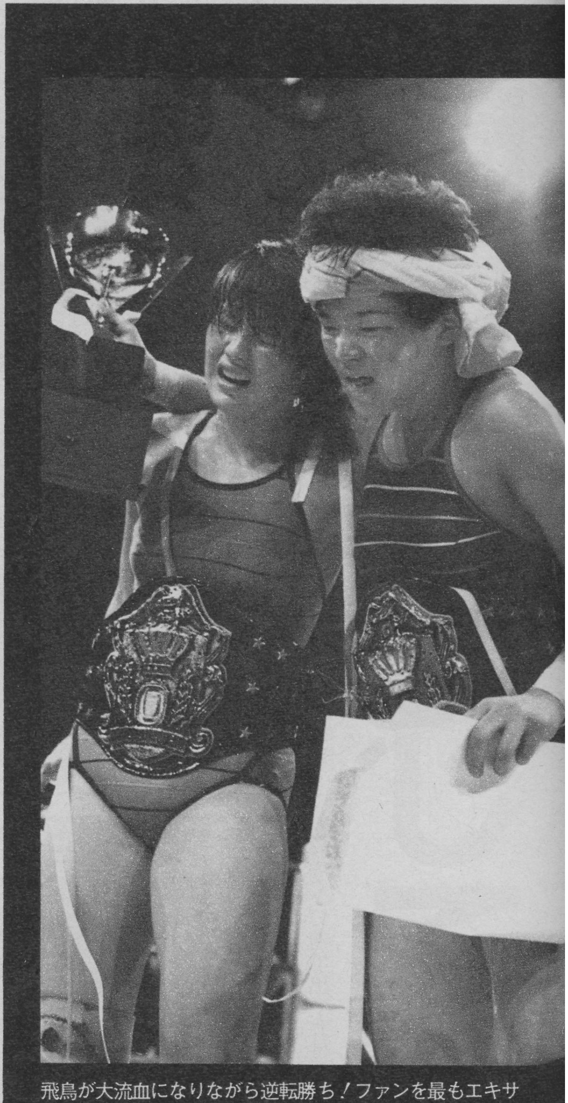
もっとも、今の飛鳥なら、そんな懸念は吹き飛ばしてくれるはず。なにしろ、1984年、飛鳥は長〜く暗いトンネルを抜け出して、目の前がパァーッと広がってきたところ。

新人時代から大森ゆかりとともに「将来の女子プロレスを背負って立つ逸材」と期待されながら、長いスランプにおちいっていた飛鳥は、今が最も大切なとき、であることを自分自身で見つめていなければならないが、そこで満足されても困る。明るい視界の中で何かを見つけ出し、その手につかんでほしい。

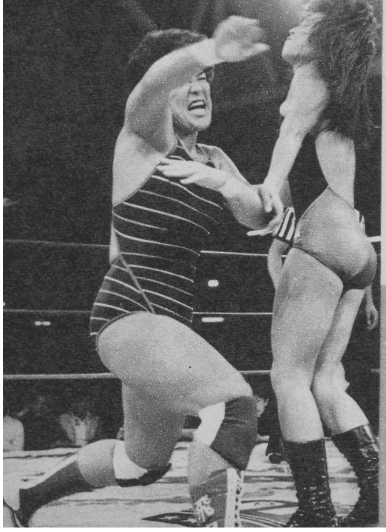
もし、ジャガーが、デビルが、引退したら、女子プロレスはどうなるのだろう？　その日は決して遠くないと噂される。

次代のエースは？　飛鳥と大森に試されるときが刻一刻と近づいてきた。

（伊賀　仁）



飛鳥が大流血になりながら逆転勝ち！ファンを最もエキサイトさせたWWWAタッグの初防衛戦



◀'84年の名勝負は、ほとんどが飛鳥がらみ。山崎五紀との30分ドロー試合は、とりわけ光っている…

長与千種ホットホットインタビュー

いつも一人っきりで、

インタビューの時、長与は左足首を負傷していた。「早くリングに上がりたい」そう語る千種の表情には必死なものが見えた。ただ、ひたすら〝強い人間〟になりたいと思ってレスリングロードを突っ走ってきた長与千種、「つらい事もあったけど、自分が泣いている姿だけは絶対に見せなかった」という千種のぶっちぎりトーク！

いま、ようやく自分の中に格闘技者としての自信が出来たの

——左足首外側ジン帯損傷——なんて聞くと、文字を見ただけで痛そう！って感じがするけど、試合を休むというのは精神的にどうですか？

千種　休んでいる時ってイライラしますね。一人でぽつりと試合を見ていると、自分自身が情けなくなるね。昔は私も若かったから、試合に出られないと、クサっちゃってね…感情ばかりが先走って、すぐ周りの人に当たってたけど、今はそんな立場じゃないしね。でも、その感情を押さえるのって、大変なんだよぉ。

——具体的にどんな辛さなのかな。

千種　会場に行っても何もすることがないでしょ。好きでもない歌をリングで唄う、ただそれだけなの。だから、家に帰ってプロレスのビデオを見ることが唯一の、うっぷん晴らしというか欲求を満たしてくれる。もう、ビデオを見て研究するしかないんですよ。

——会場に行っていれば、試合を見ることができるでしょ。

千種　でもね、人の試合を見ているとイライラするし、その気持ちをまたファンの前で出すわけにはいかない。誰も私がクサっているのはわからないのだから、ニコニコするしかないでしょ。だから、自分で自分の心を静めるわけ。レスラーが、試合出来ないなんて、屈辱ですよ。

——それでは、いったい何のビデオを見ていたの。女子プロレス？

千種　女子レスラーは、みんな敵なのよね。だから、その人たちのビデオを見ても刺激にはならない。主にUWFのビデオ（タイガーVS藤原、タイガーVS前田）ですね。

——女子格闘技者をめざす千種クンは、UWFにどんな思いを浮かべて見ているのかな。

千種　タイガーさんと藤原さんの試合は、終始関節の取り合いでしょ。それが、すべてのストロング・スタイルとは、私には判断できないけれど、関節技だけでファンは感無量で納得しているんですよ。グラウンドは遠くの席からはよく見えないし、理解しにくいんだけど、それだけで興奮させちゃうし素晴らしいですね。前田さんの〝元祖ハーフ・ハッチ〟は肩を相手の脇に全部入れ、それで重心を低くして投げているから…やはり本家は凄いよ。それに何たってキックですね。キックの速さには、ビックリだよ。それに、自分の新人時代のビデオを見ましたよ。

——今、新人時代のビデオってのは

〝強い人間〟を目指していた

一歩下がった立場で見られるでしょ。

千種　何に対しても自信がなかったね。先輩と闘うとオドオドしているのがよくわかるし、タッグで飛鳥とやっている試合があるんだけど、飛鳥は最近、太ってきたと人は言うけど、新人時代と比べるとしまってきてますよ。昔はね、太ってはいないけど、ズドーンとした身体でね。ドンクサいもの。今は本当に格闘技者の身体になってきたと思う。古いビデオを見ると今現在の、ライオネス飛鳥と長与千種が全くの別人みたいですよ。それだけ二人とも、自信ができてきた証拠かな。つぶされてましたよ私と飛鳥は…。

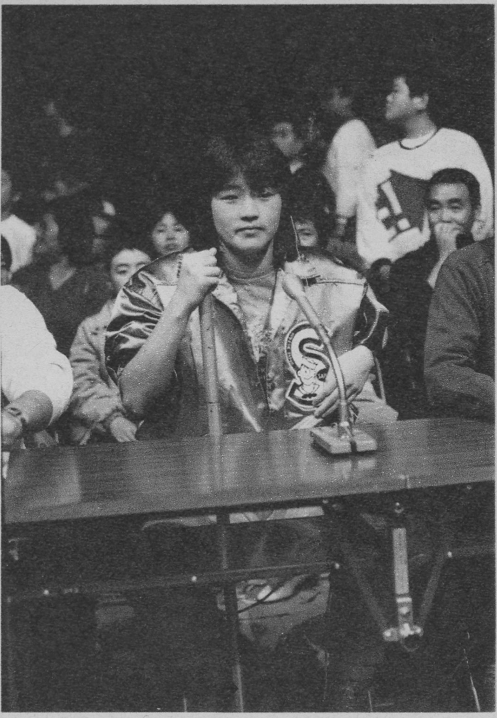
苦しかった新人時代でも、絶対につぶされまいと思っていた

――そういえば、千種と飛鳥はデビューした時点で大きく差というか、壁みたいのが二人にはあったんじゃないの。

千種　それは病気をして出遅れたこともあったけど、自分のプロレスに対する考えが甘かったんだね（笑）。プロレスってたいしたことないと思って入ったし、プロレス自体がわかんなかったの。

――病気というのは？

千種　内臓疾患だね。肝臓を悪くしたみたい。やっぱ、いろいろなストレスがたまったからだね。人間関係もあったし…まずはね、会場に行っても試合を組んでくれなかった。旅にも行けなかったし、ダンプ松本やクレーン・ユウも同じ思いをしてましたよ。ただね、女子プロレスに入ってくる時、空手をやっていたし、はっきり言って〝強い〟という自信があった。でもね、空手はプロレスに関係ない―というか、空手を使わせてくれなかったしね。自分は、プロレスはこんなもんだと思ったし本当の格闘技じゃないとも感じたのは確か。これは、ウソ物だと思ったね。そして、試合にも入れてくれないんだから、心身共におかしくなって当然ですよ。



足首負傷のため放送席のゲストとして登場することも、でも心の中はアセリでいっぱいだった

――でも、新人時代というのは基本を身に付けるのだから、実際問題として空手を試合で使うまでの段階に達してなかったんじゃないかな。

千種　その通りですね。発散できない気持ちを安らげるため、自分はいつも一人でいましたね。いつも〝強い人間〟をめざしていたし人がどんな事を言っても耳を傾けなかったし。

――選手同士って、仲間であると同時に微妙な関係だからね。例えばどんな事で、主張し合ったのかな。

千種　普通の女の子と同じですよ。これだけ、個性の強い人間が集まればトラブルも起きて当然だし、その面で自分は弱かったし、泣いてましたよ。でも、泣いている姿は絶対見せなかった。泣いていると、バカにされそうだったし、自分だけが思っていたかもしれないけど…。

11月20日にリング復帰の記者会見を行った

――それは、お互いの闘争心の表れと判断してもいいのかな。

千種　みんな負けたくないって、あるわけですよ。バスの中で旅に行くメンバーを発表する時に、自分の名前がなかったわけ。あ〜あ、残され組かってね。私と、松本とユウと由利子（高階）がいつも残されていた。二回目の旅も三回目の旅も、いつも私の名前が入っていなかった。

――練習は、しっかりやっていた？

千種　やっていた。でも、やってても身がはいんないよ。残ったメンバーでいつも「絶対、自分たちが上に行こう。負けないようにしよう」とね。旅に行った連中は、先輩に練習つけてもらうから、強くなって帰ってくるわけ。自分たちには、誰もいないの、教えてくれる人が…その中で、どんな練習をすればいいのか、見つからなかったし。

――旅に残されていた時は、どんな事を頭に浮かべて練習した？

千種　昔の、空手を習っていた頃をよく思い出していた。練習が楽しかった頃の。山崎さんに教わる練習とは中身が全然違うけど、蹴りの型を一つずつ覚えるだけでも、強くなるようで楽しかったなあ。

――実際、山崎さんに空手を教わった時は、空手をやってきた復習の部分もあったわけだよね。

千種　男も女も隔たりなくやってくれるし〝俺はこれを記したい〟というのが身体に伝わってくる。それも蹴られ、突かれするたびにね。寸止めを教えてくれないし、やる時は本物だし、これが格闘技だと再発見したのは事実ですよ。

――今、振り返ってみて新人時代の若い経験はいい勉強だったね。

千種　だからね、自分はおぼれないように心掛けている。嫌な思いをしてきたし…。

歌うことで認められるなんて私はイヤ！レスラーなんだもの

――割と感情をストレートに表現するタイプだから、誤解されやすいね。

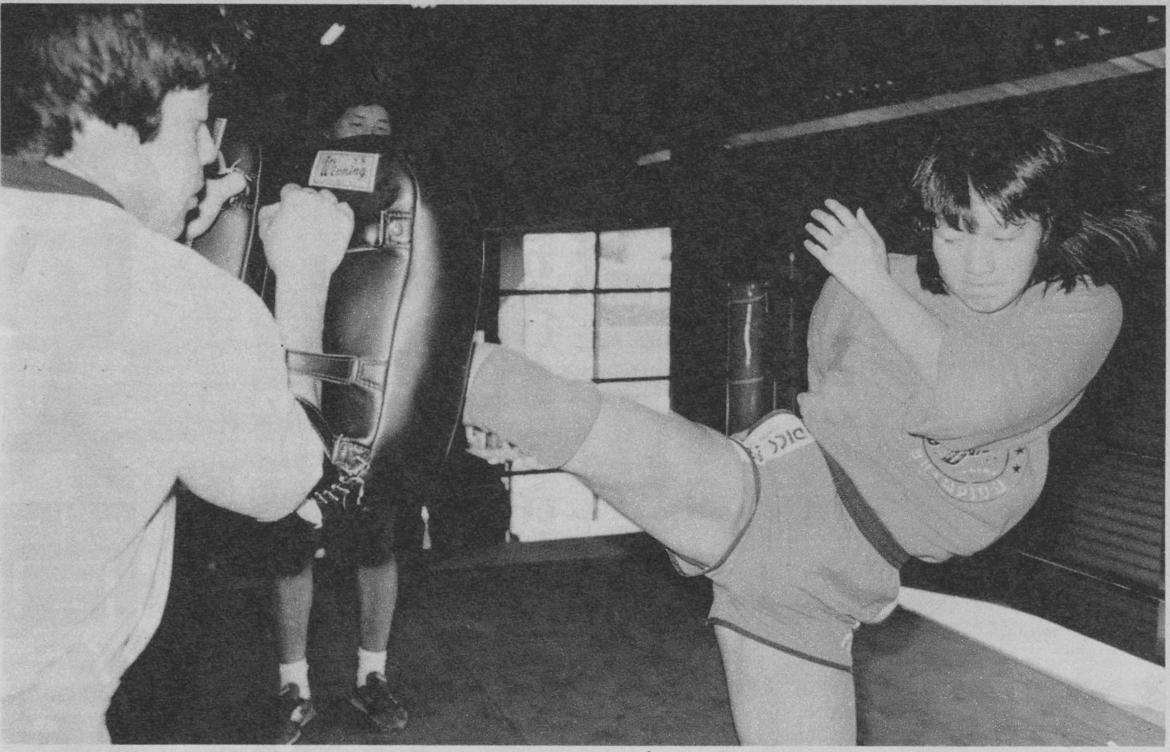
千種　でもね、私は絶対に〝見返す〟という言葉は忘れないね。

――それは誰に対して？

千種　親戚とか会社、先輩だね。私や家族に対して、侮辱してきた全部の人を見返してやりたい！話は違うけど私は感情を出すから、ファンに冷たいと思うね。

――それはなぜ？

千種　誰だって気分の悪い時ってあるじゃないですか。そんな時は、そっとしておいてほしいし、生意気かもしれないけど、私は人に左右されたくないのよ。



UWF道場を見学、「やっぱりUWFのレスリングは凄い」と感激、さっそくスパーリングに汗を流した

――ところで、歌を唄うことに相当な抵抗があるようだね。

千種　そうじゃなくて、歌だけで満足されることが嫌なんですよ。歌の詞を聞いていると、私たちの気持ちを理解している人が書いているし、だから歌を唄うことで、詞を感じ取ってくれればいいなあーという感じもあるね。唄うことは、気持ちいいですよ。スタッフも私たちのために、時間をかけてくれるし……。

――芸能活動はどう？

千種　きついねえ。肌に合わないですよ。でも、芸能人はみんな冷たい人かと思ったけど、石川秀美さんとか小泉今日子さんとか、いい人ですね。運動会でも、いろんなタレントが参加しているから、まとまんないと思ったけど、それがスポーツの素晴らしいところで、それぞれが団結して一つの輪を作り上げたのだから。

――だいぶ慣れたみたいだけど……。

千種　慣れませんよ(笑)。やっぱり疲れ方が違うし、芸能活動だけじゃ疲れないけれど、試合もあるしね。試合は全神経を集中させるから、終わった後って放心状態になるのね。何も考えないで、ボケーッとしたくなるし、試合が一番疲れますよ。芸能やっていると、練習できないしね…。たまに休みがあっても、体が動かないよ。

「正直いって、歌は好きじゃない。それだけで人気が出るのは嫌！」という千種

――クラッシュ・ギャルズとして新しい年をどうとらえているのかな？

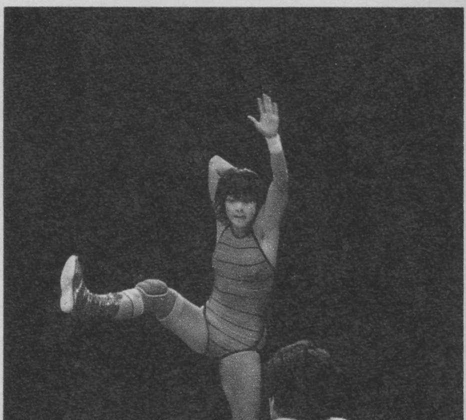
千種　常に競っていける状態を作りたいね。そして一日も早く、トモと闘うことですね。私たちの、ちょっと違ったプロレスを見せたいし。期待されちゃ困るけど(笑)。

――永堀、斎藤が山崎さんに空手を習い、いわば〝姉妹弟子〟という関係になったね。

千種　同じ門下生として、いい流れを先導してあげたいね。永堀たちは山崎さんに鍛えられているから、キック一発でも効きますよ。それとね加藤にも教えてあげたいなあ。

――というのは？

千種　加藤は可愛いですよ。何もプロレスをわかってないけど…新人王予選に勝って控室で泣いてたの。「なぜそんなに泣くの？」と聞いたら「勝てたことがうれしいんです」と言うわけ。加藤は剣道をやっていたから、勝負の気持ちを知っているのよ。そんな娘を私たちの時代になったら、どうにか伸ばしてあげたいね。



「いま、飛鳥は最高のパートナー」といい切る２人の絶好のタッチワーク

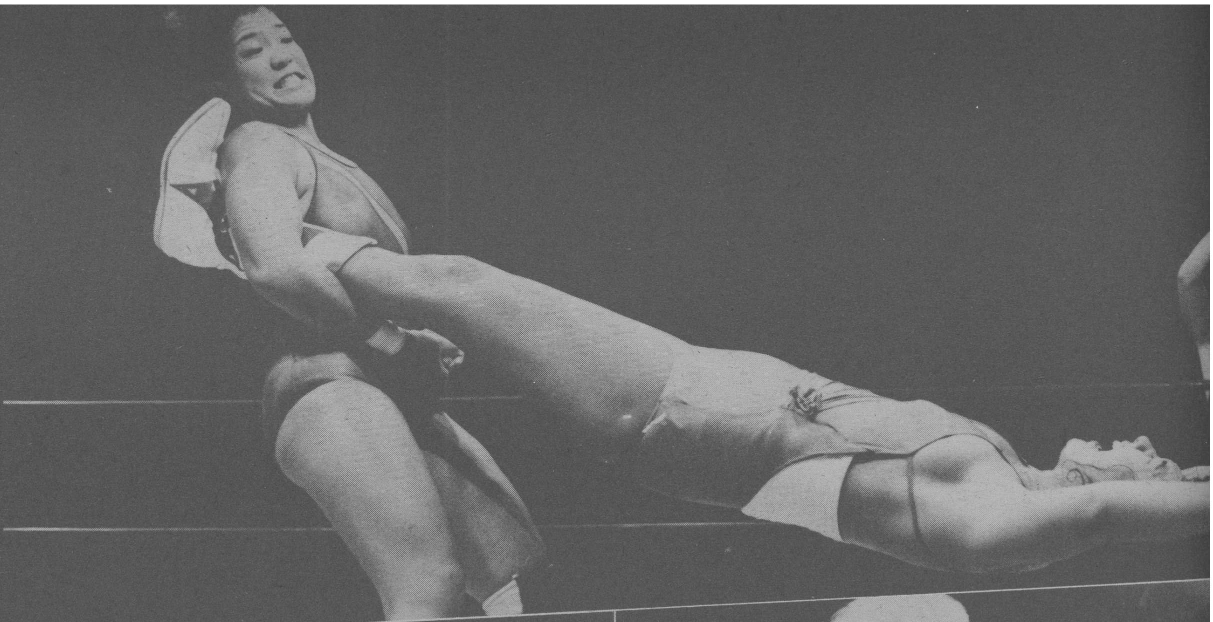
――タッグパートナーとしての飛鳥について一言。

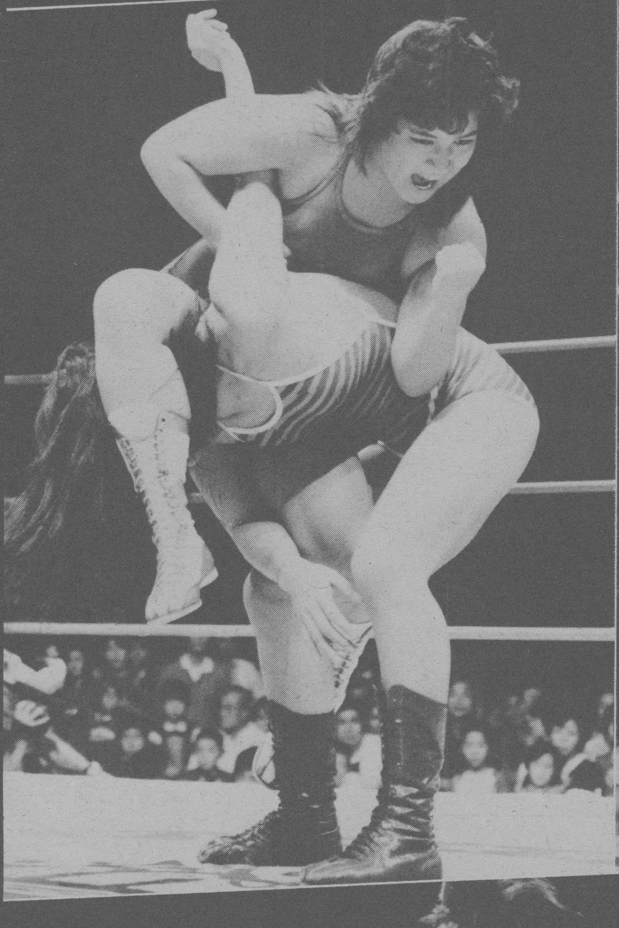
千種　お互いの気持ちがよくわかるから、文句は言い合うし、ケンカはするし…私が欠場した時「やっぱし、他の人とじゃダメだ。千種とじゃないとダメ」とトモが言ってくれた時は本当にうれしかった。これからも遠慮なくトモとは、やり合うし新しいプロレスを探していきたいね。

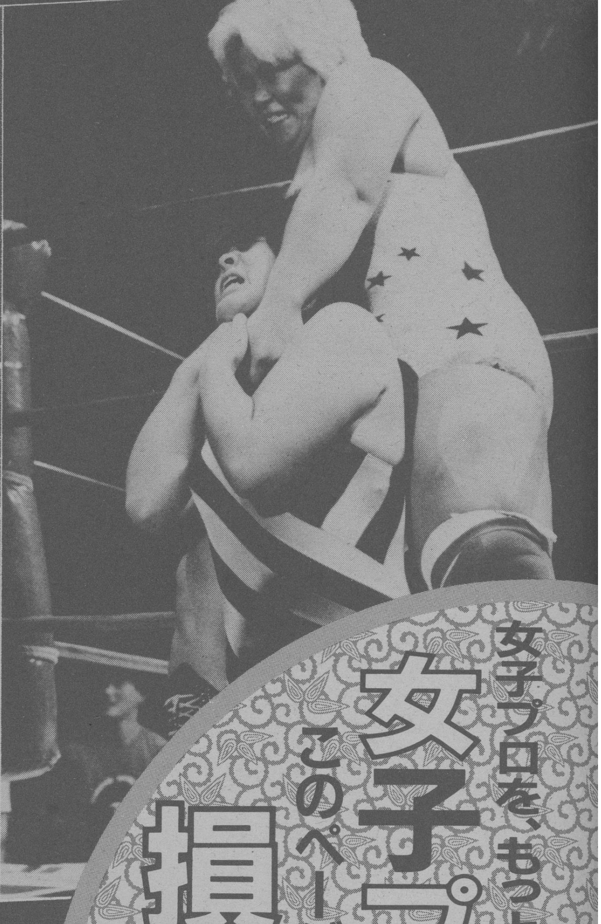
――今日はいろいろとアリガトウ。

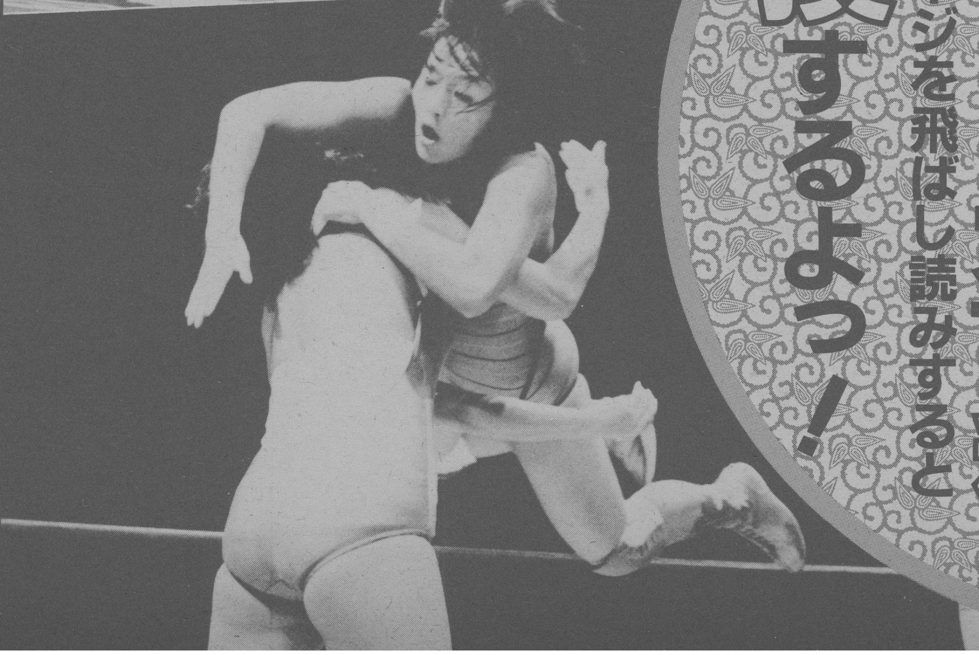
（このインタビュー後、全治一カ月といわれていた長与は、わずか一週間でリングに復帰してしまった。まったく長与のヤル気の凄さにはビックリさせられるのだ）

輝いてるね。女子プロレス85!









女子プロを、もっと、も一っとオモシロく見るための

女子プロ大百科。

このページを飛ばし読みすると

損するよっ!

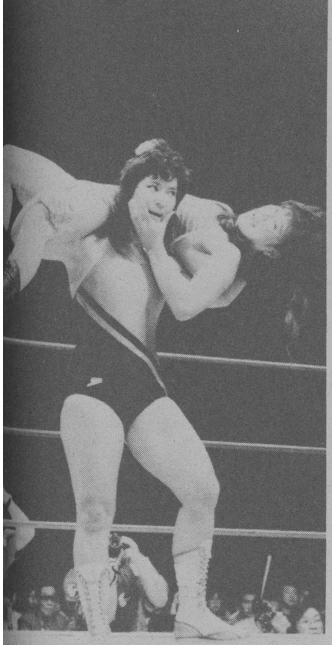
全方位ぶっぱなしフリートーク

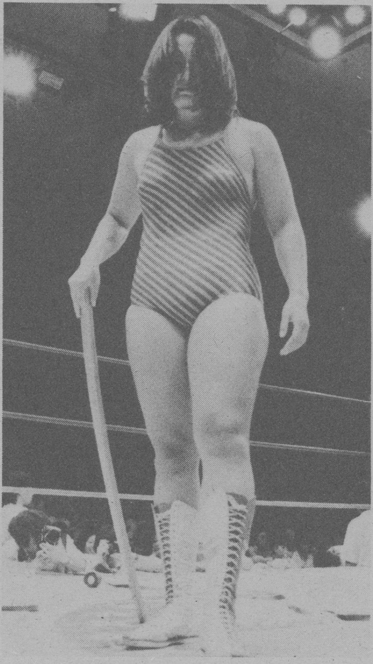
〝ザ・女子プロレス〟

ビューティペアとクラッシュの最大の違いはカワユサなのだ

B いやあ、ブームになったねえ。
C 半年前は、こんなになるとは思ってもみなかったけどね。
A ビューティペアの頃から比べるとどうかな? 全国規模の人気っていう点ではまだ追いついてはいないだろ?
D ビューティペア最盛期を10として今は8くらいじゃないですか。
C ビューティペアの頃とは質の点でもちがいがあるよね。
A それはたしかにあるな。
D ビューティペアははっきりいってブスな力持ちでしたけど、今の人気の立役者クラッシュ・ギャルズはかわいいですもんね(一同苦笑)。みるほうにとってムダな努力をしない顔っていうか……。
B どういう意味だ!?
D ほら、ビューティみているときは、顔は並み以下だけど、この子たちはたくさんトレーニングして、あんなにがんばってるんだ、だから顔のことは考えちゃいけないんだ、と

クラッシュ・ギャルズの異常人気でウナギ上りの視聴率と観客動員数を誇る女子プロブーム。だが、ちょっと1年前を振り返ると女子プロの試合場はカンコ鳥が鳴いていたのだ。いまの女子プロブームをクラッシュ人気におんぶしただけの一過性のものにしてはならないと叫ぶ、女子プロマニアの大放談でアリマス!!





▲どんなレスリングスタイルも何なくこなしてしまう天才ギャルのデビル

かさ。そういう心理的な操作つーか、やっぱ、決して自然とはいえない無理なところがあったでしょう。
A、C うーん。
B でも、俺からいわせると、その考え方ってちょっと女子プロを見下した視点じゃないかと思うな。
D でも、大きいっすよ、この差は。なんのかんのいったって、誰でもブスな子がやるより、かわいい子がやるの見たほうがキラクだもん。
A おいおい、そういうことというと女子プロが、えらく底が浅いものにきこえるぜ。
C このブームが、顔のかわいさなんていう単純明快なものでつくられたものじゃないことだけは確かですDさん。
D しかし、誰がなんといってもクラッシュはかわゆい!
B あっ、お前、結局それをいいたかったんだな!(一同爆笑)。
A 観客動員数からみるとどんなものだろう。
C 今のブームは首都圏リード型でしかも関東が関西に比べて圧倒的に強い。
B 関東に限っていえば今は、どんな会場でも実数で千人から2千人の動員数があるようだね。
A 関西はどんな状況?
B 関西はTVの定番がないせいか、ブーム以前と大差ないらしいよ。
C そのあたりが、クラッシュとビューティペアの質的なちがいですよね。ビューティペアはむしろ関西でのほうが強かったくらいだから。
A 地方主導型のビューティペアにアーベイン感覚のクラッシュか……。
D 顔の差ですよ、顔の差。
B しつこいな、お前も!(笑)。
C 話はかわるけど、クラッシュをはじめとして、今のスター選手たちは、女子プロレスが最も低迷した時期に入社した組なんですよね。

ビューティ解散後、一時はドン底だった女子プロ人気!

B ビューティペアが解散して、ジャッキー佐藤が1人でがんばってた時期だな。
D どこをまわってもせいぜい多くて300人くらいのお客しかいなかったそうですね、当時は。
A 300人じゃ田舎まわりのストリップ小屋みたいなもんだな。

女子プロマニアがメッタクソ語った“ザッツ・女子プロレス”

観客に対し抜群のアピール力を持っている長与

C 会場もそれこそ廃車置場のすみかなんかで。

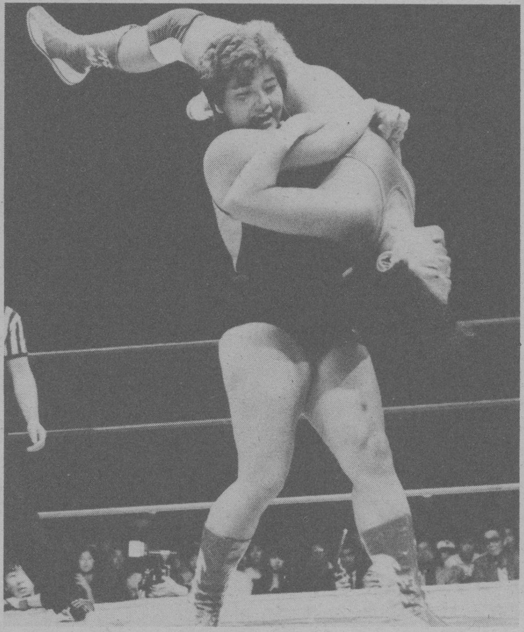
A ペシャンコになった車体をどけたりしてようやくリングをはったりしてたわけだ。

D それじゃあストリップ小屋っていうより、大昔の紙芝居屋の店びらきみたいだ。

C でも女子プロレスの歴史からすると、そういう時期のほうがはるかに長かったわけですよね。初期のころは会社関係者の奥さんとか、姉さんとかいうのが主体レスラーだったわけだし、そいいう意味でもけしてハデなものじゃなかったはずですよ。

D 年齢的にもかなりトシの人がレスリングをやってたんでしょ?

C そうそう。レスラーの平均年齢が10代になったのは、ほんのこの6〜7年のことで、それまでは40すぎた人もかなりやってた。今のブームなんてものは、こういう女子プロレス全体の歴史からみると、文字通り天変地異みたいなもんですよ。



▲「私はまだ女子プロで一度も開花していない」といい切る大森。'85年の変身が楽しみ

▶〝強い女〟のイメージを前面に押し出している女王ジャガー

A 初期のころは小人レスラー対女子プロのカードも日常的だったらしいぜ。

D 女がとっ組みあってれば相手が誰であろうといいというか……。

B ま、非常に見世物的だったことは確かだろうな。観客は当然男ばっかしで、ストリップみにくるような気持ちでやってくるんだろうし。

A 最近の会場じゃ、逆にオジサンのほうが中学生の群衆に囲まれて小さくなってるよな。

D 地方の会場なんかにいくと、1人、2人、かわいそうなくらいポツネンとした中年のお客がすわってますよね。なんか〝場ちがい〟って顔に書いてあるって感じで。

C 自分の場ちがいさをとりつくろうために、ワンカップ大関かなんかあおってたりするんだよね。

B そう、それで景気づいてヘンな野次をとばしてさ、まわりの息子くらいの年の中学生なんかに「ま、落ち着きましょうよ、オジサン」

なんていわれちゃったりするわけ。

A やだなあ、立場もなにもあったもんじゃないなあ。

C だから、僕が思うのは、今の選手たちに、このブームなり最近の客層っていうのは、これはもう、ものすごく突然変異なんであって、特別なことなんだと認識してほしいってことなんですよね。

B それは、またいつか女子プロレスがもとの見世物小屋的なものにもどる可能性があるということ?

C いや、そうじゃなくて……。

D そうなったら悲惨ですよね。そうなってほしくない。

クラッシュ人気を一時的な女子プロブームにしてはならない

C だから、そうなる可能性があるとか、そういう脅かしではないんです。ただ、今のクラッシュ・ギャルズっていう人気商品は、ホントに、文字通り、クラッシュされた(つぶされた)廃車置き場の中でレスラーとして育ってきたんだってことをね。その事実を、やっている選手自身が忘れてしまったらこりゃエライことになるぞ、と。

A ウン、それはわかるな。

B それについてはこのあいだ、クラッシュ自身がいってたんだよね。

「ウチらが新人のころは、800人入ったら、わっ!今日はすごいお客さんだーって驚いてたけど、今の新人は2000人入ってても、今日は入りが悪いなあ、なんていう」

って。それから

「新人のいうことを聞いてると、今のこのブームをあたりまえのもんだってとらえてるとこがあって、正直コワくなる。ウチらにとっては、ウチらがひきおこしたものなのに、なんか異常だなあ、どっかおかしいんじゃないのかなって、そういう感じなのに」

ってね。

C 僕は、今のブームっていうのはブームである以上に女子プロレスにとって革命的なものだと思ってるんですよ。それだけに今、Bさんがいってたようなクラッシュの気持ちが

新人選手にまで浸透していかないと、せっかくおこした革命が、ぬるま湯的な雰囲気の中で単なるお祭りにおわっちゃうおそれがある。これはぜったいに避けてほしいことですもんね。

A その"ぬるま湯的な雰囲気"って言葉で逆連想したんだけど、女子プロレスラーの教育ノウハウというか管理術の中には、かなり意識的に女の子の中の闘争心をあおって強化するシステムがあるみたいだな。どれだけ"ぬるま湯的雰囲気"に堕落させないか、という技術といいかえてもいいが。

C クラッシュが新人の頃には、レスラーがA班とB班のふたつにわかれてましてね。それぞれマネジャーがついて班どうしのせりあいをするわけです。

B せりあいっていうのは選手だけが？

C いや、多分に2人のマネジャーの意地のはりあいの部分があったんでしょうね。

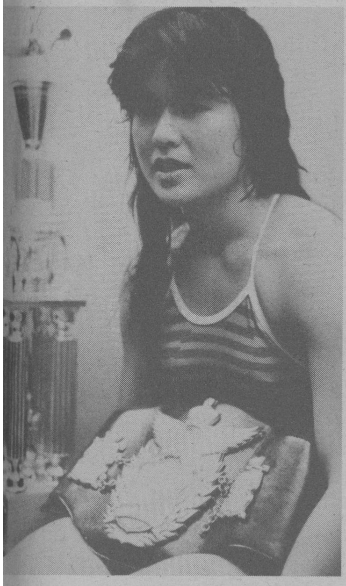
A 二つの班のうち一方は比較的優遇され、一方は徹底的にドサまわりみたいなことをさせられるらしいな。

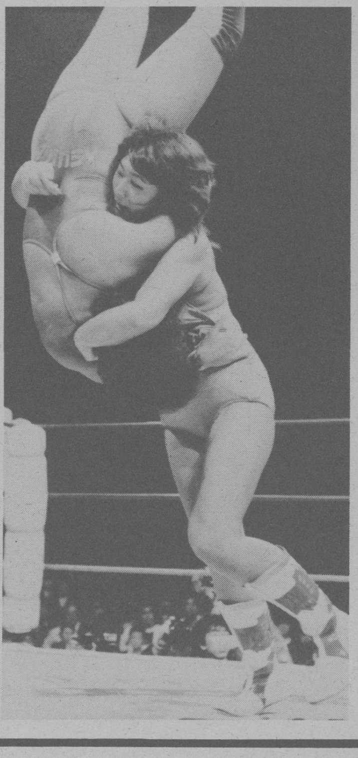
D それじゃ、いやでも闘争心はわくよな。

C レスリングの技ひとつにしても、この技はA班の誰それが使っているから自分はそれにもっと高度な技をミックスしてみかえしてやる、とかね。

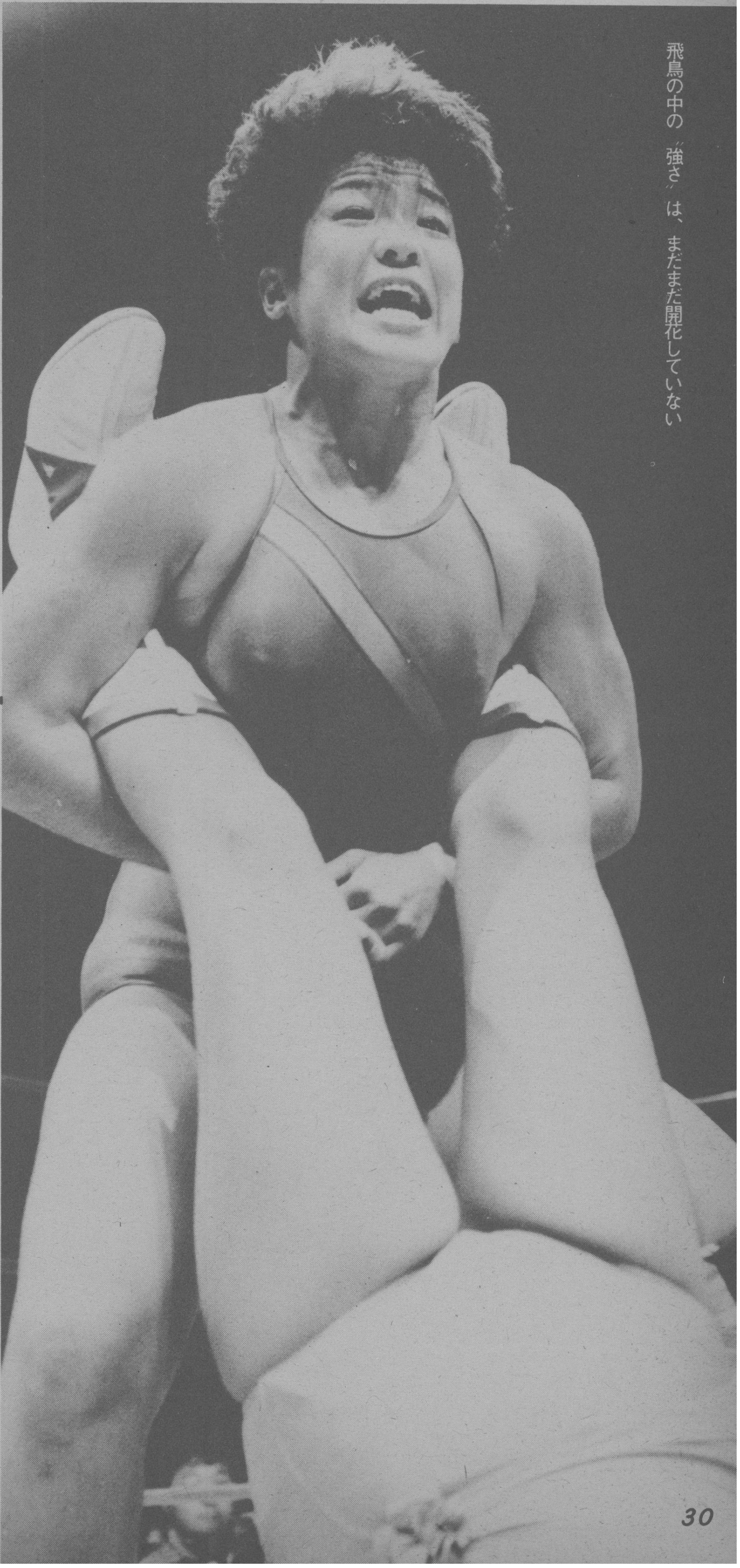
D ははあ、それで自然に技の幅はふえるし、選手の個性も強くなるわけだ。

A フロント側が意識してそういうシステムを組んだかどうかは別として、そういった抗争システムを選手の中に植えつけるってのは、たしかに頭のいい教育術ではあるよね。





▲'85年女子プロ界最大のホープ山崎五紀。彼女の活躍が'85年の女子プロ界に影響を与えることは必至
▶腰の故障で、今年の後半不調だった堀。'85年の巻き返しに期待



飛鳥の中の"強さ"は、まだまだ開花していない

抗争の過激さにかけては女子プロが男子プロレスより上だ！

C そして、その内部的な抗争システムを、悪党対ベビーフェースとかベビーフェースどうしのライバル闘争とかの抗争劇へつなげていくという流れがあるんです。

B その抗争劇のつくりかたというのは、ほんと、伝家の宝刀つーか、女子プロレスにとってはすごく伝統的なものだと思うな、俺。

D ある意味では、男子プロレス、とくに新日本プロレスのとった、日本人選手同士で根の深い抗争図式をひかせるというシステムは、女子プロレスの伝統を借りているっていう見方もできませんかね？

A おっ、そりゃ大胆な意見だね。

B うーん、なるほど。しかしその考えかたはあながちまちがってもいないなあ……。

D 外人選手は、一応カタチとして呼ぶだけで、ほんのツマミにすぎないってところもさ。女子プロレスのほうが先にやってたしね。

C 今までどちらかというと、女子プロレスは男子プロレスより一段低くみられていましたよね。でもそういった抗争劇の演出とか、選手をレスラーとして精神的にきたえていくノウハウに関しては、女子プロレスが男子プロレスの先をいっている。

D つまり、女の子っていうのは、こう考えてもいいんですか？

格闘技に対するめざめに関してトロい部分があるんじゃないですか？

だから逆にうんと考えぬかれたシステムで闘争本能みたいなものを人為的にあおって覚醒させる必要があると。

C　実は、女子プロレスでは、やめるといった選手に対して、やめるまでの何カ月間かは、前座に出したり、問題にならないほど格下の選手とあたらせたりして、ぜったいにきれいなままではやめさせないというもうひとつの伝統があるんですね。つまりどんなスター選手でもドン底に落とす。選手たちはそれを正直なところすごくおそれているし、ウラミに思うわけですけどね。

A　なるほど…。

C　それは、いま、話題にのぼっている抗争システムで異常にあおりたてた闘争心を、人為的にレベルダウンさせているんだといえるんじゃないかな。

B　するどい！　そりゃその通りだと思うよ。つまり一種の親心ってやつだな。

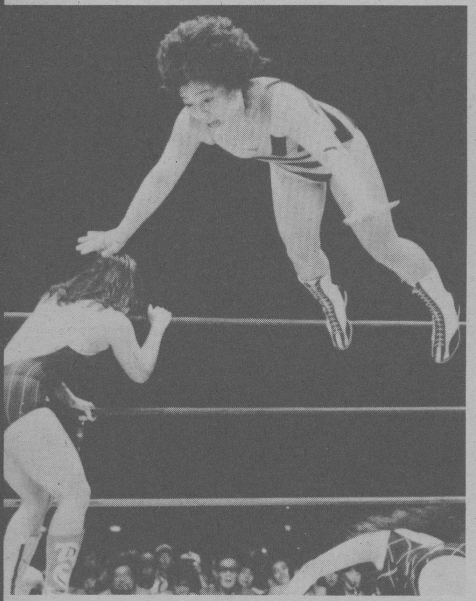
A　たしかに、女子プロ並みの闘争本能を、まんまフツーの世の中に持ちこんだら大変だもんな。

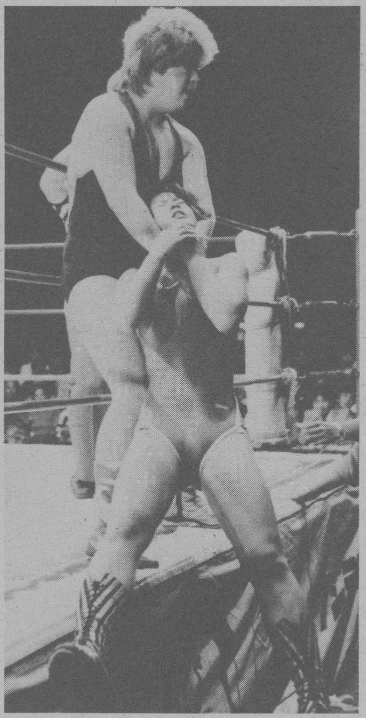
D　本人もレスラーとフツー人のギャップでひどく苦しむだろうし……。

B　この世の中、結局フツーが一番無難だもんな。それがけしていいことだとは思わんけど。

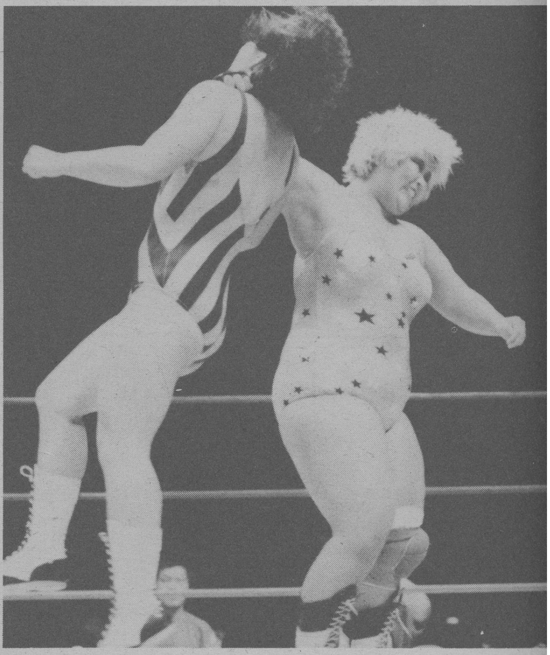
'85年こそ女子プロブームが本物なのかを見極める年なのだ！

A　うむむ、この問題をあんまり深く追求すると、世の中にイヤ気がさしちまうから（笑）、ここらで選手





▲目一杯のファイトぶりが、皆に好印象を与える若手のホープ小倉由美
▶クレーン・ユウはマスクを脱いでから自分をアピールできるようになった



▲ダンプ松本は'84年、クラッシュ以上に活躍したレスラーの1人だ

女子プロマニアがメッタクソ語った"ザッツ・女子プロレス"

の新陳代謝に話をかえようや。

D　今年プロテストに合格した新人は4人。永堀、斎藤、加藤、田村ですね。永堀が今のところ一番有望株と思われてるけど、僕はいっちゃんかわゆい加藤を応援してます。

B　この面くい野郎！

C　斎藤は永堀につぐ有望株。技はともかくとして、ものすごーく強そうなアゴをしてますね。

A　田村はボーダーラインすれすれでテストに合格したな。ちょっと意欲不足ってとこか。

B　でもレスラーは有望株がすなわちいい選手になるとは限らないからね。長与千種だって新人のころはどうしようもない劣等生で、見はなされてた方だから。

D　ヘンな話ですが、新人選手っていうのはデビューして半年間くらい顔の区別がつきませんね。みんな同じような顔付きにみえちゃって。

A　それがある程度リングできたえられてくると、それぞれの顔の特徴が出てくるわけだ。それが個性ってもんなんだろう。

　ところで君たちは今年の新人の中では誰がのびると予想してるかな。

B　俺は2年目までは順当に永堀がのびると思う。それ以降はわからないけど。

C　僕も同意見ですね。

D　僕はアバタもエクボでいうわけじゃないですが、加藤のレスラーとしての華を買いたい。

A　俺は、永堀は案外伸び悩むんじゃないかと思うね。永堀みたいな練習熱心、非のうちどころのない優等生ってやつはスランプも人より大きいもんだ。かといって加藤はたしかにスター性はあるし、かわいいけどなにしろ線が細すぎる。それにあの長い脚がレスリングではジャマになるような気もするね。結局、俺は二番手の斎藤が新人レースでは一番トクするんじゃないかと思うよ。

B　ま、2年後を楽しみにしましょう。

C　新人評が出たところで、今度は来年の展望について予想してみませんか？

A　俺は新年そうそうから選手の大幅な組みかえがおこるんじゃないかと思う。それもかなり思いきったやつがね。

B　それはまたなぜ？

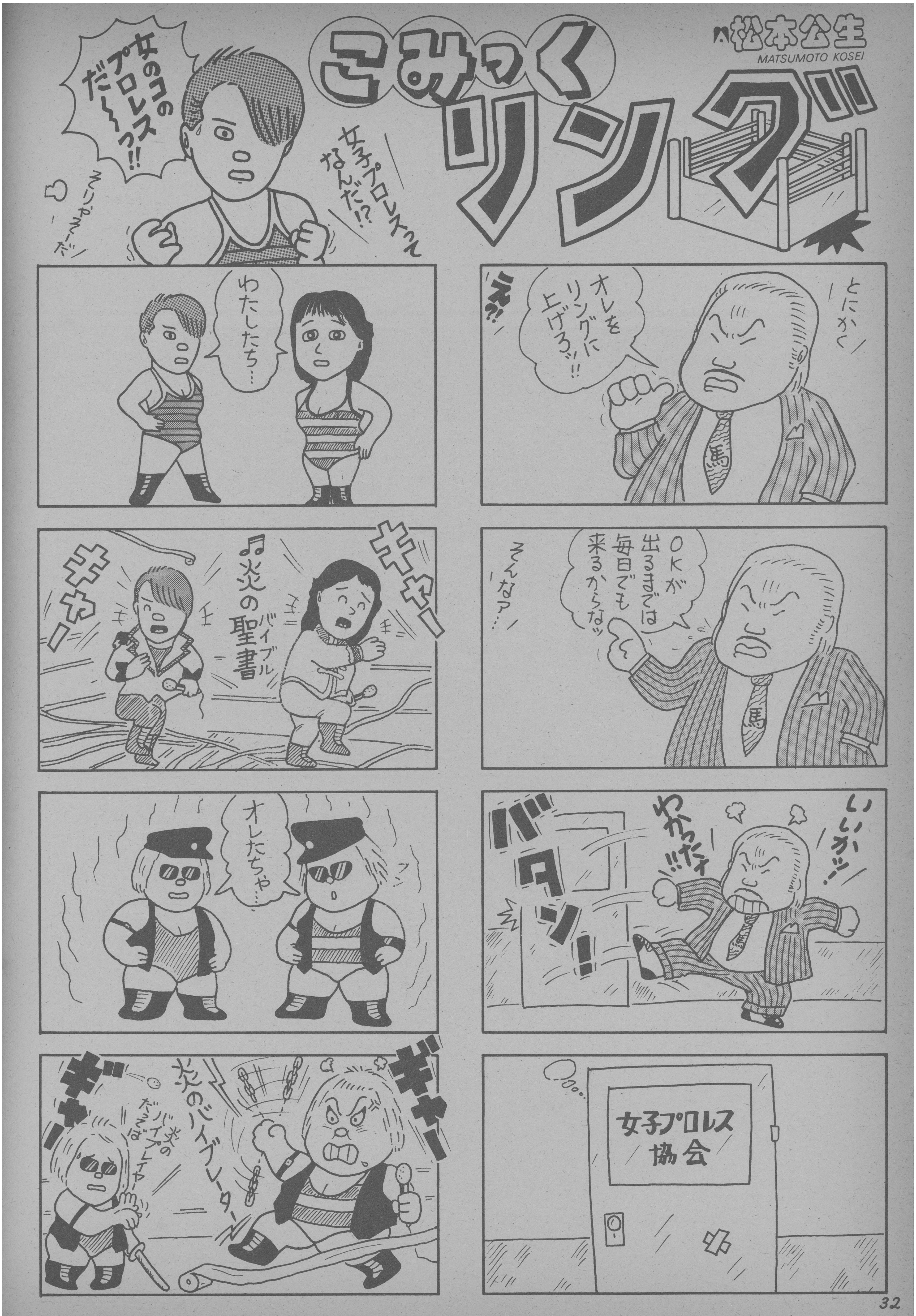
A　つまり今年は女子プロにとって天変地異的なブームだったわけだよな。来年はそのブームを一過性のもので終わらせるかあるいはもっと着実な潮流とするかどうかのターニングポイントだ。選手もフロントも、来年1年を飛躍の年にするために今年以上の過激な女子プロレスをめざさなくちゃいかんわけだよ。

C　ひとつ具体的な例をとれば、極悪コンビのダンプとユウは、来年、さらに悪ぶりをエスカレートさせると思いますね。

D　トップ選手のデビル、ジャガー、ジャンボ堀といったところも、来年は自分だけのレスリングをきわめると同時に、女子プロレスの本質を体現する存在となるというか……。

A　クラッシュの上に君臨する重鎮として一種、女子プロレスの神さま的な役割を演じることになるだろう。

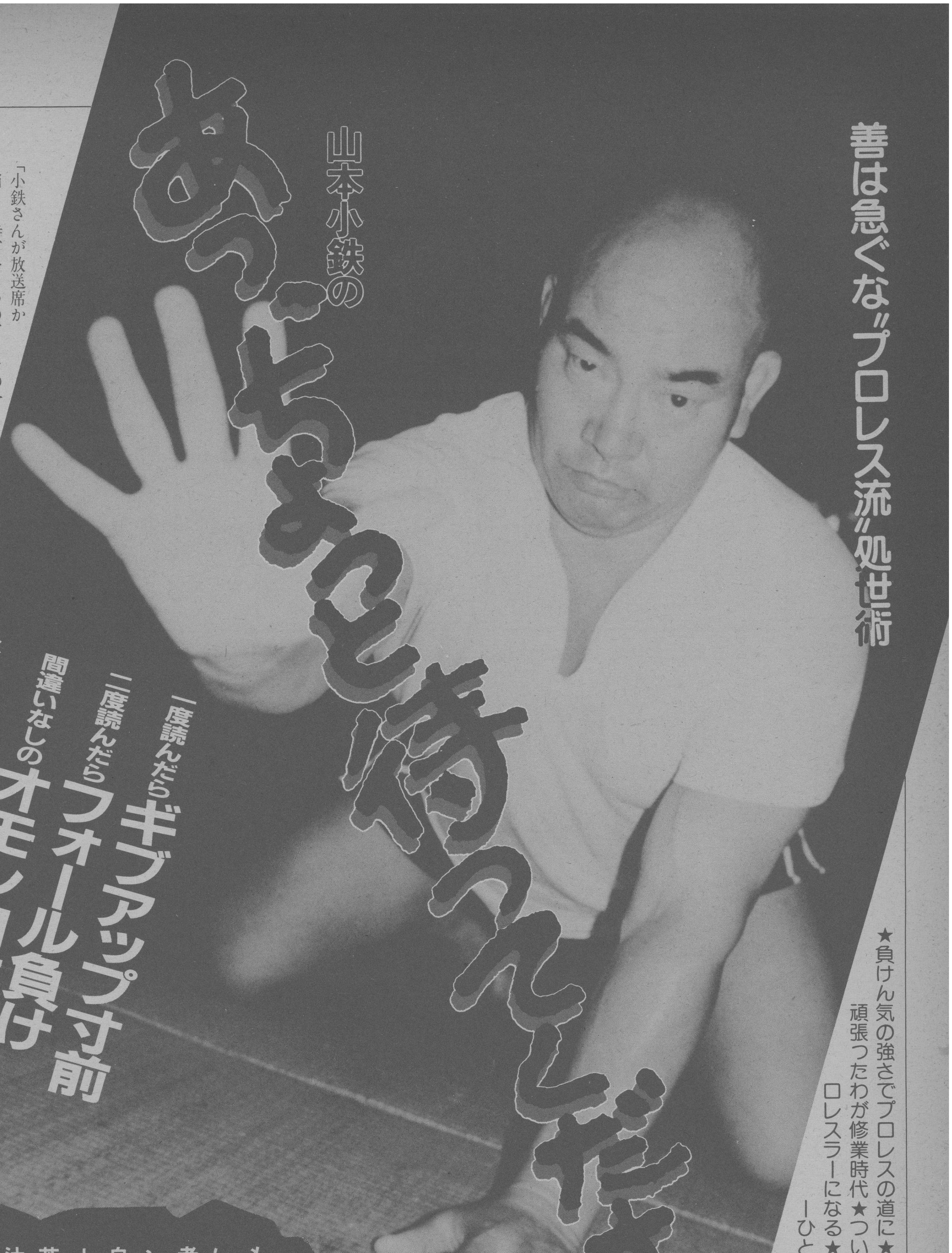
B　過激さと安定感と、このふたつの要素をかねそなえたものに成長してほしいね。


松本公生
MATSUMOTO KOSEI
こみっくリング
女子プロレスってなんだ!?
女のコのプロレスだ〜〜っ!!
そりゃそーだ
とにかく
オレをリングに上げろッ!!
え?!
OKが出るまでは毎日でも来るからなッ
そんなア…
いいかッ!
わかったァ!!
バタン!!
女子プロレス協会
わたしたち…
♫炎の聖書(バイブル)
キャー
キャー
オレたちゃ…
炎のバイブレーター
炎のバイプレイヤーだってば
ギャー
ギャー

チグサのアスカはどっちだ!
なんやアイツら歌のつぎは漫才かいナ
コッチだよ あすからず
ナ〜ンチッテナ
女子プロレス道場
特訓中につき部外者立入禁止
ケガで休んでゴメンネ
おわびに歌とサイン会でカンベンしてネ
チグサちゃ〜〜ん
早くよくなって〜〜!
バッカモ〜ン!
気合イを入れてやらんか〜い!!
「チグサさんが出ないのでさみしいです」
ナニナニ
クラッシュギャルズに追いつき追い込せだ!!
ハイ…
グスン
え〜ッか!
「でも歌とサイン会があるのでガマンしています」…か
ゴメンネ
ハイじゃもう一度『炎の聖書』元気な声で歌いましょーネ
「これからもケガをしてファンサービスにつとめて下さい、ではお体をお大事にー」

山本小鉄のあっちょっと待ってくれくださいっ!

善は急ぐな"プロレス流"処世術



★負けん気の強さでプロレスの道に★ハングリー精神で頑張ったわが修業時代★ついに、あこがれのプロレスラーになる★小鉄の外人レスラーひと筆書き＝番外編＝

「小鉄さんが放送席から消える時、ひとつのドラマの予兆がする……」私はこのフレーズに自信を持っている。リング上で何かが勃発した際、小鉄さんは、解説者という立場を放棄して、リング上に上がり、審判部長へと立場を変えてしまうのだ。小鉄さんが私の傍らにすわったままであれば、「最悪の事態は免れたのかあ!?」と心の中で実況して一安心する。これを人は、放送一人三脚と呼んでいる——

古舘伊知郎

一度読んだら**ギブアップ寸前**
二度読んだら**フォール負け**
間違いなしの**オモシロ本の**
メインエベンターが**登場しました。**

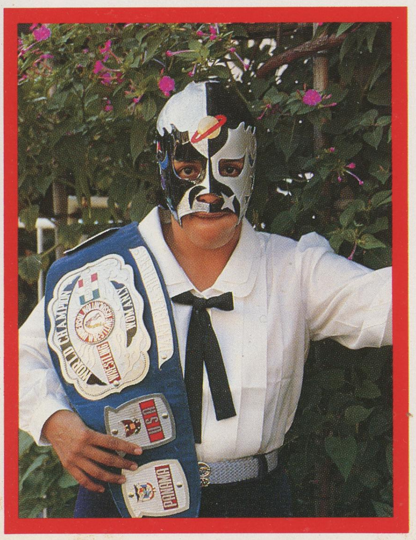
もと新日本プロレスの鬼軍曹、いま新日本プロレスの名解説者山本小鉄さんがマイクをペンに持ち替えての大活躍。自分の歩んできたプロレスロードを振り返りながら現代の若者への山本流"人間爆弾"辻説法!
うーん、一度読んだら、このきき目はスクワット1000回よりありそーです。

山本 小鉄 著
新書判／定価850円
絶賛発売中!!

恒文社

PROWRESTLING ALBUM 52 恒文社

輝きたいの



VIVA MEXICO

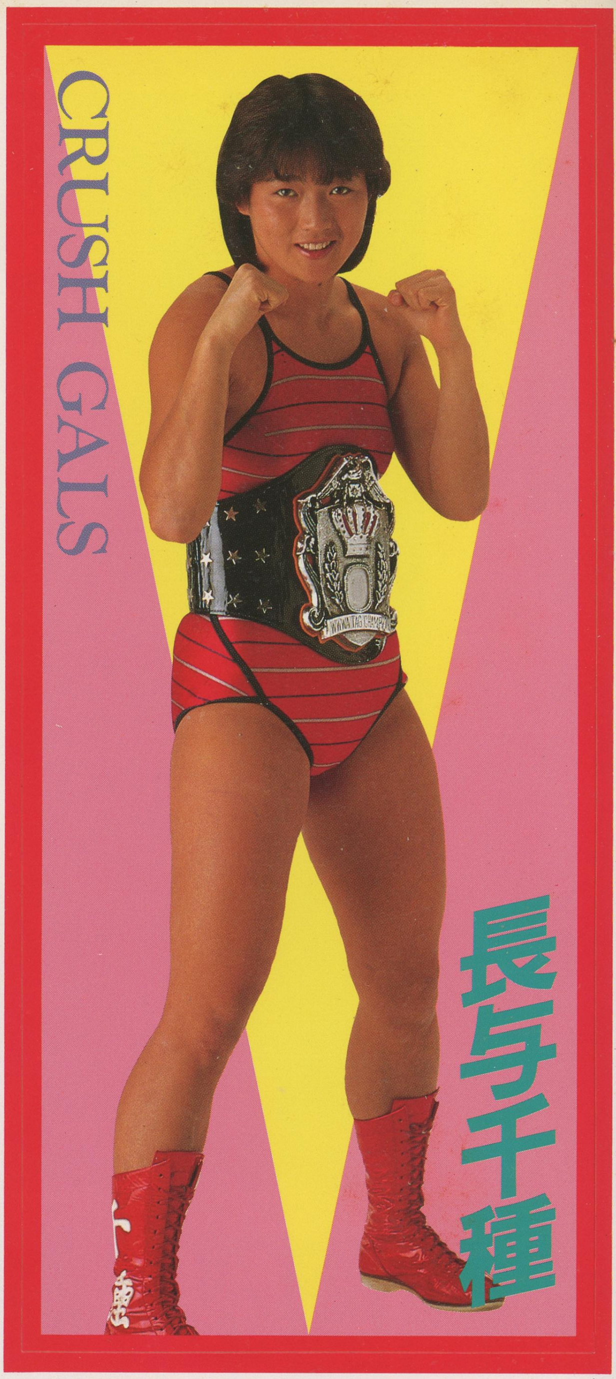
ITSUKI♥

JAGUAR

破壊娘★千種

飛翔★飛鳥

ゴンゴン

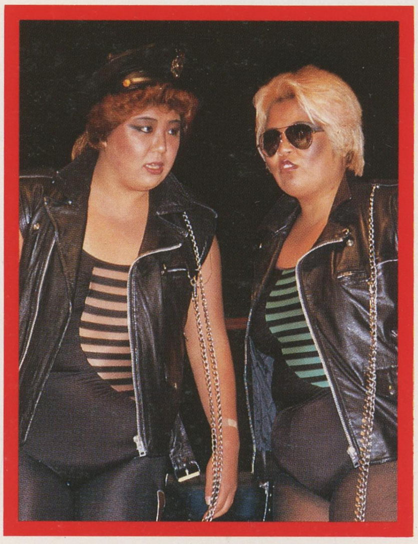


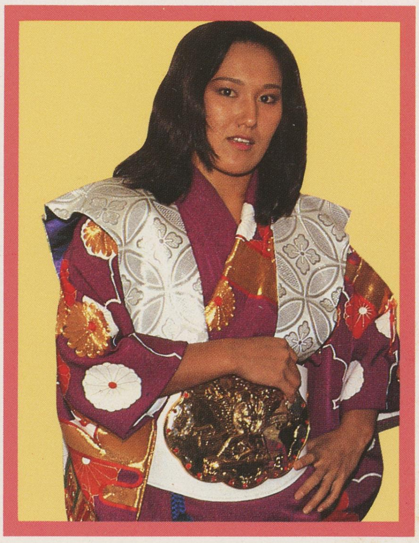
年　　組

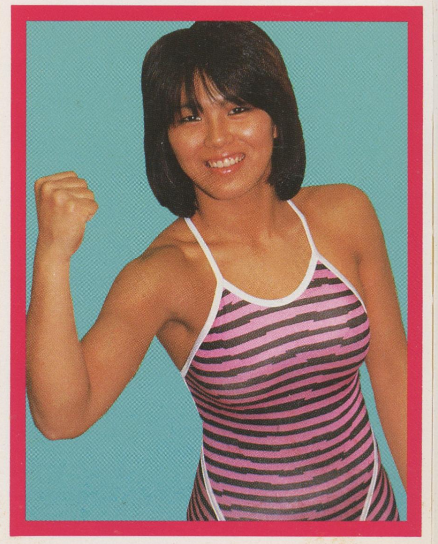
名前

年　　組

名前







"極悪同盟"

DEVIL♥

NORIYO

PRO WRESTLING ALBUM ㉟

力道山

空手チョップ世界をゆく

B5判●定価980円

陳平の

プロレスの裏知りたい

野末陳平著

新書判●定価780円

★プロレス史の決定版

鈴木庄一の日本プロレス史

上巻〔力道山時代〕昭和26～38年 下巻〔第二期黄金時代〕昭和38～58年

鈴木庄一著●新書判●定価各780円

全2巻

写真集 藤波辰巳

撮影・峰尾公喜

B4判／定価1500円

ついに飛龍を捉えた！この80ページは熱いぞ

燃えあがる過激なショットが君のハートをドラゴンスープレックス

レスラーにあこがれた少年の夢を失わず、今でも両手の中に大切に抱え込んでいる男……。藤波辰巳は、いま「少年の夢」を衰弱した現代の「大人の夢」へ注入しようと、必殺技ジャーマン・スープレックスを磨く。熱いレンズが男の姿をするどく捉えて、プロレスラーという職業への世の常識に挑戦する！

★〝プロレスラー、陽気な裸のギャングたち〟に続く第二弾

幽霊軍団にギブアップ

ミスター高橋著

新書判●定価780円

★来日外人選手サイン付

第一弾！

ミスター高橋の

プロレスラー 陽気な裸のギャングたち

ミスター高橋著●新書判●定価780円

デストロイヤー

4の字固めのひとりごと

ザ・デストロイヤー著

新書判●定価780円

素顔のデストロイヤーが今だから語る秘めた日米プロレス史

いとしのプロレスinアメリカ

斎藤文彦著

新書判●定価780円

ライバルをつくれ そして勝て!!

藤波辰巳著

四六判●定価850円

栄光の輝き

プロレス実物大チャンピオンベルト

プロレス編集部編

A3判●定価1500円

男はみんなプロレスラー

村松友視著

新書判●定価780円

プロレスのほんとの楽しさ

ジョー樋口著

新書判●定価780円

BASEBALL MAGAZINE SHA
株式会社ベースボール・マガジン社 〒101東京都千代田区三崎町3-10-10

ギャルズ★レスラー全員集合

彼女たちのことを、もっともっと知っておくと女子プロレスが、もっともっと楽しくなる!!

①本名②生年月日③出身地④身長⑤体重⑥得意技

ジャガー横田

①横田利美②昭和36年7月25日③東京都荒川区④160⑤62⑥ジャガー・スープレックス、高角度回転エビ固め、ジャーマン・スープレックス・ホールド

中学時代は卓球部に所属し、個人戦区大会優勝、団体戦都大会2位と大活躍。「人と変わった職業につきたい」という一念で、推薦入学が決まっていた高校を蹴って、新人オーディションに応募し合格。

52年6月デビュー。新人時代は特に目立つ存在ではなかったが、練習熱心なことでは定評があり、55年1月全日本ジュニア王座獲得で開花。以後、メキメキと頭角を現し、全日本選手権そして、56年2月にはジャッキー佐藤を破りWWWA世界チャンピオンとなる。

ジャガーは、リズミカルな立体殺法とシュートマッチの強さで、文字通り女子プロレスの頂点を極めた。

そして、卓越した精神力はビッグマッチでは強運を呼びこむ。ラ・ギャラクティカとの〝敗者髪切りマッチ〟や、WWWA&UWAダブル世界戦といった一連の抗争劇で、常にリフレッシュした話題を巻き起こすのだ。

デビル雅美

①吉田雅美②昭和37年1月7日③福岡県北九州市若松区④168⑤75⑥パワー・フォール、クロス・チョップ、風車式バックブリーカー

少女時代は歌手をめざし、中学ではブラスバンド部でサックスを吹き全国大会にも出場。「スター誕生」の地区予選を受けた経験もある。

ところが「マンネリした学校生活」を捨て53年3月、新人オーディション合格と同時に高校を1年で中退し上京。同年8月にはデビュー。

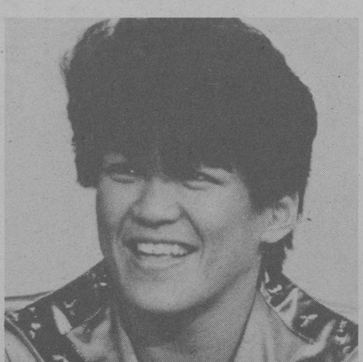
入門当時は、気の弱さが災いし伸び悩んでいたが、54年6月に「天神マサミ」と改名。独特のパワー殺法でメーンエベンターの仲間入り。

55年8月には「デビル雅美」と再度改名し現在に至る。先輩の池下、熊野の引退後はデビル軍団のドンとして、名パートナーのタランチェラとWWWAタッグを奪取(57年8月)一時代を築く最強タッグだった。

ダンプ&クレーンの造反劇で、軍団を解散後は、悪の女王から脱皮し木格派としてジャガーと実力を二分している陰の女帝でもある。

ジャガーとの完全決着戦こそ、デビルの宿願であり来年こそ実現を!

ライオネス飛鳥



①北村智子②昭和38年7月28日③埼玉県蓮田市④170⑤72⑥ジャイアント・スウィング、雪崩式バックドロップ、カウンター・チョップ

小学生時代、80キロもある肥満児だったため、コンプレックスを持ち無気力な毎日を送っていたが、TVで見たビューティ・ペアに魅せられ女子レスラーに憧れる。そのため、20キロの減量を自らに課し新人オーディションに合格した努力の人。

一時、女子野球ニューヤンキースの練習生をしていたほど抜群の運動神経で、55年5月デビュー後は新人王、全日本ジュニアとトントン拍子に獲得。その風貌から〝ジャッキー二世〟と絶賛される。

だが、長期のスランプに陥り前座に落ちていたが、長与千種と共に「女子プロレス革命」を宣言。クラッシュ・ギャルズを結成し、ストロングスタイルの確立を胸に始動した。

59年8月、3度目の挑戦でWWWAタッグチャンピオンとなり、新時代が華々しくスタートしたのである。

ボーイッシュなルックスと、ホットな素顔は女学生のアイドルであり ジャガーの首を狙う本命でもある。

長与千種

①本名同じ②昭和39年12月8日③長崎県大村市④165⑤65⑥ローリング・ソバット、ハーフ・ハッチ、ジャーマン・スープレックス・ホールド、サソリ固め

元競艇の選手だった父親に、幼い頃から男の子のように育てられ、小学4年生で女子レスラーになることを決意。そのための第一歩として沖縄小林流空手を習い、55年4月に長崎から上京し入門も許された。

デビュー後、内臓疾患のため低迷していたが、56年に再度新人王決定戦にアタックし新人王を獲得。翌年には全日本ジュニアチャンピオンと上昇したが、立野記代に敗れ王座転落し、心身共にドン底に落ちる。

58年夏、スランプに悩むライオネス飛鳥と、お互いのプロレス観に共鳴しクラッシュ・ギャルズとして名乗りを上げる。

真の女子格闘技者をめざし、極真空手の山崎照朝氏に師事。59年8月念願のWWWAタッグ王座を奪取し今や押しも押されもせぬスーパースターへの道を歩む。

素顔は情緒多感なプロレス・ギャルで人気ナンバーワンへと成長した。

ジャンボ堀

①堀あゆみ②昭和37年9月25日③東京都武蔵村山市④175⑤75⑥エアプレーン・バスター、フロント・バスター、ブロックバスター・ホールド

中学時代はバレーボールの大型アタッカーとしてキャプテンを務める。その恵まれた身体を生かす仕事として女子レスラーを選択した。

53年度新人オーディションに合格。入門して4日目の練習中、右足首を複雑骨折しデビューするまでに11ヶ月の時間を要した。

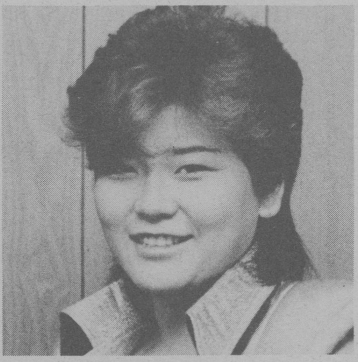
だが、天性の明るさでケガを克服し54年には2年目ながら新人王を獲得したのである。

女子プロレス一の長身を誇り、ダイナミックなパワーで、パートナーを横田、ナンシー、大森と3度かえWWWAタッグ王者となる。特に大森とは、私生活でも意気投合し公私に渡り抜群のチームワークを誇示。

クラッシュ・ギャルズとの3度に渡る〝WWWAタッグ名勝負数え唄〟は常にベストバウトを展開した。

'85の目標はズバリ！シングルプレーヤーとしての旅立ちであろう。大器が花を咲かせようとしている。

大森ゆかり



①本名同じ②昭和36年12月21日③北海道札幌市④165⑤76⑥雪崩式バックフリップ、ローリング・ボディバスター、水平落とし

学生相撲の横綱だった父・重一郎氏は、娘に格闘技への夢を託し少女期から女子レスラーへのレールに。

55年3月、札幌・創成高校卒業時に道内女子柔道大会65㌔以上級で準優勝。父と親交のある、鏡山親方(元横綱・柏戸)が後見人となり全日本女子プロレスに入門した。

同年7月、北海道でデビュー。新人王決勝では北村智子(現ライオネス飛鳥)に敗れたものの、大型新人として周囲の注目を集めた。

56年11月、ミミ萩原とのペアでWWWAタッグ王者となるスピード出世。同期を常に一歩リードした形で出世レースをひた走った。

天性の剛力は、強引ながらも本物の強さを秘めており余裕たっぷりの試合運びには無限のパワーが充電されているのだ。

堀との〝ダイナマイト・コンビ〟はすでに完結を迎えている。今こそエンジン全回！クラッシュ・ギャルズを〝逆クラッシュ(破壊)〟せよ。

ダンプ松本

①松本香②昭和35年11月11日③埼玉県熊谷市④164⑤100⑥ラリアット、パイルドライバー、ヒップドロップ

高校時代からジャッキー佐藤の熱烈なファンで、水泳やアーチェリーで全国大会に出場するほどのスポーツ万能？選手だった。

女子プロレスの新人オーディションやプロテストを何度も受けたが、いずれも不合格。一時はレスラーを断念し、事務所の営業部で宣伝カーを運転していたが、55年5月、2グループ分断興行のため入門が認められて待望のレスラーの仲間入り。

ユーモラスな巨体で前座の人気者となったが、練習嫌いなためユウとともに万年前座。

デビル雅美率いるデビル軍団に属したが、チャンスに恵まれず中途半端なヒールに終わるところだった。

だが59年に入ると、髪を金髪に染め不気味なメイクで大変身。突如として、デビルを裏切りユウと〝極悪同盟〟を結成。

汚職・阿部レフェリーと仕組み、リングで無法の限りを尽くしており、クラッシュの対抗馬として浮上。

クレーン・ユウ

①本庄ゆかり②昭和37年10月31日③東京都北区④173⑤100⑥フロント・ブロックバスター、ボディアタック、ダイビング・ギロチンドロップ

ビューティ・ペアのファンとして観戦を続けていくうちに、女子レスラーをめざすようになり、新人オーディションやプロテストにアタックを続けたが毎回不合格。

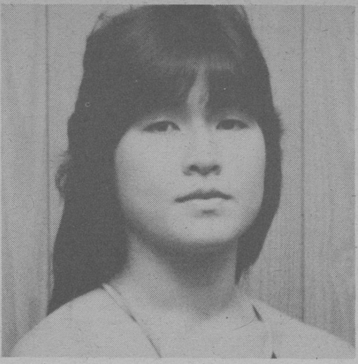
しかし、ユウの立派な体格を生かしたい松永社長の考慮もあり、55年の2グループ制を機に入門が許可され同年8月に夢にまでみたデビュー。

当時は、池下ユミを首領(ドン)とするブラック軍団に入り、悪の修行を積み重ねる。池下引退後は、デビル雅美のデビル軍団に引き継がれた。

57年1月に、覆面を着けマスクド・ユウと名乗る。巨漢を利用した肉弾パワーでデビルのパートナーに抜テキされたが、元来のムラッ気でチャンスをフイにすること数度。

落ちこぼれのラク印を押されたユウだが、同志の松本と〝極悪同盟〟を組み女子プロ界に反逆し生き返ったのである。公私ともにヒールがユウの信条？でもあるのだ。

山崎五紀



①本名同じ②昭和41年1月3日③兵庫県飾磨郡家島町④164⑤62⑥ミサイル・キック、ジャンピング・ボディアタック、バック・フリップ

瀬戸内海に浮かぶ小さな島、家島に生まれ育った山崎は幼年期から自然に親しみスクスクと成長。

56年3月、中学卒業と同時に上京し女子プロレスの門を叩いた。

デビュー当時、70キロもあった体重も練習で日増しにウエートダウンし筋肉質のボディを作り上げたのだ。

57年5月、長与との全日ジュニア王座争奪戦、同11月立野への挑戦ーと次々に敗れ不運の星の下にいたがデビル雅美を師事することで、プロレスに対する考え方を一新。

58年暮れのタッグ・トーナメントでは〝女・師弟コンビ〟として初出場準優勝の殊勲で、新設された全日本女子プロレス大賞努力賞を受賞。

性格は地味で堅実なため、支持者も多くクラッシュ・ギャルズに続くホープとして、大きな期待を一身に集めている逸材だ。

立野とは同期のライバルだが、完全にリードした形である。

立野記代

①本名同じ②昭和40年12月1日③栃木県足利市④164⑤64⑥ダイビング・ラリアット、フライング・ニードロップ、ジャンピング・ニーバット

足利競馬場の厩務員を務める一家に育ったため、小さい頃から馬と親しみ、すこやかに過ごしてきた。

足利市立第一中学校時代は、陸上走り高跳びで市内記録を樹立。この記録はいまだ破られていない。

56年新人オーディションに合格。同年9月にデビュー後は、順調にスタートし新人王決勝では2年目出場の長与に敗れたものの第2位となる。

そして、57年8月福島で長与の持つ全日本ジュニアに挑戦し、強引な押さえ込みながら完勝。第4代チャンピオンとなり以後、4連続防衛。このクラスのレコードでもある。

女子プロレス界の聖子ちゃんと男性ファンの支持を得、ミミ引退後のアダルト・アイドル候補だ。

守りのレスリングのため、ここ数年不振を続けていたが、ライバル山崎の急上昇に刺激され積極性を身に付けてきている。'85年は、山崎にどこまで迫り、追い抜くか!

小倉由美

①本名同じ②昭和42年9月2日③群馬県桐生市④160⑤65⑥ジャンピング・ニーバット、半回転ボディアタック

友だちに誘われたのがきっかけとなり、中学2年生から女子プロレスファンとなる。またソフトボール部のキャプテンとして、キャッチャーで4番を打ち各大会で活躍。

58年の新人オーディションに合格し入門してからは、小型ながら群を抜くパワーで暮れのタッグ・トーナメントに初出場(パートナーは松本)。

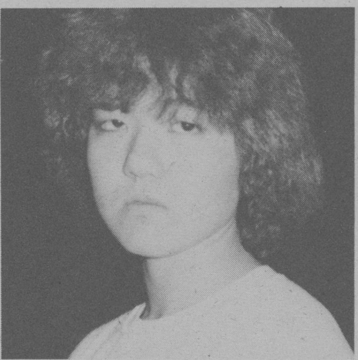
新人王戦は同期の中野に敗れたが59年3月、ジュニア王座決定戦では雪辱。初防衛後に再度、中野と争い王座を明け渡してしまった。

58年入門組の中では、タッグながらメーンエベントのタッグに出場する機会に恵まれ、先輩達にもみにもまれ、苦闘しながらも確実に上昇しているホープだ。

TVドラマ「輝きたいの」の名演技で人気も上昇中で、ファンクラブも結成されているほど。

ゴンゴンの愛称で可愛がられており、その雰囲気は〝女・佐山サトル〟のムードいっぱいだ。

中野恵子



①本名同じ②昭和43年1月8日③埼玉県川口市出身④170⑤80⑥ボディ・アタック、ショルダースルー・ドロップ

中学1年で新人オーディションに応募し合格。卒業までの間は、クラブで水泳や柔道を習い、卒業と同時に入門した。

58年9月、戸田でデビュー。同期の中では、ズバ抜けた肉体を武器に新人王戦では小倉に圧勝。59年3月ジュニア争奪戦では負けたものの、同年9月の再戦では苦戦ながらも王座を奪取した。

小倉とは周囲から、ライバルとして見られているため緊張感のある展開を続けており、最近ではダンプ&クレーンの「極悪同盟」に加入の動きもあり、タッグで出場したりセコンドにぴたり付きそっているのだ。

そのためか、中野も独特のメイクで登場するため、他の選手のひんしゅくを買っている。本人としても迷いがあり、一日も早く方向性を発見しなくてはならない。

パンダのニックネームで、現代っ子らしくマイペース。シェイプアップすることが課題である。

小松美加

①本名同じ②昭和42年5月17日③千葉県市原市④165⑤58⑥ドロップ・キック、フライング・メーヤープレス

父親の勧めで、新人オーディションを受け合格したため。女子レスラーをめざした変わり種。中学時代、水泳で市内大会に優勝した経歴を持つ。

入門当初はウエイト不足もあり、これといって特徴のある選手ではなかったが、2年目に入り体重が急増。体力面でも見劣りしなくなってきた。

58年7月、当時小倉が保持していた全日本ジュニア王座にチャレンジしたが、善戦健闘のすえ僅差で敗れ去った。

近眼のため、変則的なファイトを見せる。片足を突き上げるドロップキックなどは小松の個性であり、対戦相手を威嚇する技が多く、将来は意外なダークホースかもしれない。

新人ながら男性ファンも増え、人気も上昇中だ。ニンニンの愛称で素顔は、陽気でおっちょこちょいだが好感の持てるギャルである。

最近はタッグにも起用され伸び盛り。小倉・中野にリードされているが、じっくり育ってほしい。

永友香奈子

①本名同じ②昭和39年4月20日③北海道函館市④160⑤55⑥ドロップ・キック、ジャンピング・ネッククロス

高校時代はハンドボールの選手として、国体やインターハイに出場。58年新人オーディション、そしてプロテストでも群を抜く成績で合格。

同年6月、故郷の函館でデビュー。タッグ・トーナメントでは、世界王者ジャガー横田のパートナーに大抜テキされて出場。1回戦で敗退したものの、いい経験を積んだ。

運動神経は抜群で、正月恒例のマラソン大会でも大差の優勝。

だが、軽量のため同期に後れを取っているのが現状であり、追いかけてくる新人たちの標的にされている感もなくはない。

58年9月、山崎五紀の全日本王座に挑戦。キャリア不足で完敗し、その後は低迷しているのが気になるところだ。

大型化する女子プロ軍団の中に入ると、かなりのハンデとなるが今はただ練習あるのみ。

年齢の壁もあるがここで奮起し頂上をめざしてほしい。

永堀一恵

①本名同じ②昭和43年11月12日③埼玉県大宮市④160⑤65⑥ローリング・ソバット、サイド・キック

大宮市立西中学校時代は、バレーボールのエースとして県大会に2回出場。3年に入ると、プロレスラーをめざし空手を本格的に習う。

59年度新人オーディションでは、約100名の応募者の中から選ばれた最後の10名に入り合格。6月28日川崎でのプロテストに一発で合格し7月26日の鎌ヶ谷大会でデビュー。

スパーリングの強さでは定評があり、練習中に立野記代を押さえ込んだ実績もある。

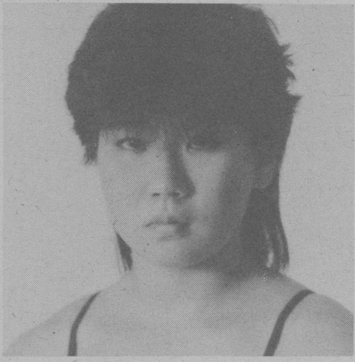
9月中旬より斎藤真知子とともにクラッシュ・ギャルズの空手の師でもある、山崎照朝氏の道場に入門。

山崎氏の家に寝泊りし、朝から晩まで基礎体力強化を中心に空手特訓とハードな毎日を送っている。

至近距離から蹴るローリング・ソバットなどは特訓の成果であり、斎藤との実戦スパーは、女子格闘技への序曲でもあるのだ。

また山崎氏も秘蔵っ子のように可愛いがっており、クラッシュを軸に山崎一家が女子プロを制す日も近い。

斎藤真知子



①本名同じ②昭和42年8月11日③大阪府守口市④165⑤64⑥カウンター・サイドキック、腕ひしぎ逆十字固め

大阪・帝国女子大学大和田高校に入学と同時に、修空館空手に入門。

59年1月、新人オーディションを受けるため単身上京。合格と同時に、高校を中退し女子プロレスの門を開いたのである。

デビル雅美を目標とする斎藤は、黙々と練習に打ち込むタイプであり6月のプロテストでも、スンナリと合格しプロの仲間入りをしている。

7月の大阪遠征の際、デビューを飾り、9月から永堀一恵と山崎照朝氏に預けられ、本格派としての基本を着実に作っている真っ最中だ。

新人王戦では、2年目の小松美加と当たり敗退。気の弱さのある斎藤は試合中も、気遅れし本来の力を十分に出し切れなかったようだ。

身体がやわらかく、しなやかなバネの持ち主である斎藤は、山崎氏が伝授した、オリジナルのキックを試合に生かせるよう努力を望みたい。

性格は、おっとりしており欲を身体で表現できたら面白い存在になる。

加藤悦子

①本名同じ②昭和44年1月25日③神奈川県中郡大磯町④166⑤55⑥ドロップ・キック、サイクロン・ホイップ

神奈川・中郡大磯町立国府中学時代は、剣道部で活躍。神奈川県剣道連盟昇級試験では2級合格した。59年の新人オーディションに合格し、現役最年少（15歳）の女子レスラーが誕生。

6月28日、1回目のプロテストに受かり、8月1日・横須賀大会で晴れてデビューした。

軽量だが、成長過程期にいるため入門後、ひと回り大きくなってきており、日増しにレスラーらしくなってきている。

現段階では、一つ一つの技を正確に覚えることと、受け身を身体に叩き込むことが先決だろう。

スラリと長い足から繰り出すドロップ・キックはシャープで、連発もきき、時には10連発もはなつ。新人は、がむしゃらさだけで十分。

〝悦っちゃん〟と先輩からも可愛いがられ、女子プロのマスコット・ギャルでもある。素顔は、明るさいっぱいのキュート娘である。

田村久美子

①本名同じ②昭和43年11月15日③東京都武蔵野市④168⑤70⑥ドロップ・キック、首投げ

東京・武蔵野市立第4中学では、陸上部に入り、主に砲丸投げの選手としてスポーツに夢中になる。

59年度新人オーディションでは、応募者100名の難関を突破して合格。6月、8月と2度プロテストに落ちたものの、補欠合格として正式にレスラーとして採用された。

168㌢、70㌔と体格的には申し分なく、本人の努力次第では大きな未来が待ち受けているのだが…現在の田村を見る限りでは、はっきりいって練習不足。レスラーとしての姿勢がイマイチ希薄である。

試合にあまり出場していないこともあり、やはりプロレスばかりは練習プラス試合の経験を積まなくては上達していかない。

同期の永堀、斎藤がひと足先に地力をつけている時期だけに、加藤ともども頑張るしかない。

'85年は、クラッシュ・ギャルズの人気も手伝い多くの入門希望者が殺倒する。新人とはいえ、サバイバル競争の波が押し寄せる。

クラッシュギャルズ闘魂記
災(わざわ)の聖書(バイブル)!!
1本目
ジャンケンポン!
さっダンプに言ってこいよ。
すぐに逃げねえと危ねえぞ
わっわかってる
えへへへ
朝潮のいもうと。!!
なっ
なっ
なぬう〜っ
ソーゾー以上に傷つけたみたいだね……
やべえよ遺書書いてるぜ
2本目
わー
わー
わー
フラワーマスク日本マット界に初登場!!
おまえなんかヘッドロックだけでギブアップさせてやるぜ!!
大胆不敵にライオネス飛鳥にむかってギブアップの予告!
あいつ寝ぼけているんじゃねえの
今どきヘッドロックぐらいでギブアップするようなレスラーがいるかよ。

おっとぉ〜〜っ
これは意外です
早くも予告通りにギブアップさせた!
ポン ポン
わー
わ、
ものすごいワキガでやんの…
わ、
3本目
ちぐさ〜〜っ
今日のテレビ中継のゲスト誰だと思う?
えーーっ 歌手のトシちゃん!?
うっそぉ〜〜っ
まんが
ねっねっ 今日はどのリングコスチュームにしようか?
こっちの方がトシちゃん好みよ。
トシちゃんの大ファン
まんが
ちょっと太ったかしら?
あらっ
ピュー
ピュー
わー
わー
今からエアロビクスやっても間に合わないっつーのに!
わー
わーい
……
……

週刊プロレス 11/24増刊◎
●A4判 定価780円

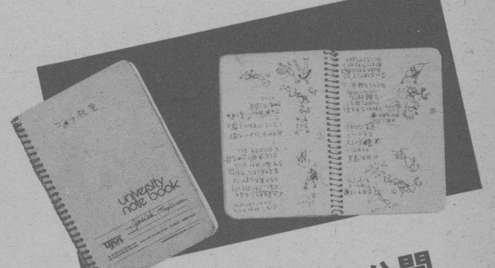
カール・ゴッチ編集協力、藤原喜明師範代の
驚異の一冊、ついに本になる。

ゴッチの技を盗み、
秘かに写しとった1冊の
古ぼけたノートが
この本を作らせた。

●佐山、前田、藤原、
木戸、高田、山崎マッハ隼人
UWF7人衆必殺技
●格闘技ルネッサンス
in後楽園BEST4
●俺のストロングスタイルは
これだ 佐山、前田、高田

発売中!!

レスラーよ、道場に帰れ
ストロング・スタイル
ザ・必殺技



フジワラ・ノート
●「UWFの五輪書」初公開
●UWFのプロレスに格闘技の源流を見た
格闘技レポーター：山崎照朝
UWFの原点
●「カール・ゴッチってどんな男だ!」
カール・ゴッチ日本マットの歩み
●写真で追う怒とうUWFの歴史
●ゴッチ動物園の危険な6匹
イラスト・更級四郎
●UWF選手のオフ・ザ・リング
秘蔵写真一挙公開!
●《特写》連続写真で見た
UWF地獄トレーニング法
「君もストロングに生きろ!!」
●ゴッチエッセイ 井上義啓

BASEBALL MAGAZINE SHA
株式会社ベースボール・マガジン社
〒101東京都千代田区三崎町3-10-10

女子プロ界の実力者ジャガー横田のひとり言

「私は引退するまで、誰にも負けたくない！」

UWA女子世界王者を倒し、史上初の世界タイトル統一王者となった横田。はにかんだ笑顔が美しい

皆さん、こんにちは。ジャガー横田です。

これから、最近私の思っていること、感じていること、考えていることを、そっとあなたにお話しします。少しの間、耳を傾けて下さいネ。

まずはじめに、私の今のプロレス観、プロレスに対する思いを、お話ししましょう。

力だけでは私に勝てない。本当の強さには精神面強化が第一

最近私は、いろいろな人に

「いつ引退するの？」

とか

「プロレスをやめることを考えていますか？」

って聞かれます。

そのたびに私は、とても寂しい思いをさせられます。

いずれ私にも、引退する時がきます。そして、その日がそう遠くないことも、私はわかっているつもりです。

でも、私は今すぐ、女子プロのリングから去ってしまうつもりはありません。なぜなら、私がこの人になら次の世代をまかせられる…と目をかけられる選手が、まだ育っていないからです。

まず、試合の面で言えば、皆、私

58年5月7日、横田は自分のWWWAシングルをかけ、ギャラクティカと対戦したこともあった。この時横田はモンスターの乱入に気をとられ、屈辱の敗戦。試合前の取り決め通り、髪を切られた

とリング上でにらみあうと、相手の方から力を引いてしまうところがあるのです。

そのいい例が飛鳥です。

例えば、本当に力比べをしたら、私より飛鳥の方が絶対強いはずなのです。なのに試合になると、私の前では、私を上まわる力が出せなくなる……。

これは一にも二にも、まず気持ちの上で私に負けているからだと思います。

本当は試合の中で、いつもいつも私の強いところばかり見せていたら、闘っている後輩は育っていきません。だから、対戦相手の持ち味を引き出し、試合運びの勉強をさせてやることも必要ではあります。

しかし、そのために私の方から力を抜き、相手にだけ攻めさせることは、絶対にできません。なぜなら、そんなことをしても、私を追い越そうとしている人達に、何の意味もないからです。

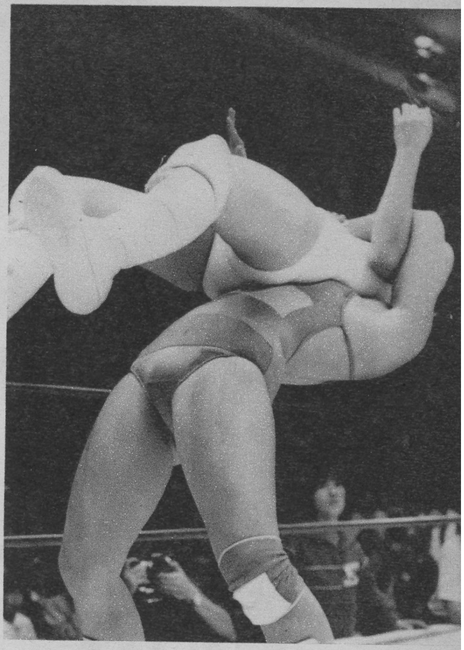
それに、私も試合では負けたくありません。絶対に負けたくないのです。

それゆえ私は、自分が引退するまで、自分の格を落とさず、トップレスラーのプライドを持って闘うつもりでいます。

だから、私を追い越そうとしている選手達は、まず精神面を強くして、私に必死に向かってきなさい！と言いたいんです。

そういう選手が現れたら、私も堂々と、リング上で真剣に応えたいと思っています。

私自身は今、リングに上がったら、自分が引退が近い…なんていうことは、絶対に考えません。なぜならば、もしそう考えたら、それが自分が落ちていく始まりだからです。迷った心や人に道を譲る気持ちを持ったら、すべてそれは試合に出ます。そうなったらレスラーは、それでオシマイなのです——。



これが59年1月8日、後楽園大会で使った幻の"だるま・ジャーマン"。ミミの両腕を抱えこんでいるが、受け身がとれないと判断したミミは、とっさに右腕を抜いてしまった

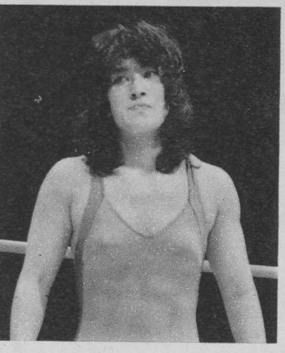
センスでは千種、力では飛鳥が王者としての素質があるが…

次期王者には誰が近いか？ 次に私に挑戦する者は誰か？ 正直言って、私にはそれが皆目わかりません。

まずレスラーは、強いだけでは王者になれません。

人格的にも皆を引っぱっていけるだけのものを持っていなければならないし、また"闘う者としての実力"のほかに、プロレス独特のセンスが要求されるのです。

ジャッキー佐藤に勝った、56年2月25日・横浜。この日、小さなチャンピオンは誕生した



「私、誰にも負けません！」彼女の目は、いつもそう語っているようだ

このセンスというのは、プロレスらしい試合の流れをつくれるとか、ファンの興奮を呼ぶプロレスができるか…ということで、この面だけで考えると、千種は最高に王者に近いと言えます。

デビルはもちろん、プロレス・センスの円熟者ですが、ニューウエーブの中で千種のセンスは抜群で、何よりも、どうしたら観客にアピールできるかを頭で理解し、全身でそれを見事に表現しているのは、凄いの一言です。

今、若い人に千種の人気があるのは、皆さんが千種のこのセンスの良さを敏感に感じとっているからではないでしょうか。

もちろん私も、このセンスでは人には負けないつもりです。

そして、たまには私も

「プロレスの世界だけでなく、他の世界ものぞいてみたいと思いませんか？」

と聞かれることがあります……。

確かに私もそう思います。普通の人が芸能人やスターにあこがれるのと同じように、私達も普通の人の生活にあこがれているのです。

私だってリングを一歩降りれば普通の女の子です。若い時に男の人と腕を組んで歩いてみたかったとも思います。

でもその分、私はリングに立ち、スポットライトを浴びて、皆さんの声援を受け、何千人もの人が見ている前で自分をアピールすることができました。

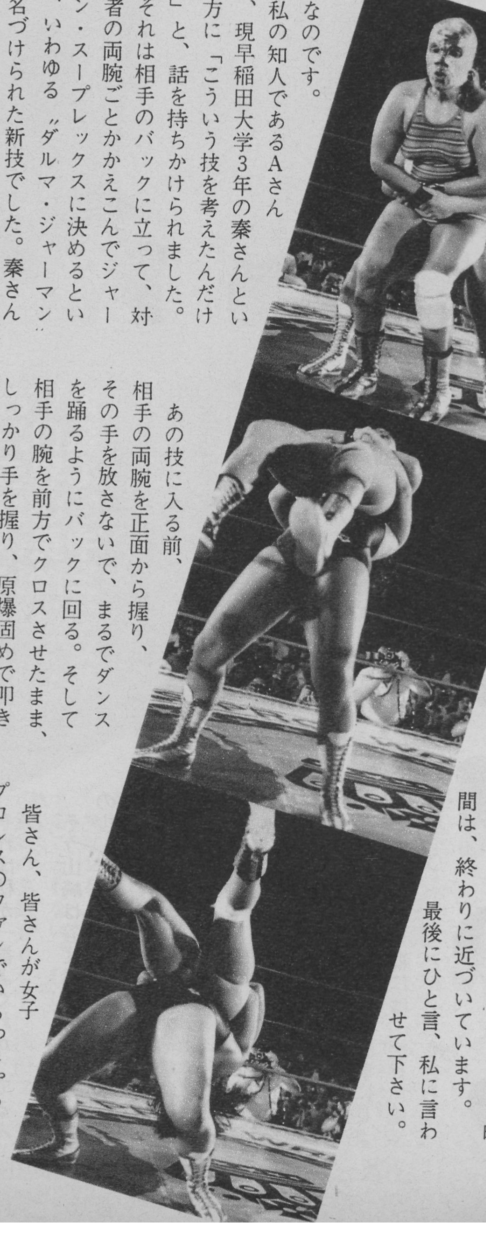
私が普通の人生を歩んでいたら、こんな大勢の人の前で、自己を表現する機会はなかったでしょう。これは何物にもかえられない最高の経験だし、この思いは1度リングに上が

▶お母さんとのスナップ。利美ちゃん、いささか緊張しています

た者にしかわからないものです。
それにプロレスとは、いくらやっても本物がつかめない、奥が深くておもしろいものです。
ある意味では、プロレスとはまさに、対戦相手との共同製作による闘いの芸術であると言えます。
つまりプロレスとは、新しいものを生みだすこと、リングの上で闘いを創造することです。
世の中で物を創ることほど人を熱中させるテーマは、ほかにないと思いませんか…?
だからこそ、私はプロレスラーの道を選んで良かったと思っているし、これからも自分がレスラーであり、そして何年かのちにも、自分がレスラーであったことにほこりを持っていられると信じているのです。

ジャガー式スープレックスは、こうして誕生しました!

私が9月7日、東京の大田大会で見せた、対ギャラクティカ戦のジャガー式スープレックス。
あれは、私のオリジナルではなく、あるヒントを受けて、それをアレンジして完成させたものなのです。
私の知人であるAさんが、現早稲田大学3年の秦さんという方に「こういう技を考えたんだけど」と、話を持ちかけられました。
それは相手のバックに立って、対戦者の両腕ごとかかえこんでジャーマン・スープレックスに決めるという、いわゆる〝ダルマ・ジャーマン〟と名づけられた新技でした。秦さんは大のプロレスファンで、寝床でふとんを投げて暴れている時、この技を考えついたそうです。
私はAさんの「この技をぜひやってみてくれ」という熱意に押され、今年1月の対ミミ萩原戦で、だるまジャーマンを使ってみました。
ところがこの時はミミに右腕を抜かれ完全には決まらなくて、フォールを取ることはできませんでしたが、実はこの試合を秦さんが会場で偶然見ていて下さり、自分の考えた技を私がトライした!ということで、たいへん喜んで下さったそうです。
そんなことを知らない私は、その時はただくやしくて、自分の仕掛けた技が中途はんぱに終わったことをくやみました。
そしてその後、私なりに改良し、腕が抜けないようにアレンジして完成されたのが、ジャガー式スープレックスなのです。
あの技に入る前、相手の両腕を正面から握り、その手を放さないで、まるでダンスを踊るようにバックに回る。そして相手の腕を前方でクロスさせたまま、しっかり手を握り、原爆固めで叩きつける!



▶59年9月7日、東京・大田区体育館でみせた、世界初公開、前方両腕交差式の原爆固め（フロント・クロス・アームロック・スープレックス・ホールド）、いわゆるジャガー式スープレックスだ。こんなことを考えついた横田は凄い!

こんな日の私を覚えててくれましたか? 私はかわいいかわいい利美ちゃんです!

どうです! この技は本当に凄いでしょう?
でもジャガー式原爆は、もう使うチャンスはないかもしれません。相手が受け身をとれなくてあまりに危険だし、私自身も本当に大きな試合しか、この技を出すつもりはありませんから。
だけどファンの方々の御要望が多ければ、私もちょっと考えてみようと思います。皆さんはどう思われますか?
——そろそろ私のお話しできる時間は、終わりに近づいています。最後にひと言、私に言わせて下さい。
皆さん、皆さんが女子プロレスのファンでいらっしゃるなら、まず会場に足を運んで下さい。そして私達の試合を見て下さい!
私達は精いっぱい闘って、そこで、皆さんに最高のものを見せることをここでお約束しましょう。選手が見せたいものは、歌でもない、ファッションでもない…。
私たちが本当に訴えたいものはマットの上で描く、生のプロレスなのですから…。
ではこの次は、ぜひ会場でお会いしましょう。私も楽しみにしています。
今日は、最後まで私の話を聞いてくれて、どうもありがとう。さようなら。
（ジャガー横田）

プロレスアルバム㊿予告
強くて、凄くて、クソ真面目なUWF軍団とはいったい何なのか?
プロレス革命軍団 ザ・UWF
'84年、激動のプロレス界の中で本当にプロレス・レボリューションを起こそうとしたのは佐山、前田、高田らのプロレス第3世代の男たちだった

昭和59年…。この1年は堀、大森の二人にとっては、ニューウエーブ、つまり自分よりあとからでてきた選手の踏み台になってしまった年であった。堀にとってクラッシュは後輩であるし、大森とクラッシュは同期ながら対飛鳥との新人王決定戦で敗れて以来、立場を逆転させ、大森が常に前を走ってきていた。WWWAタッグの移動は、つまりこの4人の立場の同格化（逆転？）だったのである。そして大森の対山崎戦の敗退…。追い詰められた二人の現状と今後を、このページでは考えてみたい。

くやしさの中から

大森ゆかりが山崎五紀に負けた日、神話の崩壊が始まった…

10月27日、埼玉県のとある小さな屋外リングで、大森ゆかりは山崎五紀に負けた。

この日来ていた取材陣も、誰もが大森ゆかりの勝利を信じていたので全く注目されていなかったこの一戦。ある記者などは会場のうしろの方に立ち、別の選手と立ち話をしていて、終了のゴングを聞き、リング上に視線を向けると、レフェリーが山崎の手を高々と挙げているのを見てびっくりしたという。

この結果、誰も注目していなかったこの二人の戦いが、一挙に注目されることになった。

大森はこの日もいつもと変わらない表情でリングに上がった。彼女はいつも試合前、淡々としている。同期であるクラッシュ・ギャルズと対戦する時は異常に興奮する大森だが、普段の試合の時の大森は、とても静かだ。

試合開始のゴングが鳴る。観客もあまり沸かず、大型の大森が、やせっぽちの山崎を一方的に攻めるだけの展開が続く。そして誰もが大森の勝利を信じていた時、最後の瞬間、その一瞬だけが途切れ、まばゆい光を放ったかのような、驚がくの場面がマット上に写しだされた。

何と、場外のエプロンに立つ山崎が飛びあがり、大森の体に抱きついたかと思うと、一瞬の回転エビ固めでスリーカウントを決めたのである。

あ然とする関係者、記者、カメラマン……。

その時、大森ゆかりの、闘いの女神としての神話が、静かに崩れさっていった。

試合後の大森は、つらそうに語った。

――私は負けた。確かに負けた…。今日は仕方がない。でもこの次やったら私は必ず勝つの。私は絶対に試合展開では負けていなかったし、五紀が私に勝つには、まだ私の一瞬のスキをついた方法しかないはず。ねぇ、私、約束するよ。絶対五紀には、もう負けません……。

大森はこの時、自分の気持ちをぶつけるように、話し始めた。

しかし彼女は、試合の勝敗は、決して自分の思い通りにだけいくものではないことを知っている。

案の定、大森は試合の数日後、お得意の言葉をはいた。

「仕方ないじゃない…。次には絶対勝てるってことも、本当はわからないし…。」

だが、そう言いながらも、絶対に勝ちたいと思っているのが大森だ。つまりそういう気持ちをいつでも周囲に出せないのが、人のいい大森の、レスラーとしての最大の欠点であるのだが、一方の五紀は、この大森ゆかりとの一戦について、こう語っている。

――私は勝った時、ヤッタァというよりも、本当は大森さんに、とても申し訳なかったの。だって、大森さんはずーっとタッグ・タイトルを持ってた人だし、1年だけの先輩って言ったって、私にはまだ、見上げてしまう位置にいる人なの。

私だって大森さんに勝ちたいよ。でも、勝つ時は、正面からぶつかって、正々堂々と闘って、みんなから「いい試合だったね」って言われるような試合が、大森さんと出来るようになった時、勝ちたいの。

だから、ふいをついたような回転エビ固めなんて…。

私はあの日の勝敗は、勝ちだと思ってないの。むしろ、大森さんに押されて押されて、そこから逃げるような感じでフォールを取りにいった自分が恥ずかしい。

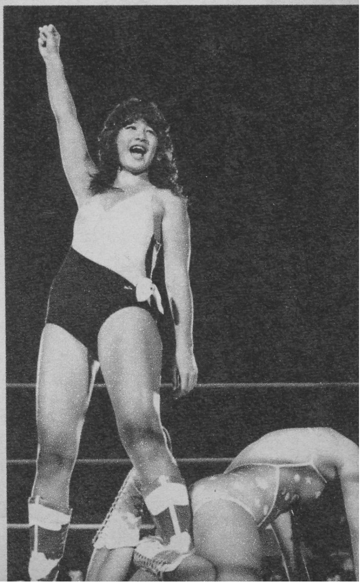
勝ちは勝ちだって言ってくれる人もいるけど、まだまだ私は大森さんを抜けない。

それは私が一番よくわかってるんだ……。

そう山崎は答えると、やっとほんの少しだけ笑みを浮かべた。

五紀自身、この勝利を心から喜んでいないようにみえた。それは、できるなら、このことは記事にしないで…と、目で訴えていたことでよくわかったのだ。おそらく先輩である大森を気づかっていたのだろう。

だが、大森にはい上がってほしいため、あえてこのことを記事にしよう。気の長い大森には、絶対に刺激を与えてやることが必要だから…。



▶下から追い上げてくる者の恐ろしさ、追い抜かれるくやしさを味わった堀だったが、もううしろは振り返れない

大森&堀、新たなる旅立ち

ＷＷＷＡ世界タッグ戦で敗れた堀と大森。堀はこっそりと控室で泣いたあと、記者の前に現れ、毅然とした態度で質問に答えた。一方の大森は、試合後は全く、取材陣の前に姿を見せず、椅子に座ってボンヤリしていた。チームリーダーと言える堀と、パートナーでしかない大森との差がよくでている。しかしこのしがらみは、二人にとってもうマイナスでしかないのだ

クラッシュに負けた時から堀は新しい自分に向けて旅立った

ジャンボ堀にとって、今年の1年はどんな年だっただろう? タッグ・タイトルは失う、シングルのベルトは遠のく…。まさに今まで自分の積みあげてきたものを、すべて吐き出してしまったような1年だった。

——ほら、私って今まで、オール・パシフィックとか、ＷＷＷＡタッグとか、何かしらベルトを持っていたでしょう? だから無冠になって、初めてベルトを取りたいっていう気持ちになってるの…。

それに、最近の傾向で、いろいろなタッグチームが出てきたけど、ダンプチームをはじめ、それぞれが個性あるペアなので、そんなタッグ戦争を経験してきた私たち自身も、ずい分成長したと思うんだ。

昔、ナンシーさんと組んで、タッグのベルトを持っていた時なんかは、気持ちの面で、それほどせっぱつまったものがなかったの。

でも、今は違う、後輩がどんどん伸びてきてるから、毎日がキツい試合ばかり。ウチらも負けていられないからね。頑張るよ——。

だが、そう言う反面、堀はある意味で、大森とのタッグに限界を感じているのも事実なのだ。

その理由として、これは今までどこにも掲載されていない発言だが…、堀は実は大森とのコンビネーションが、うまくかみ合わないと感じているのである。

今言ったコンビネーションとはあくまでも試合の上のコンビネーションで、私生活では共同生活を営んでいるほどの2人であるから、オフ・ザ・リングでは完璧を誇る堀と大森だが、

「私達は仲がいいし、体も大きく似ている感じだけど、実はやりたい技とか試合の運び方とか、考えていることはかなり違う。だから、私達がタッグを組むと、お互いの個性を消し合っているような気がしてならない」

と、堀は語るのだ。

これは、最近の堀の心にある、

「自分はシングルで勝負したい。早く長与、飛鳥、ダンプ、そして大森たち後輩との争いから抜け出して、同期のデビル、先輩のジャガーさんと同じ土俵で勝負したい」

という、あせりにも似た気持ちから思わず出た発言かもしれない。

しかし、とにかく、堀はもうタッグ戦争からさよならし、自分ひとりでシングル王者をつかもうという気持ちになっていることは間違いない。

このようにタッグにふんぎりをつけた堀は、

「あの8月25日の後楽園で、クラッシュにＷＷＷＡのタッグベルトを取られたことは、むしろ新しい自分を目指すためには、よかったのかもしれない」

と思うようにもなってきた。

立ち上がれ!

大森よ、キミは女子プロ界の長州力になるべきなんだ!

一方の大森は、堀とタッグを組んでいる限り、最終的にはキャリアで先輩である堀に依存し、自己の存在を控えてしまう。これが大森にとって、堀とのペアで一番いけない点だ。

レスラーである以上、頂点を目指して日夜精進するのは当たりまえだし、それを阻むものがあるとすれば、たとえそれが仲良しコンビのタッグチームであったとしても、排除すべきではないだろうか。

大森は本当は気の弱いところがあるし、他人を思いやることのできるやさしい女の子だ。

だからこそ、大森は自分自身を追い込み、一匹狼となって闘うしかない。

そしてジャガー横田に挑戦するのだ。

大森に悪役になれ! と言っているのではない。メキシコから帰国直後、リング上で藤波に「おれとお前と一体どこが違うんだ!」と叫んで挑発した長州のように、大森も横田と組んでリングに上がったら、試合前でも、試合中でも、試合後でもいいから、横田につっかかっていき、

「もう、私は二度とあなたとはタッグを組まない。私はこれから、あなたを倒すためにリングに上がる!」

と、マイクを持って叫び、横田に挑戦すればいいのである。

ファンも、これなら大森を悪者視することもない。むしろ、新しい形の闘いの実践者として、横田ファンだって歓迎するはずである。

タッグのベルトもなくし、一敗とは言え、後輩にも敗れた大森ゆかり。もうなくすものは何もないはずだ。

85年は、大森にとって、そして堀にとっても、最後のチャンスの年になる。全力で横田、デビルにぶつかり、大きな華を2人に咲かせてほしいものである。

(江夏純一)

◀昭和59年10月27日、埼玉県飯能青果市場特設リングで、大森は後輩の山崎に敗れる。しかしこの二人の対戦は常に大森が優勢で、山崎はドロップキックを出すのが精一杯だった

関西地区でクラッシュ人気が爆発するのは'85年だ!!

関東地区での女子プロ人気、特にクラッシュ・ギャルズのモテ方は凄まじい。ただし地方に目を移すと、このクラッシュ・ギャルズ現象も、まだまだ浸透していないのだ。TV中継が月一回の関西地区も同様だ。しかし逆の見方をすれば女子プロレスは、まだまだ人気の輪をひろげていけるということになるのだ！

都会ではみられない女子プロ地方サーキットの地味さと厳しさ！

超満員にふくれあがった会場、沸き起こる拍手と歓声、クラッシュ・ギャルズを追いかける、ファンの群れ……選手たちはレッドフェニックス号から降りられない。

最近の、関東地区における女子プロ会場では、必ずといっていいほど見られる光景だ。"第四期黄金時代"の到来、といわれるのも、なるほど納得できる。

でも、こんなシーンだけが"女子プロレスのある風景"じゃない。日本全国津々浦々を、レッドフェニックス号で回っていくのが女子プロのもう一つの顔だ。

男子プロレスの場合も巡業はつきものだが、ギャラの高い外人レスラーをたくさん抱えていることもあって、大都市での興行が多く、交通網の発達した昨今では、あまり"旅"というイメージを与えない。

ところが、女子プロの巡業はといえば、これが好対照。日本中の街という街で、レッドフェニックス号が足を、いやタイヤを踏み入れたことのない街など存在しないんじゃないか――そんな考えを抱かせるほど微に入り、細を極める。

シリーズが始まる前、全日本女子プロレスのオフィスから、日程表が配られるが、県名の欄を見ないと、それが関東なのか、東北なのか、それとも四国なのか、さっぱりわからない、ということがよくあるのだ。

一つの県で四日間、五日間とつづけて興行が行われるのもめずらしくないし、近県同士で連夜のように行ったり来たり、というケースも多い。

女子プロの試合が行われると聞いて、興行地まで出かけてみたが、○×駐車場特設リング、と書かれた会場がなかなか見つからない――地方ファンの中には、こんな経験をしたことがある人も多いはずだ。

いや、ファンの皆さんの場合は、ほとんどが地元の試合だから、かなり土地カンもあるはずだが、遠路はるばる出かけていくわれわれ（報道陣）は大変だ。

小さな街になると、タクシーも拾えず、町はずれにある会場を求めてちょっとした"冒険旅行"をすることだってある。なにしろ「会場が見つかりませんでした」なんていう言い訳なんか、デスクに通じるはずがない。

会場の目印である青いテントが見えてくると「ああ、よかったァ～」と、思わず取材が終わったような気分になってしまう。

あのクラッシュ・ギャルズ旋風を知らない地方のファンは実に多い

こう書いていくと、女子プロのマイナーな部分のイメージだけを指摘しているように思われるかもしれないが、決してそんなことはない。

むしろ、男子プロと比較しての興行体系で、ムダな経費をかけること

大阪、伊丹空港での千種。素顔の千種に気付かぬファンも多い

なく（地方でも会場使用料はバカにならない）確実に興行を成功させていく全日本女子プロレスの強さ、したたかさに感心させられるのだ。

駐車場、空地、広場……およそプロレスとは縁どおい存在に思える空間が、トラックの到着と同時に、あっという間に熱い闘いの場に作り変えられていく。そんなプロセスを楽しみながら試合前のひとときを過ごすのは、女子プロ（それも、とくに夏場の）ならではの風情となっているわけである。

ただし、選手たちにとって、この地方巡業は、あまりありがたいものではないようだ。

〝地元〟の関東地方では、前記のように、大変な女子プロ人気。まだメーンエベンターになっていない新人選手にもFCがあり、熱心な応援を受けることができるが、地方ではこうはいかない。

ジャガー横田、デビル雅美といった大黒柱たちでも、リングアナのコールにパラパラという拍手と、数本のテープが飛び交うだけ。今をときめくクラッシュ・ギャルズでさえ、その存在を明確に意識しての拍手やコールは数えるほど……といった調子だ。

東京を中心とした関東地区に対して〝西のメッカ〟と呼ばれる大阪は

奈良の街で鹿と一緒の記念撮影をする飛鳥。地方では彼女たちも押し寄せるファンから逃れることができる

昔から、プロレス人気の盛んなところ。

その中心、大阪府立体育会館は、レスラーや関係者の多くが

「最高に格闘技のムードを持った会場だ」

と指摘している名物会場だ。

ところが、残念なことに、大阪では女子プロのテレビ中継か、わずかに毎月一回（それも木曜日の深夜）という状況にあるため、女子プロ人気がいまひとつ盛り上がりを見せていない。

大阪のファンは、常に全力投球で試合をする女子プロが大好きなのだが、選手の顔と名前が一致しない状態では、いったいだれに、どんな声援を送ればいいのやら…というところ。

もちろん専門誌などを詳しく読んで女子プロの動きを熟知している熱狂的ファンもいるのだが、そのパーセンテージは、関東地区に比べるとまだまだ低い。

大阪キタの繁華街でノビノビとショッピングをする２人だが、85年はこうはいかないかも

自分自身のファイトの原点を見つめ直すのに地方試合は絶好の環境

その恩恵（?）というわけでもないだろうが、あのクラッシュでさえ気軽に会場周辺をブラつくこともできるし、ファンに取り囲まれることなくショッピングを楽しむことができる。もちろん大阪だけでなく、テレビの放映時間帯が悪い（あるいは放映回数が少ない）地方では、同じことがいえる。

〝普通の女の子〟になって、ホッとひと息つけるときでもあるのだが、選手の大半は口を揃えて「東京へ帰りたい」と言う。長いバス旅行で疲れるということもあるだろうが、やはり華やかなフットライトを浴びる〝地元〟でファイトする方がやりがいがあるようだ。

とはいっても、地方試合には独特の〝価値〟がある。関東地区では、ファンが「ジャガーは世界二冠王だ」「飛鳥のジャイアント・スイングは25回転の記録を持っている」といった先入観の予備知識を持って観戦に来るから、選手も闘いやすいはず。

ところが、地方の場合はそれがないから、世界チャンピオンも前座の新人も、横一線に並ぶことになる。ヒールもベビーフェースもない。本当に観客の胸を打つファイトを見せた者だけが拍手をもらうことができるのだ。

前記の大阪は、その典型。女子プロに対する知識は深いとはいえないが、プロレスそのものを見る目は肥えている。

だから、この街でモンスター・リッパーと凄絶なチェーンマッチをやってのけたデビルや、ユウ、松本のハサミ攻撃で血ダルマになりながら健闘したクラッシュが得た拍手、歓声は〝本当の本もの〟といえるだろう。

自分自身のファイトの原点を見つめなおすには、地方試合は絶好の環境となるわけ。自分の人気やキャリアを〝ゼロ〟の段階にまで戻してファイトしなければならないのだから……。

こういう地方でこそ普通の女の子に戻れるのだ

地方興行の充実と、関東地区に負けない女子プロ人気の浸透は、今後の女子プロの課題だろうが、逆にいえば、それだけ将来に可能性を残していることにもなるし、あの独特の野外試合のムードも捨て難い。

85年は、84年度以上に地方興行の数が増えると聞くが、再び横一線に並ぶ中で、だれが、どれだけ輝いてみせるか――大いに楽しみである。

リアルタイム・オブ・イツキ

—若豹 山崎五紀の今——

五紀はいま、ホンモノに近づいている

頼りになる先輩デビルだが、いま山崎はデビルから一本立ちしようとしている

最近ふとこんなことを考えこんでいる自分に気づくことがある。「ある人がレスラーになる瞬間っていつなんだろう」と。

リングにのぼれば即レスラーになるという考えがまちがいなのは、新人のデビュー戦をみればすぐわかる。

新人の試合というやつは、ま、いってみれば"将来レスラーになるかもしれない"という自己紹介にすぎないわけでして、デビュー後の数カ月、新人たちはレスラーになりきれない部分を誠意でカバーしつつリングにのぼるしかないのだ。

しかし、誠意でカバーするったってね、あなた、辛らつないいかたをすれば未熟な料理の腕を景品でゴメンしているレストランのコックみたいなものよ。いつまでも続けられたらお客の寛容さだって、いいかげん底をついちゃう。

つまり、だ。レスラーにはそのテの誠意や一生懸命さはホントは不要なわけであって、不要というコトバが過激すぎるなら、いわば代用品だといいかえてもいい。

じゃあ、何の代用品なのか？ 傲岸不遜、唯我独尊、狷介孤高。漢字ばっかしで目がチカチカするけど、ほらアレですよ。唇をフンとひんまげあごを突き出し、対戦相手だけでなく観客までものんでかかるゴーガンな態度。人をよせつけない気迫で、一瞬、観客のウブ毛をフルッとたたせるような妖しい気配。結局、こういうゾクゾクする拒絶的なところがレスラーの真実なんだ。

"誠意があればそこそこいけるんでないかい"なんつー学級委員的見解は、この拒絶の前ではペシャンコになっちまうわけでして、私としてはこのことをとくに小倉由美あたりによく聞いてほしいね。

とはいえ、実は、この記事の初めから私の頭にあるのは山崎五紀その人だ。最近の五紀の試合には不思議なくらいレスラーとしての山崎五紀の真実がにじみ出るようになっている。マットからソクソクとたちのぼる気迫、花道にビシッと一本たるみなく張った拒絶感が五紀の中に確実に生まれてきている。五紀は今、ホンモノ中のホンモノのレスラーとして誕生する瞬間をむかえているのだ。

ホンモノのレスラーが生まれる瞬間！

『あたしがいることを忘れんなよ！』

長与千種はいう。

「五紀は最近しゃべるようになった

飛鳥との試合で山崎はプロの執念を見せた

わね」

私生活での話ではない。リングの上で、だ。長与と対戦した五紀は、リング上で長与の目を火が出るほどにらんでこう叫んだ。

「お前らばっかりチャラチャラしやがって、あたしがいることを忘れんなよっ!!」

「あの子の、あの声、あの口調、あたし今でも耳に残ってるんですよ」

長与は考えながらいう。「不思議と腹はたたなかったわね。あの子が『あたしがいることを忘れんな』って叫ぶ気持ちがズーンと胸の奥でわかるような気がしたから」

〝あたしがいることを忘れるな〟このくらい鮮明な〝レスラー五紀〟としての自己表明は他に例がないだろう。たしかに五紀はいま1人の若豹のようなレスラーとして生まれかわろうとしている。

「でもね、あの子ったらリングでいったことはぜーんぶ忘れちゃってるんですよ」長与は笑う。「その忘れちゃうってこともまた、スゴ味なんだけど」

五紀は、長与もいうようにリングにあがると人格が一変するタイプのレスラーだ。しかも、その人格の変化を本人がおぼえていないというのだからこれはおそろしい。

しかし五紀本人にいわせると、リングでのことをすべて忘れるというわけではなさそうだ。

『山崎、おまえってシブトイなぁ！』

「あたしね、リングにのぼるとホントはきこえないはずの声がきこえるんです」

山崎はシャイな表情でいう。

「たとえばフォールされかけて、もうダメかなと自分で思いながらもブリッジでかえすことありますでしょ。

そんなときフッときこえるんですね、『山崎、お前シブトイなあ』

男の声とも女の声ともつかないな。1人の声でもないし、大勢の声でもないです。

『山崎ッ、お前、ほんっとシブトイなあ』

その声が、あたしのことを感心してくれるんですよね、ほんとに感心したって声なんですよね、

『ほんと？ よかった？』

ってね、思わずききかえしてしまいそうな、とてもあったかい声なんですよ」

五紀は熱をこめて、ゆっくりゆっくりしゃべる。

「時間にしたら、ほんの一瞬なんですよね、きっと。

でも、ほんの一瞬のその声を聞くために、あたし試合してるんじゃないかな。ほんとにこの頃そう思う。

そのかわり、おさえられて、ふと気合をぬいちゃってね、そのまま負けたりすると、『このニセモノッ！』ってきこえるんですよ。ニセモノ？ あ、ほんとだ、あたしはニセモノのレスラーだってね、そう思う」

あたしが泣くのは、そういう時なんです。そう言って五紀はコブシを固める。

「だから、最近ではね、あの声は自分の心の声なんだ、と。あたしはリングの上で、自分自身の心に〝しぶとい〟って評価してもらうためにたたかっているんだ、と」

『姫路にいかん？』『ウチ、ちょっと』

そう思うようになったの、と五紀はきっぱりいった。

「あたしの家、決してラクじゃなかったんですよね。

おとうさん、道楽やったから、おかあさんがずうっとお金のことで苦労してたね。

そういうの見て育ってきたから、おこづかいとかね、一度もねだったことないような子供だったんですよ、あたし。

あたしらの方では姫路いうのが繁華街で、ちょっと大きな買い物だとみんな姫路にいくの。そんで、中学生にもなると、ともだちがさそうわけ。

『五紀、姫路までいかへん？』

って。あたしいつも

『うん、うち、ちょっとやめとくわ』

いってた。もちろん、ウチにお金がないからいけへん、なんていわないけどね、なんのかんの理由つけて断ってしまう。おねだりは、いっぺんもしたことない。ともだちと買い物行ったこともめったにない。

〝レスラーになりたい〟という希望はそんな五紀が生まれてはじめて持った人生へのおねだりだったのだ。

10月21日木更津大会で飛鳥と対戦した山崎、この試合で彼女はホンモノへまた一歩近づいた

「この頃急に夜、目がさめて他の兄姉のこと考えることがあるんです。

あたしだけ、こんな好きなことやっとっていいんかなあって。他の兄姉はもっともっときゅうくつに世の中渡っとるのにね。あたしだけレスラーになりたいって夢みてたら、ホントにレスラーになれちゃって、しかも、だんだん一人前のレスラーになれてきて……。

そんなこと考えると、思わずベッドの上で体がふるえてくること、あるんですよ」

デビルの翼の下から飛び立て、五紀！

自分がレスラーである、という幸福感に体がふるえる選手が、女子レスラーの中にあと何人いるだろう？ 五紀のレスラーとしての原動力に、この謙虚な気持ちが一役かっていることはまちがいないところだ。

『デビルさんと訣別するとき』

五紀の頭の中には、今、師匠格のデビル雅美からの精神的独立の問題がみえかくれしている。

「デビルさんとは私生活でも親しいしね、大先輩だけど、決して頭ごなしに自分のレスリングを押しつけるわけじゃなくて、新米のあたしの意見もよく聞いてくれました」

でも、それだけではこれからの山崎五紀は成立しない。彼女はまよったすえにこういいきった。

「あたしは、これからホントに自分の意見を、一人前の、誰の助けもかりないで自立できるレスラーとしての意見を持たなくちゃいかん、と思うんです。

そして一人前のレスラーというのはどんな相手に対してもひるんだり、引いたりしないものですよね。そうでしょ？ ね」

五紀はこの言葉ですべてを察してくれ、というような目でこちらをみると、なぜか唐突に引退したタランチェラのことを話し出した。

「タランチェラさんは、デビルさんの理想的なパートナーで……」

五紀はそこでしばらく黙る。

「でも、あたしは、タランチェラさんじゃ……ない、そう思いません？」

五紀。あなたの沈黙は実に雄弁だった。あなたが言わなかったところをあえていおう。五紀が1頭の傲岸な豹、1人の魅力的な拒絶感をただよわせたファイターになるのは、デビルと決別する、そのときにちがいない、と。

（I・M子）

極悪同盟の鎖攻撃に苦悶する山崎

たたきつぶしてやる!!

極悪ギャルズはそう叫んだ！

同期生の長与千種が私たちのターゲット 必ず叩きつぶすよ！

——えー、今日はダンプさんとクレーンさんに、直撃スペシャル・インタビューを行わせていただきますのでよろしく。

ダンプ どこがスペシャルなんだよ！ いつもと変わらないだろうが。

クレーン 早くやれよ！ 忙しいんだからな。

——はい、わかりました。ところで、お二人が、チームを結成した動機は何ですか？

クレーン それは、私達の闘いのスタイルが合ったからだね。

ダンプ そうだな。私達は試合に勝つためには、手段を選ばない。反則だろうが何だろうが、相手を痛めつけて勝てれば、それでいいのさ。

クレーン そう。世の中の奴は、よく私達のことを、ひきょうだとか悪い奴だとかいうけど、自分達のレスリング・スタイルには自信を持っているから、誰にも文句は言わせないよ。

——昔、あなた方はデビル軍団の一員として、デビル雅美選手と一緒にタッグを組んでいましたね？

クレーン その名前を言うな！ 今それが私の一番嫌いな名前だ！ あいつは私達を裏切って、ひとりで〝いい子ちゃん〟になりやがった。私達にとって、あのデビルの「正統派転向宣言」ほど、自分達のプライドを傷つけられたものはなかった。

——でも、悪いのはあなた方じゃないんですか？

クレーン どうしてだ！ 私達はデビルに教わったスタイルで試合をし、デビルを立てて試合をしてきた。それなのに、何で急に自分だけ「凶器は使わない」なんて、言いだせるんだ？ 第一、木刀を使い出したのだって、デビルじゃないか！ そうだろ！

ダンプ 確かにその通りだ。でも私は長与千種の方が嫌いだね。あの野郎、チャラチャラしやがって。4月1日の後楽園では奴の髪の毛を試合中ハサミで切ってやったけど、今度やる時は、あいつを丸坊主にしてやるよ！

——お二人とクラッシュ（長与、飛鳥）の二人は皆、昭和55年に入門した、いわば同期生。新人時代は、仲も良かったんじゃないですか？

ダンプ ウーン…。新人の頃は、まだ自分の試合スタイルが決まっていなかったし…。

——つまり、あくまでも正統派でいくか、手段を選ばず勝利をつかもうとする、いわゆる悪役スタイルでいくか……ということですね。

ダンプ まぁそうだな。だから、あの頃は皆、お互いがライバルであっても、感情的なしこりは何もなかったんだ。ただ基礎を覚えるための練習、練習の繰り返しだったからな…。

クレーン でも今は、お互いやりたいプロレスのスタイルが違うんだから、反目せざるをえない訳よ。私達だって自分の試合スタイルは大切にしたいからね。

私たちは根っからのヒールじゃないよ！ 結婚だって夢見てる

——なるほど、あなた方はあなた方なりに、自分の試合における信条というものには、自信を持っているのですね。

ダンプ それはもちろんだ。だからこそ今のクラッシュやデビルは許せないし、あいつらとやる（対戦する）時は闘志が沸くね。

クレーン その通り。私達だって負けたくないものね。

——なるほど、よくわかりました。……ところで話は全然変わりますが、好みの男性のタイプは、どんな人ですか。

ダンプ どうしてそんなこと聞くんだよ。

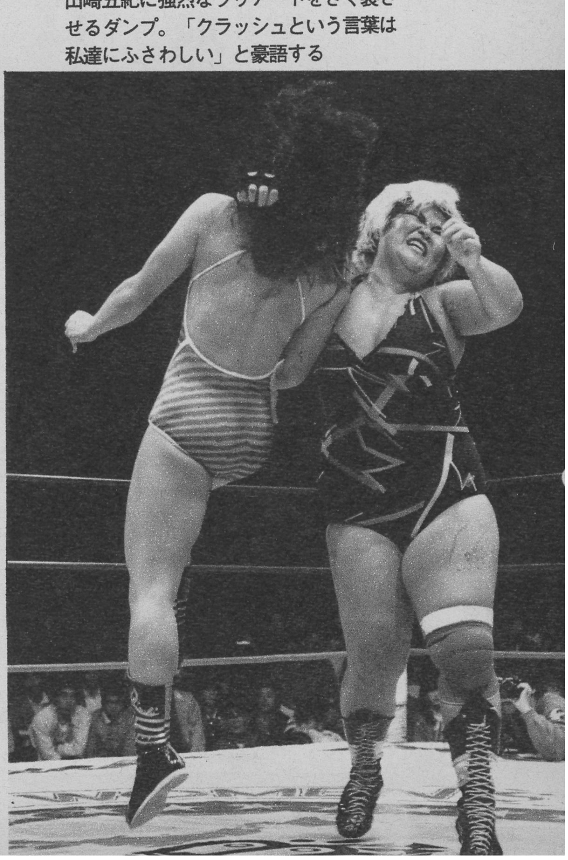
クレーン そうだよ。関係ないだろうが！

——まぁそう言わず、ぜひ教えて下さいよ。お願いします！この通り！（と言って、記者、土下座する）

ダンプ わかった、わかった。そこまで言うなら教えてあげるよ。私は俳優の中村雅俊さんみたいな人。あったかそうで、人間味があるじゃない？ 同じ意味で、西田敏行さんや竹田鉄矢さんも、あこがれの人ね。

クレーン 私は、いかにも男らしい人で、高倉健さんとか舘ひろしさんとか…。もう、いかにも〝遊び〟を知り尽くしたっていう感じがイイな。

ノーメークだとカワイイのにメークをするとこのド迫力。もーダンプは女子プロ界のペインティングレスラーといっていいかもしれません



山崎五紀に強烈なラリアートをさく裂させるダンプ。「クラッシュという言葉は私達にふさわしい」と豪語する

クラッシュ・ギャルズ、ジャガー、デビルらの"陽"の人気で盛りあがる、最近の女子プロレス。しかし、その中にあって、ひときわ輝く"陰"の帝王が二人いることを忘れてはならない。それがダンプ松本とクレーン・ユウの極悪コンビだ。ここでは、そのダンプとクレーンに、思うぞんぶん考えていることを、ぶちまけてもらおう。

聞きて＝安西伸一

——おーっと、クレーンさんも大胆なことを、おっしゃいますね。

クレーン　まあね。私も、もう大人だから（一同爆笑）。

——では、お二人の今後の目標を聞かせていただきましょう。まず、クレーンさんから。

クレーン　私は「結婚」。

——え——っ！（記者仰天！）

クレーン　そんな声出さないでよ！　これは、あくまでも夢！　夢なんだから！　私だってリングを下りたらひとりの女の子。「結婚」だって夢見るわよ。

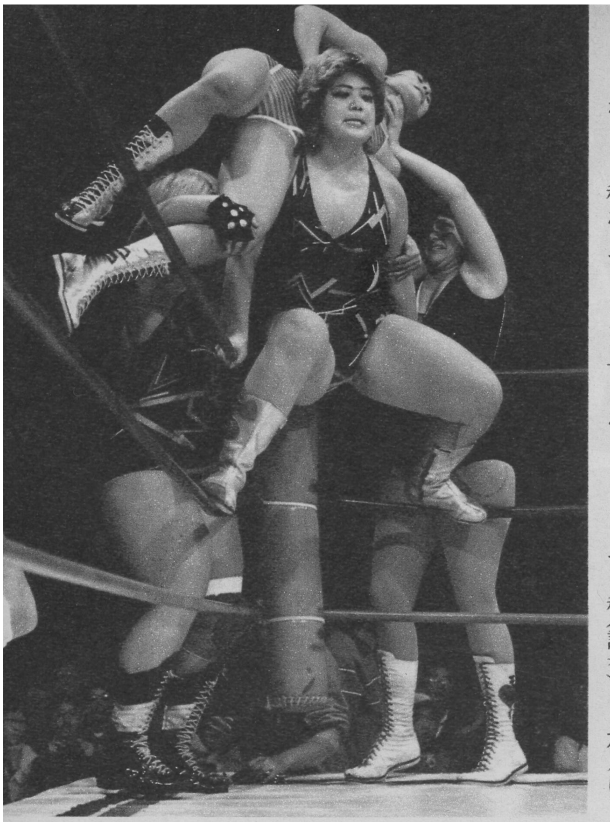
ダンプ　そうそう。テレビだけでしか私達を見ていない人は、本当に私達が、根っからの悪人だと思ってる人がいるみたいだけど、そうじゃないよ。

クレーン　中には、私達が普段からこのメイクをして、街を歩いていると思ってる人もいるようよ。

ダンプ　そんなアホな。

——でも私（記者）も、友人に「ダンプとクレーンは、買い物する時も、鎖を持ってるのか？」なんて、聞かれましたよ。

ダンプ&クレーン　まさか（爆笑）。



ダンプの良き相棒として大活躍のクレーン・ユウ

打倒デビル、そしてクラッシュ・ギャルズ破壊が'85年の目標

——話がそれてしまいましたが、クレーンさんのプロレスの方の目標は何でしょう？

クレーン　私は、私の前にはだかる敵は、すべて叩きつぶす。どんな手段を使ってもだ。そしてダンプと組んでWWWA世界タッグの座を目指す。シングルでも王座に挑戦して、一度はベルトを巻いてみたい。特に打倒デビルだ。自分達のボスだったデビルに勝つことは、私のレスラーとしてのライフ・ワークでもあるような気がする。

——ではダンプさんは？

ダンプ　私はまず、クラッシュ・ギャルズを倒すこと。あの二人には絶対に負けたくない…。そして、クラッシュと私達との試合が、いつか女子プロの中で、本当のメイン・エベントになるまで、必死に努力していきたい。そうならなければ、今まで自分が、何のために先輩達の下で、歯をくいしばってはい上がってきたのか、わからないからね。

——しかしダンプさんは、相当、クラッシュ・ギャルズに固執していますね。どうしてですか？

ダンプ　第一、あいつらの名前が気に入らないんだ。だって"クラッシュ"っていうのは「破壊する」っていう意味だろ？　だったら、クラッシュ・ギャルズという名は、私達にこそふさわしい名じゃないか！

——あのー、……。お二人には"クラッシュ"という言葉は、ある意味で当たっているとも考えられますが、"ギャル"というイメージには、ちょっと………。

ダンプ&クレーン　なに——っ!!

——ギャ〜〜〜〜〜。

——・——・——・——

かくして記者の、極悪コンビへのインタビューは終わった。

最後に「今度何か気にさわることを言ったら、また腕をねじ曲げるよ！」と言って去った、ダンプとクレーン。ドキドキ、コワゴワの取材だったが、まずは二人の本音が聞けて大成功だった。

これからも、女子プロをかきまわす異分子として、頑張れ！

ダンプ、クレーン、そして謎の覆面マネジャーは、まさに悪の三位一体。いやこれに阿部四郎レフェリーが…悪の四位一体

女子プロ中継は、こう見ると10倍オモシロイのだ！

ハンディカメラは真の女子プロファンにはチト迷惑なのだ！

ある月曜の夜、テレビのチャンネルを8にあわせ、ミカンをむきながら、友人と二人でこんな話をした。

「女子プロレスが、定番でみれるようになったというのは、まずは快挙だったね」

「そうだね」

「でもさ、TVって不便なところもある」

「たとえば？」

「TVって、ほら、ハンディカメラじゃない」

「なるほど」

「ずっと安定した視点から試合を追うってわけにはいかないからさ」

「たしかに必要以上にめまぐるしいことがあるな」

「それから、早い技を時々、カメラにとらえそこなうことがあるよね」

「技がおわっちゃってから、選手のノビた図をみせられると、ハラが立つもんな」

「あとで、雑誌なんかでその技が、新開発のとっておきのヤツだったなんつー話を読むとさ、阿部四郎レフエリーじゃないけど、カメラをけとばしたくなったりして」

「ハハ、観客ってワガママなもんだよね」

「それからロープにふったときの、お尻の大写しをやるでしょ」

「ヒワイっていうより、なんだなんだって驚いちゃうやつ」

「茶の間で、思わず、おしつぶされないようにうしろにそっくりかえったりしてさあ」

「あれは、女子プロレスの中継が始まって以来の伝統的アングルだといえるんじゃないかな」

「今の色気ぬきのプロレスにとっては、ああいうアングルとか、技を追わずに大股びらきショットばっかり追うっていうやりかたは、はっきりいって古い」

「たしかにね」

「女子プロレスがかわったんなら、放映する視点もかわんなきゃ」

「うーん、それ、カメラの視点だけじゃなくて、僕ら、観客の視点のことにもいえるのかな」

友人はミカンのふさを口にくわえたまま考え深そうにこういった。

お、なるほど。たしかにカメラの視点に文句をつけるのなら、観客のみる目にも工夫がなくていい、というわけではないよな。

「このあいだ、ライオネス飛鳥と話したんだけどさ」

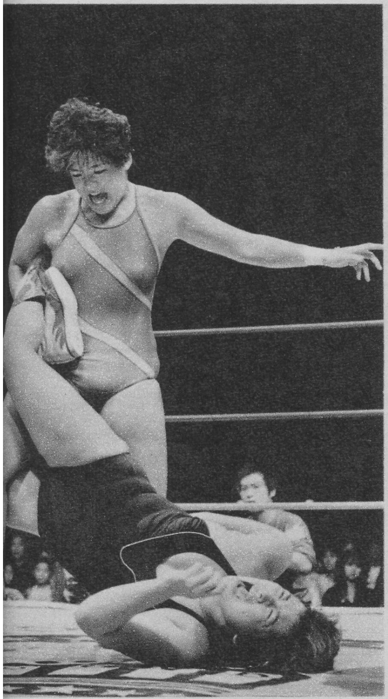
友人は飛鳥の知りあいである。

「彼女がこういうんだな。今の女子プロレスは大技が主体でロープ上段から技をかけるのなんかが当たり前の技になっちゃった、と」

「ふむふむ」

「でも、こういう大きな、立体攻撃というのは本来、あまりプロレスを知らない人にプロレスの楽しさを教えるのにはいいけど、プロレスを見る目を肥やしていくというか、プロの観客を増やすためには、あまり効果がない」

「なるほど。グラウンド技や、細かい関節技なんかには、大技とはちがうシブーい大人の味があるもんね」



サソリをかけようとする飛鳥、必死でそれをカットする大森、この白熱の攻防はTVが一番よくわかるのだ

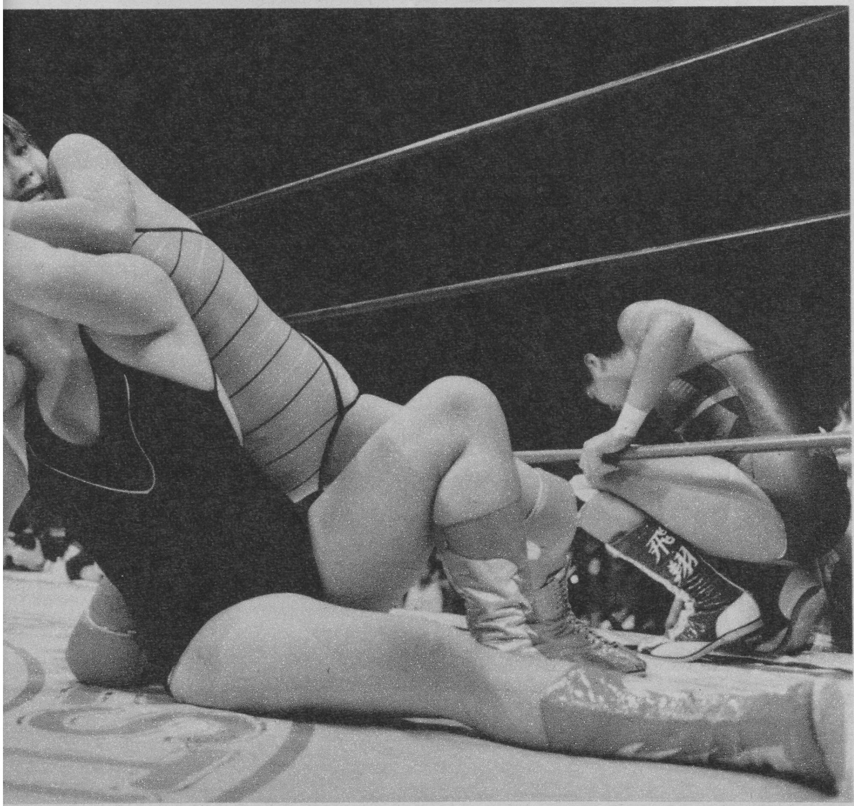
そのとき、テレビの画面には、ちょうどジャガー横田が立野記代の腕をきれいにキメて卍をかけたところがうつった。友人と私はしばし、その画面にみいり、そのあと顔をみぁわせた。

関節技と女同士の意地の攻防を見分けるにはTV画面が一番

「そういえば、関節技とかグラウンド技って、テレビのほうがよくわかるよな」

友人が大発見！という感じでいう。

「おい、テレビって案外、観客の目をプロにしてくれる道具かもしれん



最近はUWF流のグラウンド技にねちっこさを発揮するクラッシュ・ギャルズ

TV女子プロファン必読のページだぞ！

最近、月曜夜7時からの『女子プロ中継』が好評だ。常に10%をキープしているこの女子プロ番組をもっともっとオモシロク見ちゃうには一体どーしたらいいのか。その答えを教えてあげちゃおーというのが、このページなんでス。これでキミが〝女子プロ〟を10倍も楽しめるだろーことは確実なんでありマス。

こうした単純な手四つの技にも、女子同士の意地が伝わってくる

ぞ」

そこで私たち二人は、コタツの上にメモ用紙をひろげ、女子プロレス中継をもっと面白くみるためのポイントーそれは同時に私たち観客の目をプロとしてきたえてくれるだろうーをあげ始めた。

①『関節のキメかたをじっくりみる』

「何をおいても、まず最初にあげなきゃいけないのはこれだろう？」

「ナマでみるより、TVのほうがメリットがある。最大のポイントだもんね」

「ジャガーは関節技の名手だし、デビルもダイナミックな技を使うばかりと思われがちだが、あれで関節をキメるのがものすごくうまい。もちろんクラッシュギャルズも関節技に関しては一家言ある選手」

「つまりトップ選手というのは、みんな関節技の名手なわけさ」

「関節技についてよく知らない人でも、スパッとうまくキマッている場合には、解説席に座っているデイリースポーツの宮本記者が特徴のあるかすれ声で指摘してくれるから注意しておけばみのがさないよな」

「宮本記者の技をみる目はとにかくすごく正確迅速ってとこだもんね」

「よく考えてみると、数あるプロレス中継のうちで、地味ではあるが、宮本記者ほど客観的で的確な解説者っていないんじゃないか？」

「それはいえてる。〟宮本記者の言動に注意する〝っていうのをTVをみるポイントのひとつにあげてもいいくらいかもね」

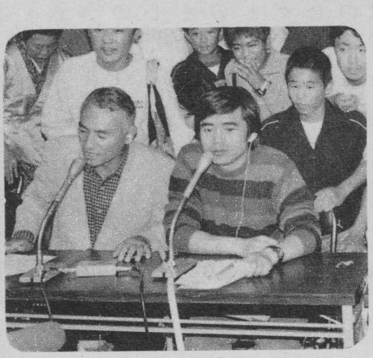
②『グラウンドでの意地の攻防をみる』

「俺はさ、グラウンド技のかけあいっていうのは意地の強いほうが勝つっていう意見なんだよ」

「いい例が、クラッシュのさそり固め」

「そうそう。クラッシュがさそりをかけると、大半の人の目が、かけている長与や飛鳥のほうにいってしまうけど、それじゃあいつまでたってもプロレスの観客としてアマチュアの域を出られないわけだ」

「プロの観客としては、さそりをかけられそうな選手がどうやって技をカットするか、に注目したい」



女子プロ中継の陰の功労者は志生野アナと宮本記者なのでーす

「このあいだの飛鳥対山崎戦では、山崎が飛鳥の足首にしっかり手をかけて、体をかえされないように、かなり長い間、がんばっていたよね」

「そのときの山崎の表情がすばらしかった。歯をくいしばり、目をカッとひらいてレスラーとしての意地ってものを体現してたよな」

「瞬間的な大技炸裂ではぜったいに出てこない、グラウンドでの意地とか気合が、テレビの画面をとおすとさらに鮮明に出てくる」

「これも試合場にいっちまったら逆にわからなくなる大事なポイントだね」

女子プロの場外乱闘劇は次の試合展開の大きなポイントだ！

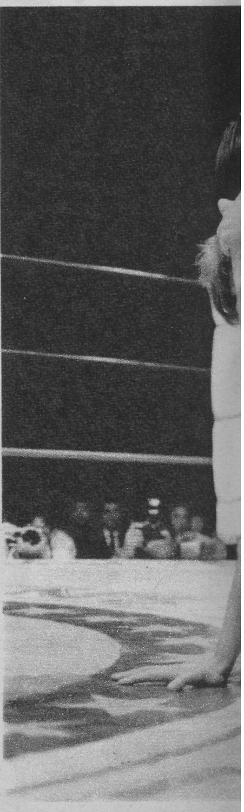
③『場外での選手の表情や状態をばっちり観察してヨミを深める』

「選手にとっては、場外に落ちたときが、試合の転機らしいな」

「へえ、そうなの？　だからナマでみていると場外からリターンした選手が今までとまったくちがうファイトをするんで、観客がとまどうことが多いわけだ」

「ナマだとはっきりみえないその場外の場面を、TVはバッチリうつしてくれるからね。

落ちたときの状態、表情、サポートにかけつけた新人の様子などから試合の転機がどっちへむくかを予想してみるのも面白いぜ」



「プロレスではリング上だけにドラマがあるわけじゃないからね」

「まったくね。場外のドラマを拾って、試合の行く末をヨメるようになったら、これこそホントのプロ観客といえるんじゃない？」

④『リング上の選手の気持ちを共感してみる』

「ねえ、君はナマでプロレスみているときと、TVでみるときと、どっちが恐怖を感じる？」

「たとえばデビルが新人をメチャメチャにやっつけてるときとか、極悪コンビが暴走してるときとか？」

「うん」

「そりゃ、TVのほうが恐怖感がつのるんじゃないかなあ。自分が現場にいないだけにね」

「ちょうど洋服ダンスにかくれて、少しあけた扉のすきまから殺人現場をのぞいているようなこわさがあるよな」

「いえる、いえる」

「だから僕は、恐怖感とか、コワさがいりまじった爽快感とかいう、プロレスの真骨頂を味わおうというポイントを、TVのみかたの最後にいれたいと思う」

「レスラーはコワくなくなったら最後だもんね。いかにコワがってみるかというのも、プロ観客の心得のひとつ」

「そろそろ、次の試合が始まるぜ」

「プロの観客候補生としては、せいぜい気を入れてコワがろうね」

「あはは」

小倉由美になぜか

いま、若手レスラーの中で、小倉の瞳が最高に輝いている！

何気ない表情が佐山サトルにそっくりの小倉

トレーナー姿のよく似合う少女がいた。スター選手が思い思いに着飾った服装で、バスに乗り込むのに比べ、少女はいつもトレーナー姿で会場入りする。

新人レスラーにとって、トレーナーは制服に等しい。だが、少女のトレーナー姿は、ひときわ新鮮に、なぜか光ってみえた。

そして、会場に着くと、せわしなく動き回り先輩の雑用も黙々とこなしている。そんな、忙しそうな動作の中で、少女の目は常にリングをみつめていた。

ある時は練習中、またある時はセコンドで、少女は先輩の技や動きを喰い入るようにみつめているのだ。

少女の名は小倉由美・17歳—ゴンゴンの愛称で前座の人気者である。

彼女は人一倍の上昇志向と吸収力で、同期の中野恵子、小松美加、永友香奈子らを先導している。だから試合中の小倉を追うよりも、リング外の彼女に目を向ける方が、その向上心がよく理解できるのだ。

それはセコンドに付いた小倉の、目の焦点が鮮明だからである。新人にとって、セコンドの作業は単にリングコスチュームを受け取ったり、試合を観戦するだけではすまされないのだ。

闘っている選手の動きを察知してリング内外の状況判断…選手の誘導を初め、観客とのバランス感覚を保たなければならない。

リング上の先輩たちの動きを真剣に見つめる小倉

ある意味でセコンドとは、タレントでいえばロード・マネジャーや付け人の役目と同等である。

それは女子プロレスの世界独特のものであるかもしれないが、また、小倉由美の姿勢はある種、優等生的であり何事もソツなく消化しているのだ。

160センチ、66キロ…全体的に大型化の兆しが出始めている女子レスラーにあって、小倉が指定席を勝ち取るというのは前途多難かもしれない。

彼女のファイトは、新人らしくがむしゃらだ。負けっぷりがいいのである。もはや、受け身の反復運動といった初期を乗り切り、耐えることを学ぶ時期に入っている。

小倉の小さな体から発散されるパワーは佐山サトルそっくり

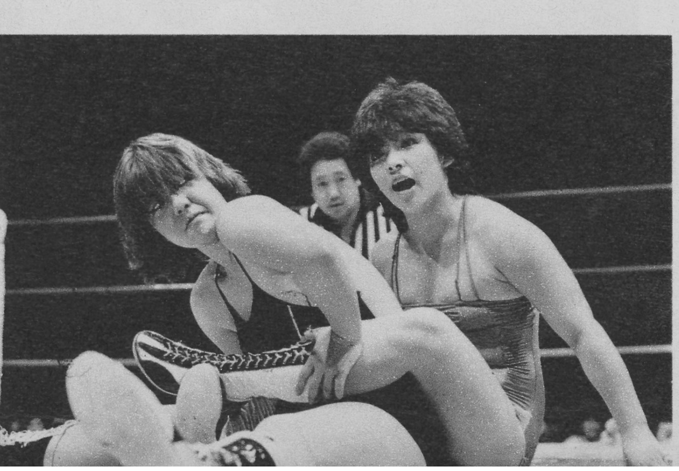
小倉の試合を見ていると、ジャガー横田同様〝押し〟が強いのが気になるところだ。プロレスは、押す側と引く側の距離を十分に保つことが問題である。

押しっぱなしでは本物とはいえない。試合の組み立ての中で、引くタイミングをつかめれば更に伸びるだろう。

ここに数枚の、さりげないスナップがある。

誰かに似てないだろうか？　そう、あのスーパー・タイガーこと佐山サトルに酷似しているのである。

佐山サトルは天才的な運動神経と



◀常に全力で相手にぶつかる小倉、いっこくも早く本格派へ脱皮してほしい

“輝きたいの！”とある少女レスラーはいった

黙々と前座をつとめる一人の少女レスラーになぜか、あの佐山サトルの姿を見た。単に容姿が似ているだけでなく、日常生活での礼儀正しいハキハキした受け答えと笑顔があの佐山くんにそっくりなのだ。彼女にも本物の佐山に、“女・佐山”になる可能性が含まれているのではないか！

佐山サトルの姿を見た！

アイドルを超えた本格派レスラーを目指せ、小倉由美！

天性の闘争心で、一時代を極めた。彼のめざす“シューティング”は、小型のハンデなどみじんも感じさせぬ凄絶なものだ。

ジュニア・ヘビー級の頂点から、新格闘技シューティングでヘビー級の証明…おそらく現在の佐山にとって、ヘビー級との闘いは彼の持つ資質をもってすれば、体格差などプラス・マイナス・ゼロの状態を作り出すに違いない。

ちょうど小倉は、佐山をひと回り小さくした感じだ。ポチャッとした顔や体型、それは男と女の違いはあるものの、この雰囲気は何かを感じずにはいられない。

極端な表現かもしれないが、小倉から発散されるパワーは、佐山サトルを垣間見る思いがすると言ってはいけないだろうか？

それは単に、顔が似ているだけかもしれない。勝手な思い込みかもしれない…。

ただ、小倉のなにげない仕草を見ているだけで、佐山とオーバーラップすることを楽しんで見るのもいいではないか。

ハキハキした応待、さりげない笑顔…小倉と佐山は、そんな素顔もよく似ている。

そうだ、小倉由美は“女・佐山サトル”にならなければいけない。いや、その可能性を十分に秘めているのだ。

そのためには、柔軟な身体と強じんなまでのバネを養わなければいけない。それが彼女に課せられた務めなのである。

現状では小倉は、小型ながら豆タンクのようなパワー派だ。パワー派を早く脱皮しなくてはならない。

クラッシュ・ギャルズにキックの指導を受けるのもいいだろう。佐山もキックが彼の“出発点”なのだから…。

小倉の手足は短い。キックに不向きじゃないかって？　佐山だって胴長短足（失礼）だぜ！

入門当時は、まるでぬいぐるみの熊みたいな愛らしさがあった。そして、コアラの自然さを身に付けアイドルになろうとしている。

だが、アイドルではなく本格派にならなければならない。

もはや、集団作業的な練習は不要なのだ。リングに同志がいても、仲間意識は皆無だ。

ひとりぼっちのリングで、ひとりぼっちのトレーニング。そんな影の部分を大切にしてほしい。

2年目の夏が訪れて、小倉は合宿所を出た。公私の区別なく、会社の示した道から、個人の道を歩み始めている。

6畳一間でフロのないアパート、でも今は、それだけで十分。大切なお城である。

自立心に芽ばえた少女はやがて、内に隠されたパワーを、外に向けて燃焼し始める。

UWFのリングを見よ！レスラーは肉体的ハンデなど感じさせない。たゆまぬ、そしてありあまる努力さえあれば、成功できるのだ。

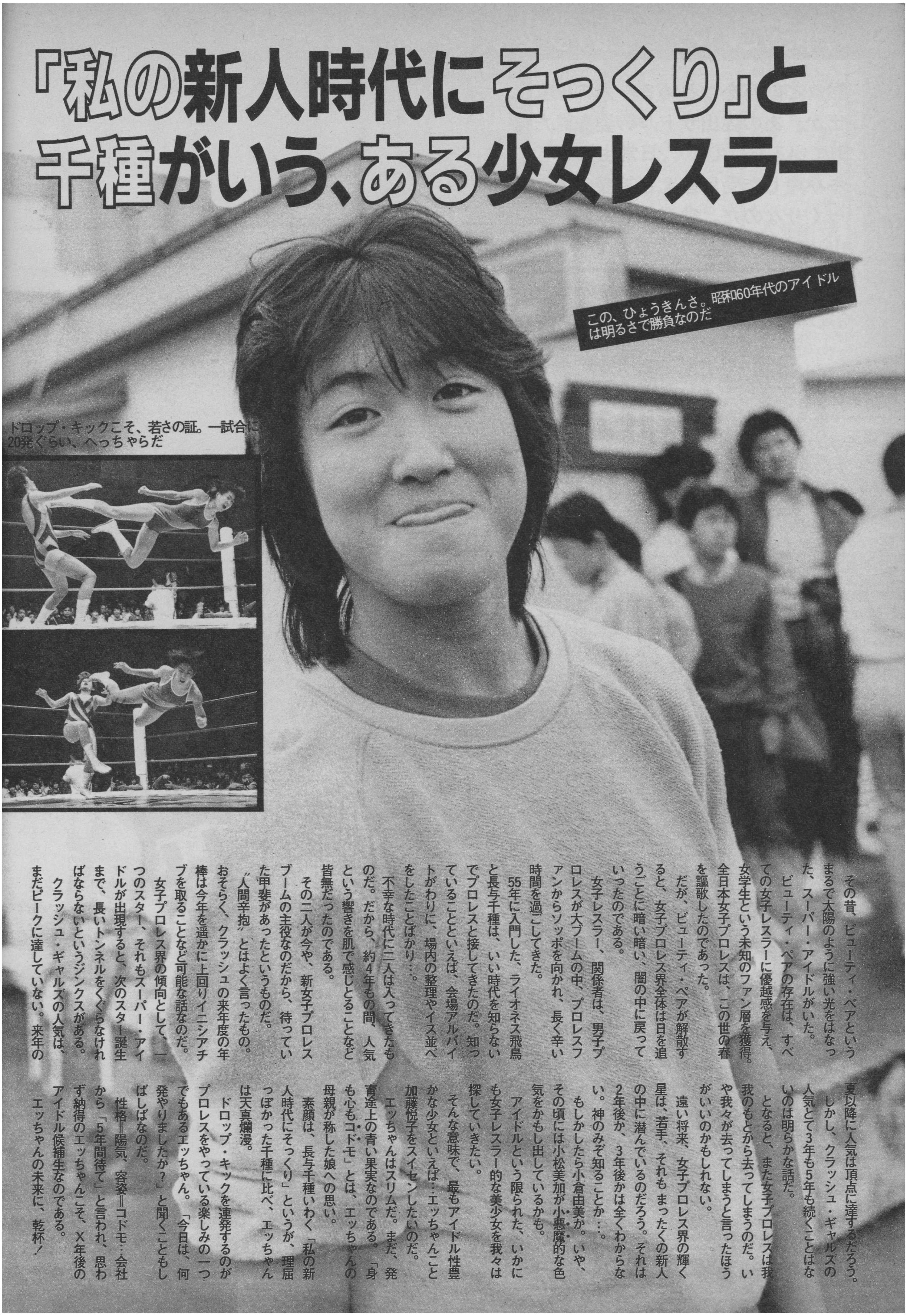
それは女子プロレスも同じことなのだ。

毎日がロードに明け暮れる。バスのシートで、すやすや眠りにつく小倉の脳裏をかすめるのは、明日を信じる無心の心だ。

こんにちは今日という時間、さようなら今日という時間…時をかける少女小倉由美は、時間の谷間を交差する。

あの、汗にまみれたトレーナーが少女の真実なのだから…。

「私の新人時代にそっくり」と千種がいう、ある少女レスラー



この、ひょうきんさ。昭和60年代のアイドルは明るさで勝負なのだ

ドロップ・キックこそ、若さの証。一試合に20発ぐらい、へっちゃらだ

その昔、ビューティ・ペアというまるで太陽のように強い光をはなった、スーパー・アイドルがいた。

ビューティ・ペアの存在は、すべての女子レスラーに優越感を与え、女学生という未知のファン層を獲得。全日本女子プロレスは、この世の春を謳歌したのであった。

だが、ビューティ・ペアが解散すると、女子プロレス界全体は日を追うごとに暗い暗い、闇の中に戻っていったのである。

女子レスラー、関係者は、男子プロレスが大ブームの中、プロレスファンからソッポを向かれ、長く辛い時間を過ごしてきた。

55年に入門した、ライオネス飛鳥と長与千種は、いい時代を知らないでプロレスと接してきたのだ。知っていることといえば、会場アルバイトがわりに、場内の整理やイス並べをしたことばかり……。

不幸な時代に二人は入ってきたものだ。だから、約4年もの間、人気という響きを肌で感じとることなど皆無だったのである。

その二人が今や、新女子プロレスブームの主役なのだから、待っていた甲斐があったというものだ。

〝人間辛抱〟とはよく言ったもの。おそらく、クラッシュの来年度の年俸は今年を遥かに上回りイニシアチブを取ることなど可能な話なのだ。

女子プロレス界の傾向として、一つのスター、それもスーパー・アイドルが出現すると、次のスター誕生まで、長いトンネルをくぐらなければならないというジンクスがある。

クラッシュ・ギャルズの人気は、まだピークに達していない。来年の夏以降に人気は頂点に達するだろう。

しかし、クラッシュ・ギャルズの人気とて3年も5年も続くことはないのは明らかな話だ。

となると、また女子プロレスは我々のもとから去ってしまうのだ。いや我々が去ってしまうと言ったほうがいいのかもしれない。

遠い将来、女子プロレス界の輝く星は、若手、それもまったくの新人の中に潜んでいるのだろう。それは2年後か、3年後かは全くわからない。神のみぞ知ることか……。

もしかしたら小倉由美か。いや、その頃には小松美加が小悪魔的な色気をかもし出しているかも。

アイドルという限られた、いかにも女子レスラー的な美少女を我々は探していきたい。

そんな意味で、最もアイドル性豊かな少女といえば……エッちゃんこと加藤悦子をスイセンしたいのだ。

エッちゃんはスリムだ。まだ、発育途上の青い果実なのである。「身も心もコドモ」とは、エッちゃんの母親が称した娘への思い。

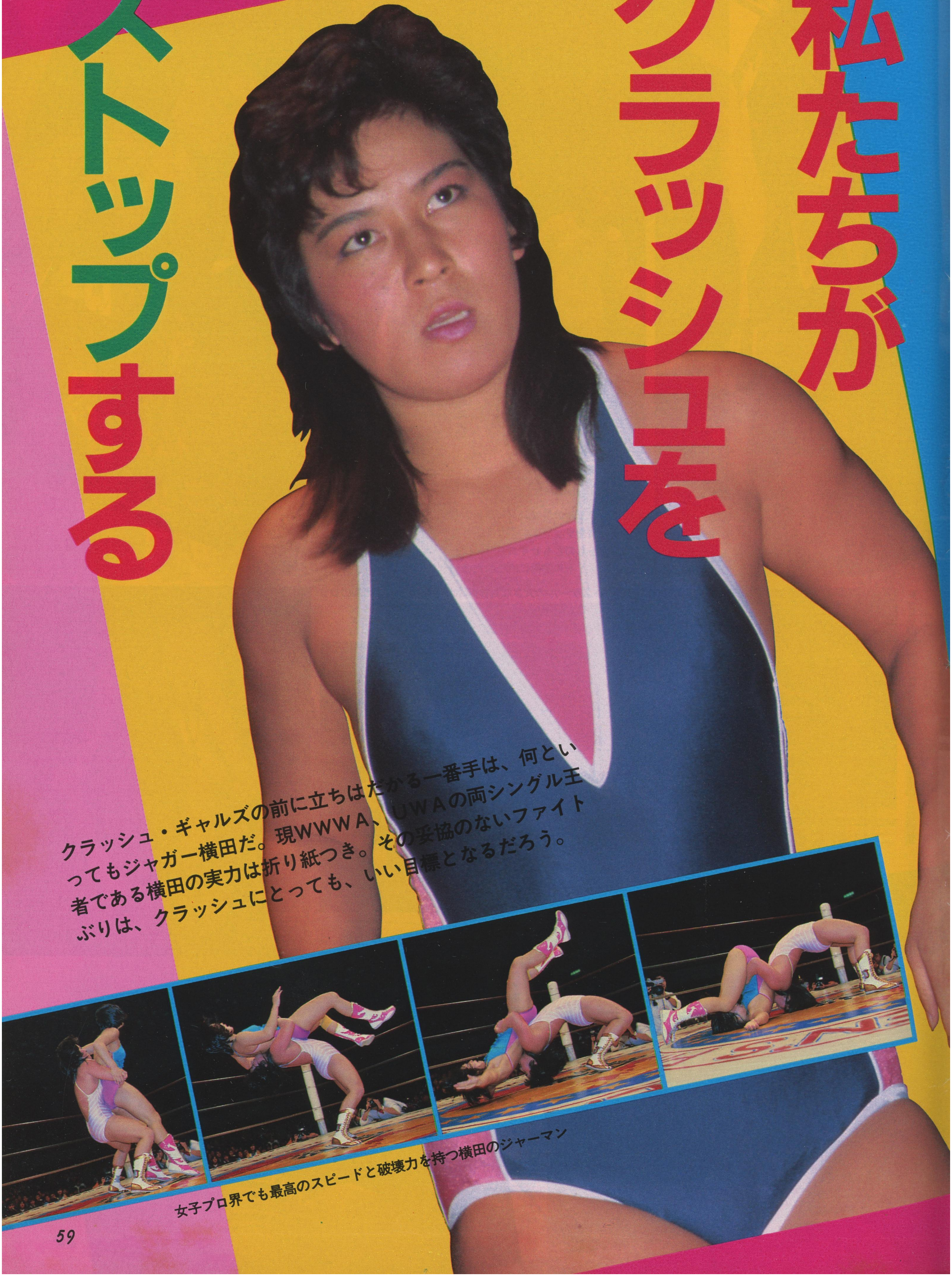
素顔は、長与千種いわく「私の新人時代にそっくり」というが、理屈っぽかった千種に比べ、エッちゃんは天真爛漫。

ドロップ・キックを連発するのがプロレスをやっている楽しみの一つでもあるエッちゃん。「今日は、何発やりましたか?」と聞くこともしばしばなのだ。

性格＝陽気、容姿＝コドモ…会社から「5年間待て」と言われ、思わず納得のエッちゃんこそ、X年後のアイドル候補生なのである。

エッちゃんの未来に、乾杯!

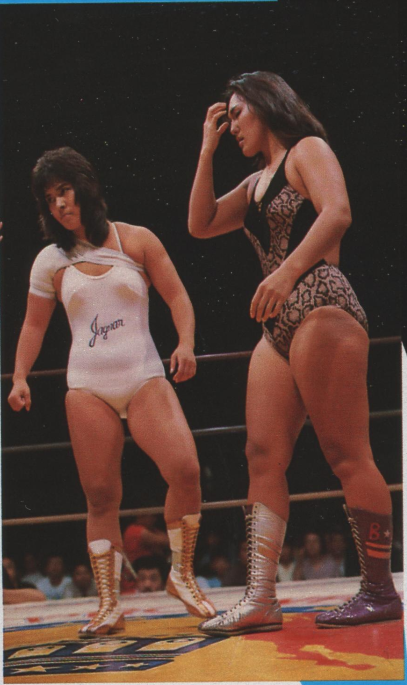
私たちがクラッシュをストップする

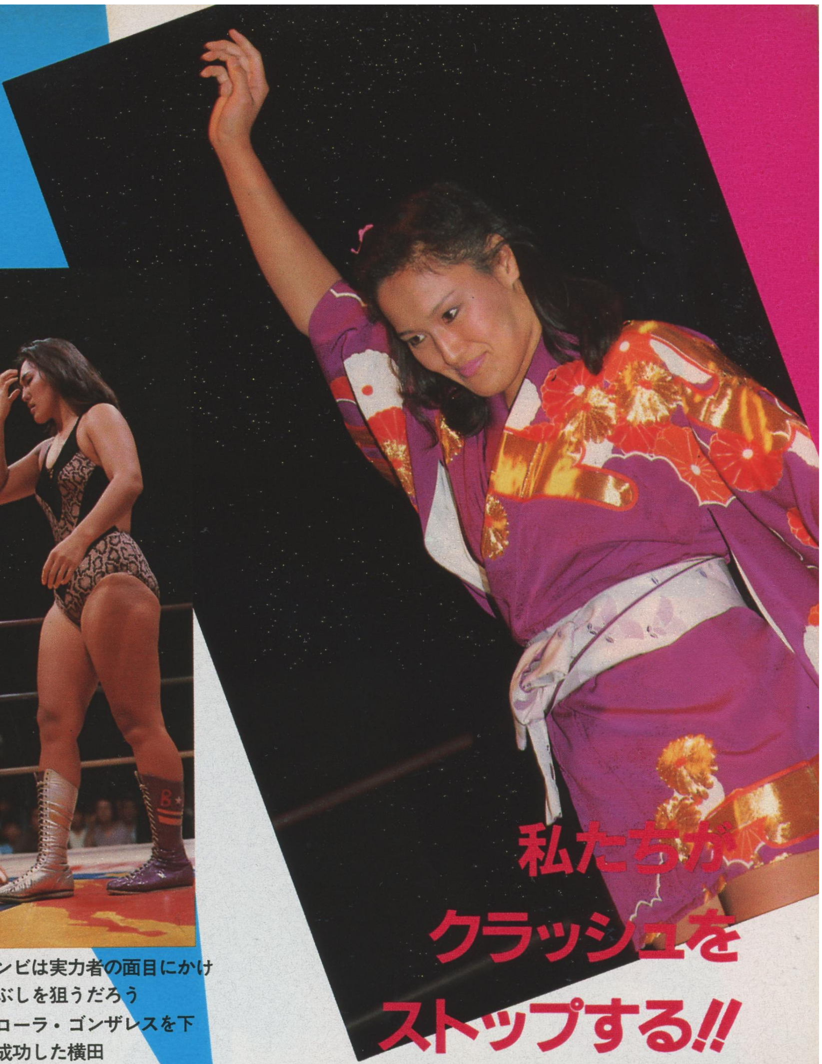


クラッシュ・ギャルズの前に立ちはだかる一番手は、何といってもジャガー横田だ。現WWWA、UWAの両シングル王者である横田の実力は折り紙つき。その妥協のないファイトぶりは、クラッシュにとっても、いい目標となるだろう。

女子プロ界でも最高のスピードと破壊力を持つ横田のジャーマン

▶試合の組み立て方、レスリングのうまさは天才的なデビル雅美





私たちがクラッシュをストップする!!

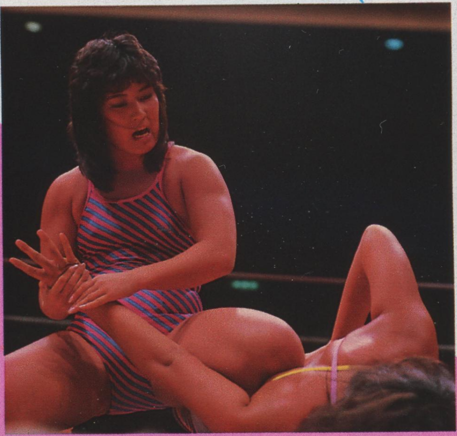
▲横田とデビルの最強コンビは実力者の面目にかけて、今後もクラッシュつぶしを狙うだろう

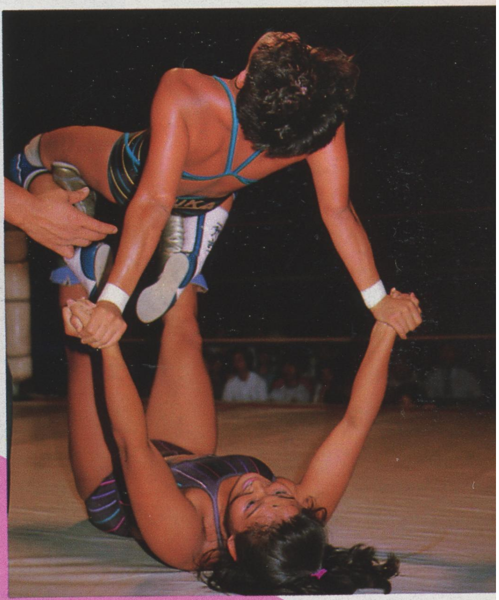
◀流血戦をものともせずローラ・ゴンザレスを下しUWAタイトル防衛に成功した横田

▶プロ精神のかたまりのようなデビルのこの表情

▶スケールの大きな荒技師ぶりを発揮するデビルのロメロ・スペシャル

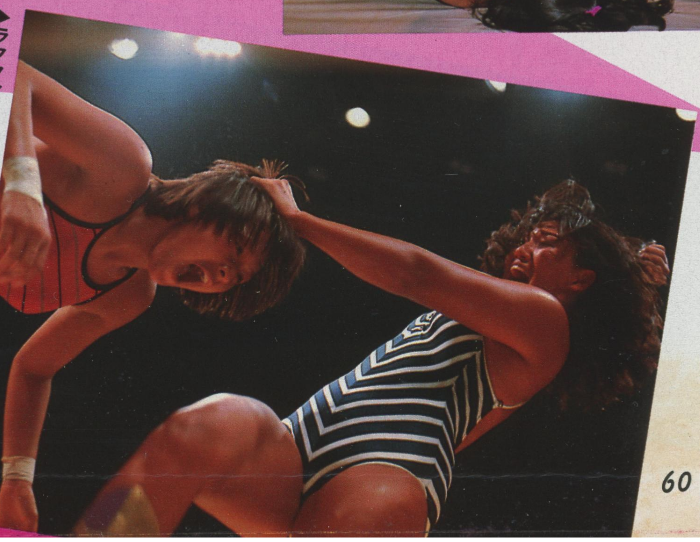
▼横田の戦う顔は本当に凄みがある

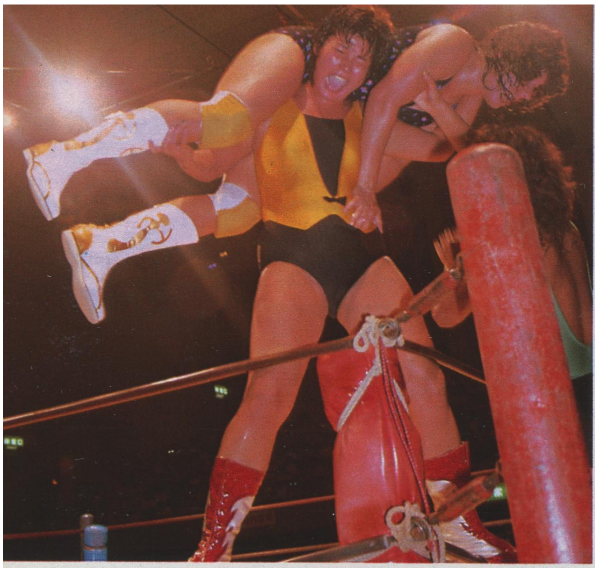




▶ラフファイトの激しさは定評がある

◀小柄だが腕力は抜群の横田

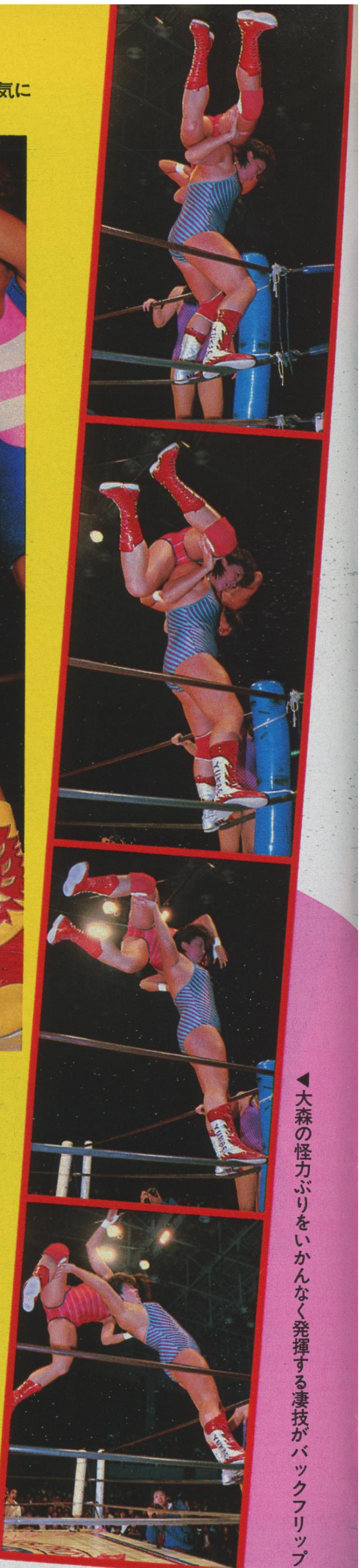




▼体格とセンスに恵まれているジャンボ堀だがケガが多いのが気になる

▶堀、大森のダイナマイト・ギャルズもクラッシュを叩いて人気復活を狙いたいところだ

◀大森の十八番技は雪崩れ式バックフリップだ



◀大森の怪力ぶりをいかんなく発揮する凄技がバックフリップ

▶デビル雅美を軽々とエアプレーンスピンで振り回す

私たちがクラッシュをストップする!!

▶対クラッシュ・ギャルズ戦でも決して力負けしていないのだが惜敗してしまった

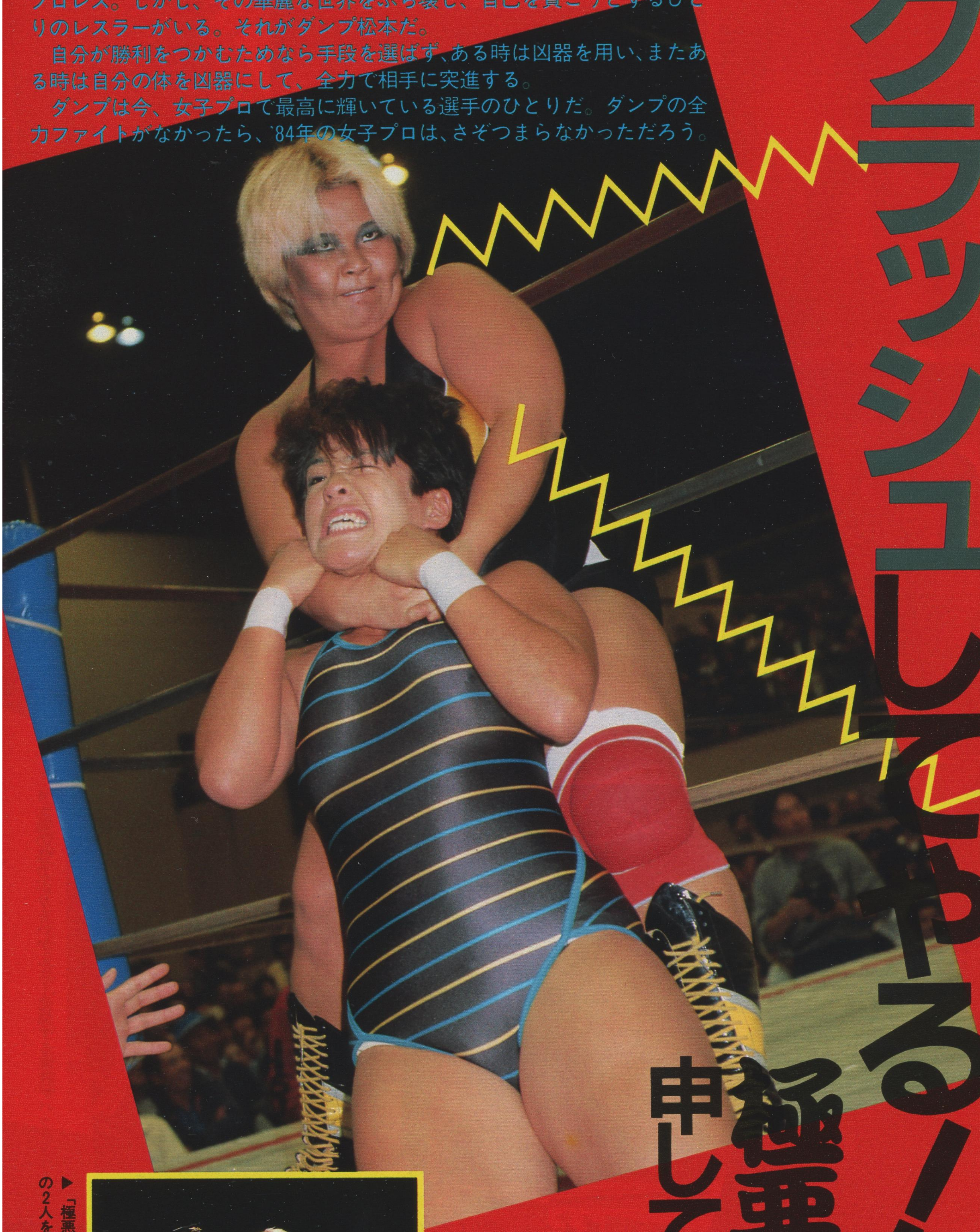
◀潜在能力の大きさではライオネス飛鳥に匹敵する大森ゆかりだが…

クラッシュの2人をクラッシュしてやる！と極悪同盟は申しております

クラッシュ・ギャルズを中心に、華やかな闘い模様をリングに描く女子プロレス。しかし、その華麗な世界をぶち壊し、自己を貫こうとするひとりのレスラーがいる。それがダンプ松本だ。

自分が勝利をつかむためなら手段を選ばず、ある時は凶器を用い、またある時は自分の体を凶器にして、全力で相手に突進する。

ダンプは今、女子プロで最高に輝いている選手のひとりだ。ダンプの全力ファイトがなかったら、'84年の女子プロは、さぞつまらなかっただろう。



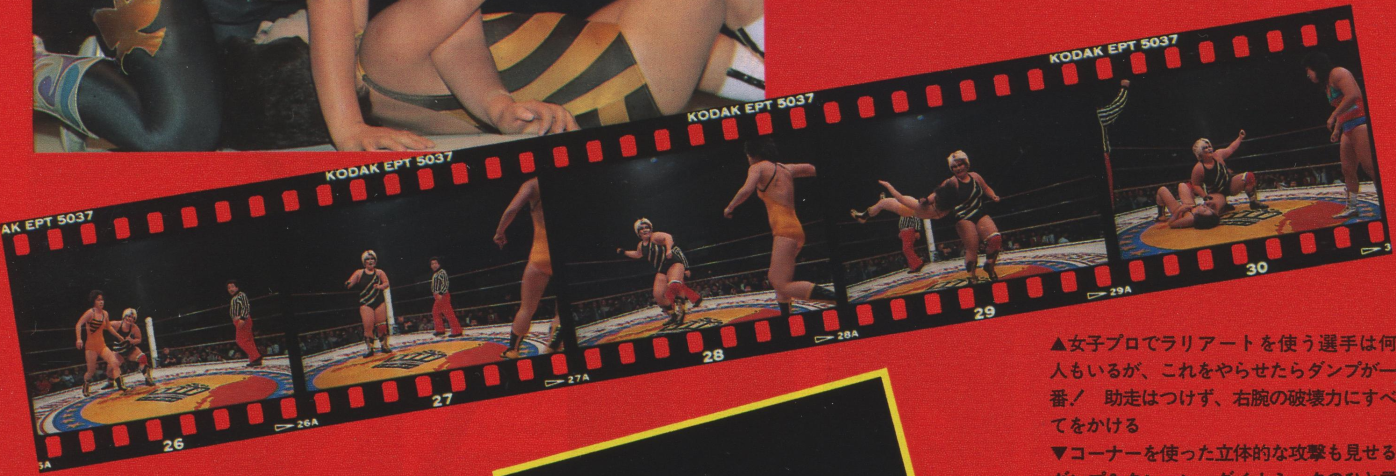
▲極悪コンビの手によって復活した、これがあの悪の技の名作、「人間絞首刑」だ!! かつてマミ熊野が開発したこの技は、マミの引退後、あまりに残酷なので、封印されていたのに…!! この状態で左右に振り子のように振られるのだから、まさに地獄！ 刑を執行された飛鳥、無残！

▶「極悪」と書かれたハタを持つダンプとクレーン。何がこの2人を、こうさせたのだろうか？

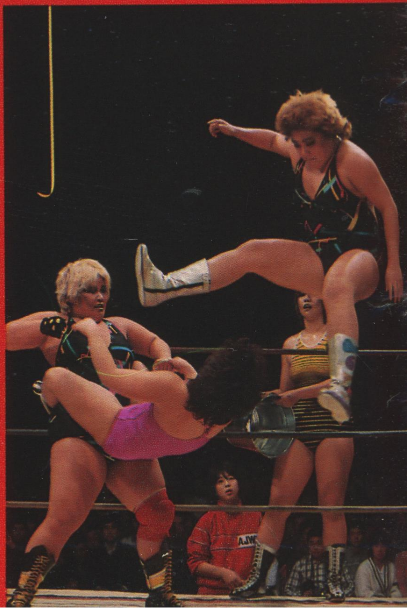
ヒロインなんかブッ飛ばせ！とダンプはいった

▲かつての同志だったデビルとも抗争を繰り返す。イスとチェーンの奪い合いは、男子プロレス顔負けのド迫力だ！
▼ダンプのよきパートナー、クレーン・ユウ。ヤジった客にはにらみかえす。この迫力が極悪コンビの真骨頂だ

▲「バカヤロウ！　てめえら地獄に落ちな！」通路で捨てゼリフをはくダンプ。近づいたら怖いですよ！



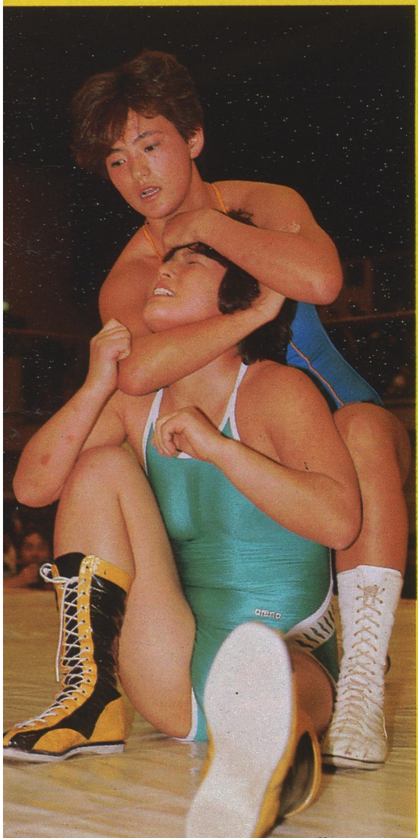
▲女子プロでラリアートを使う選手は何人もいるが、これをやらせたらダンプが一番！　助走はつけず、右腕の破壊力にすべてをかける
▼コーナーを使った立体的な攻撃も見せるダンプ＆クレーン。ダイナミックのひと言だ！



▲みんなの憎まれ役、ダンプ。力一杯ふるコブシは、ヒロインへのしっとなんでしょーかネ？
▶悪の力に自分のすべてをかけた松本。もうダンプを止めることは誰にも出来ない

私たち、いつかチャンピオンになって見せます！

▶優等生的イメージがなくなれば、由美ちゃんのレスリングはもっと面白くなりそう
▲ゴンゴンこと小倉由美が力一杯のボストン・クラブ

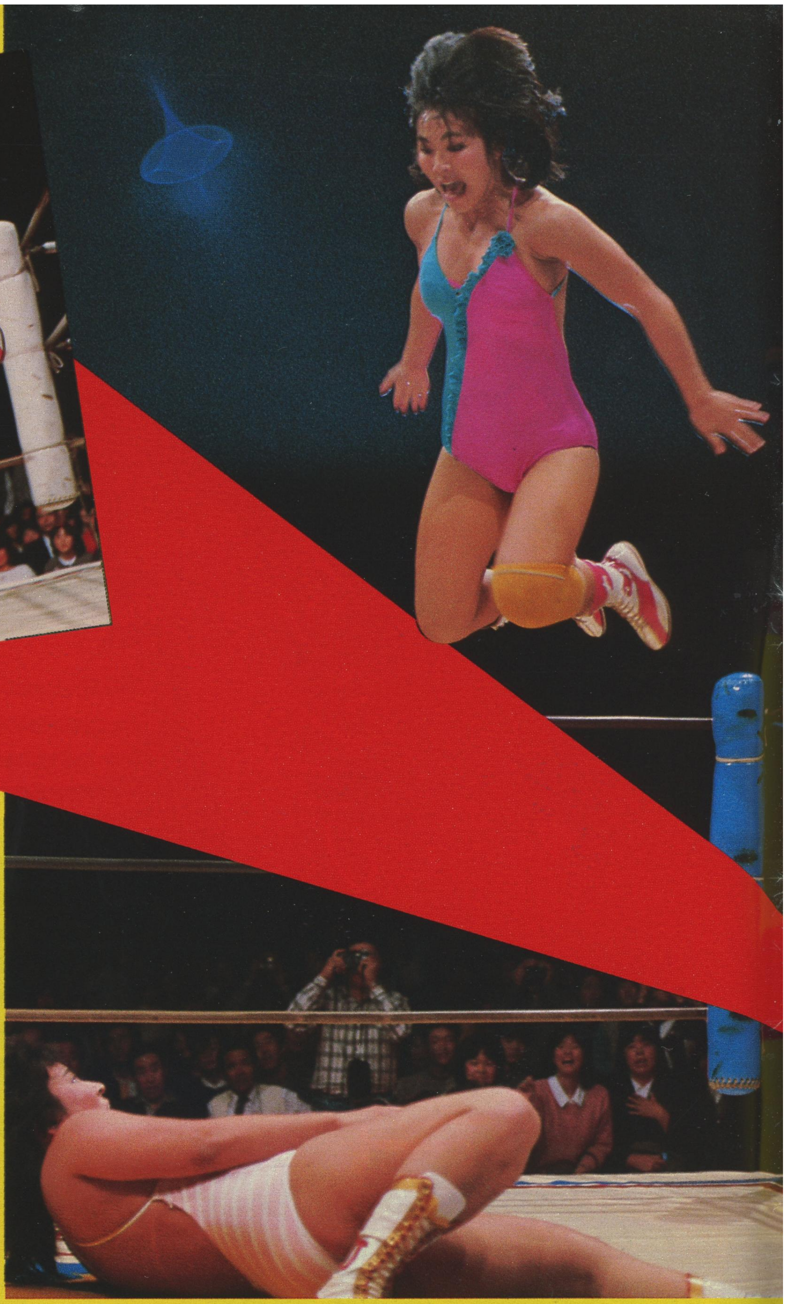


◀体重の軽い永友だが、運動神経はバツグン。小松をスリーパー・ホールドで締めあげる
▼まだまだ技の数の少ないエッちゃんこと加藤。でもグラウンド・ヘッドロックはがっちり決めてみせる

女子プロレスの前座を務める彼女達。試合の前はリング作り、試合中は売店の売り子、試合が終わればリングの解体…と、会場についたら休む間もなく動き回っている。

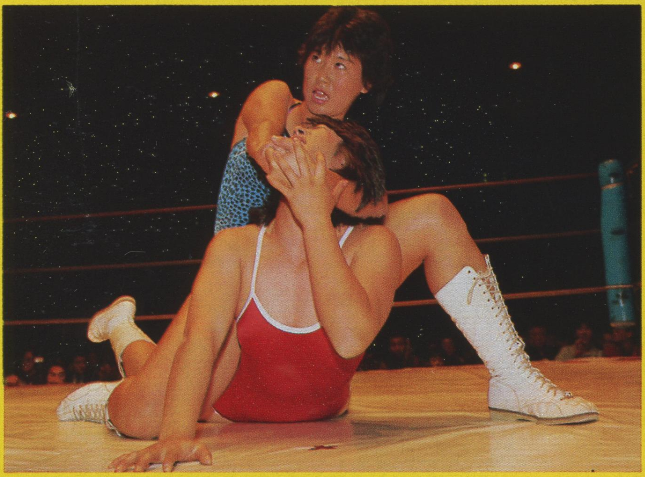
でも、心の中は、明日のスターになることで一杯。人の見ていないところで練習に励み、試合では少ない技を出して、全力で闘う。

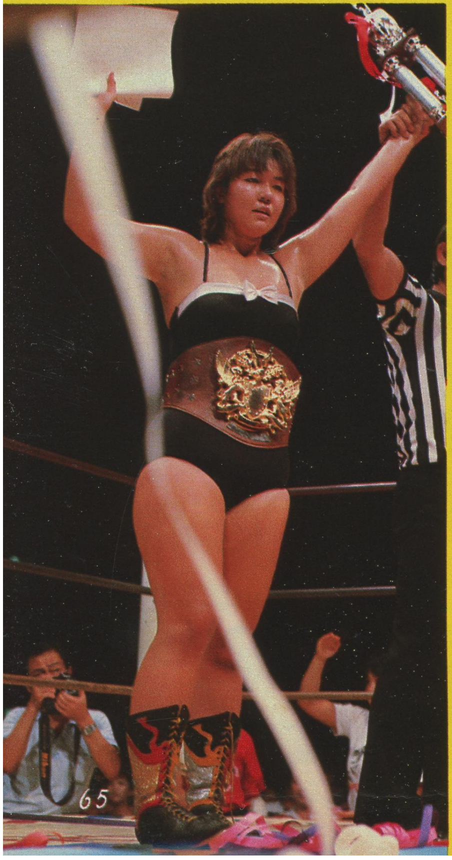
まだまだ青いリンゴのようなこの子達。これからどんな色づけがされ、どんな選手に、育っていくのだろう。



▲▶「欲のない記代」はもう返上! ジャガー相手に全力でぶつかる立野記代。大技も板についてきた

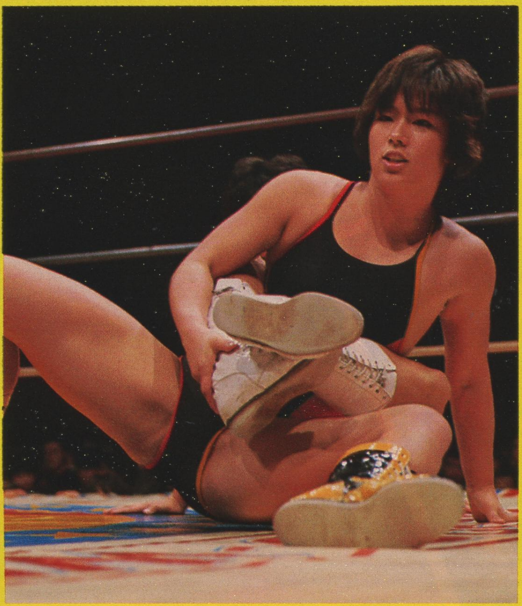
▼キャメル・クラッチで攻める斉藤。有望株らしく、決め方もダイナミックだ



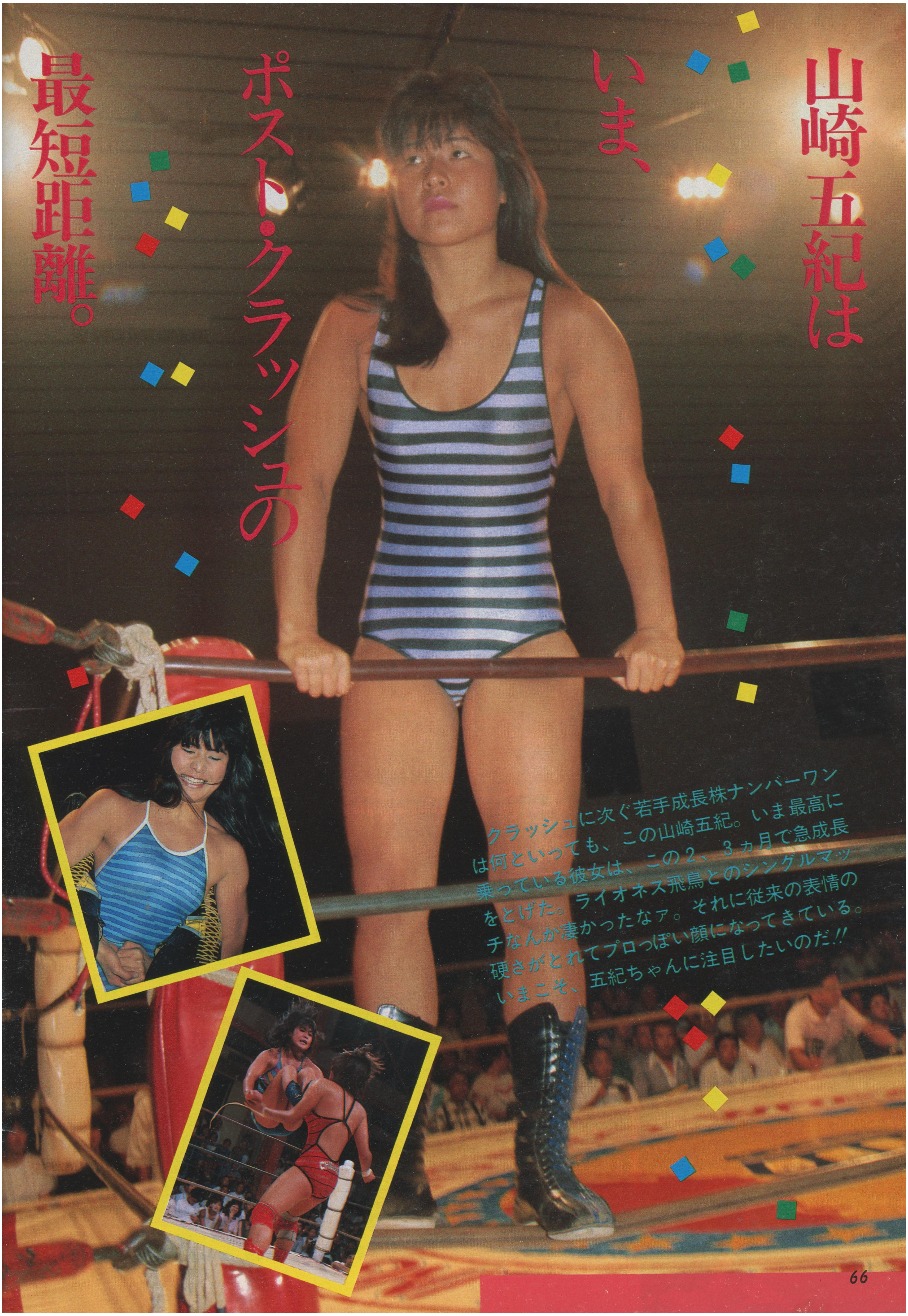


◀小倉を破り、全日本ジュニア選手権を獲得した中野恵子。まだ自分の試合スタイルをさがしている段階だが、自分のやる気を試合で表現できるようになった時、中野は大きなチャンピオンになるはずだ

▼若手のホープの一人が小松。またリング上ではとまどいの表情を見せることが多いが…



▲永堀のローリング・ソバットがタイミングよく決まる。彼女こそ、2年後のクラッシュ・ギャルズかな!?



山崎五紀は いま、ポスト・クラッシュの最短距離。

クラッシュに次ぐ若手成長株ナンバーワンは何といっても、この山崎五紀。いま最高に乗っている彼女は、この2、3ヵ月で急成長をとげた。ライオネス飛鳥とのシングルマッチなんか凄かったなァ。それに従来の表情の硬さがとれてプロっぽい顔になってきている。いまこそ、五紀ちゃんに注目したいのだ!!

PRO WRESTLING ALBUM ㊳ ガッツ・シリーズNo.24

ザッツ・レスラー・シリーズ

③テリー・ファンク
④アントニオ猪木
⑥力道山光浩
⑪ディック・スレーター
⑬ダスティ・ローデス
⑭メモリアル・レスラー
⑮ニューウエーブ7
⑯ザ・ヒール
⑰ザ・アマリロ
⑱タイガーマスク
⑲アントニオ猪木と過激なる軍団
⑳スタン・ハンセン　改訂版
㉑リングに咲いた恋人たち
㉒世界のベスト・タッグ
㉔ハルク・ホーガン
㉖ジャイアント馬場　改訂版
㉗Mr.プロレス
㉘アンドレ・ザ・ジャイアント
㉙ミル・マスカラス　改訂版
㉚リッキー・スティンボート
㉛タイガーマスクと3人の好敵手
㉜長州　力
㉝ルチャ・リブレ

ガッツ・シリーズ

㉞立ち上がれ!アントニオ猪木
㉟力道山・空手チョップ世界を行く　B5判
㊱さようならテリー・ファンク
㊲ウエスタンラリアートSTAN HANSEN
㊳タイガーマスクよ永遠に
㊴ブルーザー・ブロディ
㊵一番ハルク・ホーガン
㊶プロレス・イヤーズブック1984
㊷長州　力《維新への道》
㊸ダイナマイトキッド
㊹ディック・マードック&アドリアン・アドニス
㊺必殺技大集合
㊻前田日明
㊼チャンピオンズ
㊽藤原喜明
㊾激突!ジュニアヘビー級大戦争
㊿天龍源一郎
(51)これぞプロレスワンダーランド!!
(52)思いっきり女子プロレス
(53)いつも本気でシューティング
(54)出撃だ!　長州軍団
(55)スーパータッグNOW!
(56)いま、なぜか藤波辰巳
(57)アントニオ猪木VSブルーザー・ブロディ

バックナンバー③〜⑥定価470円/⑦〜㊻定価490円/㊼〜(55)定価500円※㉟のみ980円(56)、(57)580円
●送料200円(No.㉟のみ250円)

最寄りの書店でお求め下さい。書店にない場合でも注文されれば取り寄せてくれます。★直接小社にご注文の方は代金と送料を添えて、必ず郵便振替(振替口座・東京5-35824)でお申し込み下さい。

★品切れ①アブドーラ・ザ・ブッチャー/②ミル・マスカラス/⑤藤波辰巳/⑦スタン・ハンセン/⑧ジャイアント馬場/⑨ボブ・バックランド/⑩ジャンボ鶴田/⑫ドリー・ファンク Jr./㉓藤波辰巳〈改訂版〉/㉕マスクマン

恒文社

プロレスアルバム52
昭和60年1月15日発行 第6巻第1号 通算52号
編集兼
東京都千代田区三崎町3-10-10
電話編集(〇三)(二三八)〇一九五番

週刊プロレス

プロレスラーの過激な
生き方、ビッシリつまって

毎週木曜発売

DELUXE
デラックス プロレス
ベースボール・マガジン

プロレスの楽しさ追求！プロレスの哲学探求！
日本中にプロレスの輪、広げます。

毎月25日発売

BASEBALL MAGAZINE SHA
株式会社ベースボール・マガジン社
〒101東京都千代田区三崎町3-10-10

雑誌67773—52